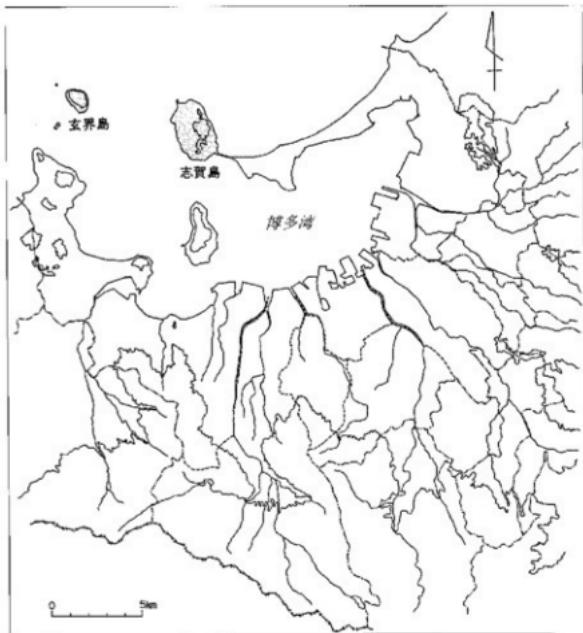


SHI KA NO SHIMA GEN KAI JIMA
志賀島・玄界島

—遺跡発掘事前総合調査報告書—

1995

福岡市教育委員会

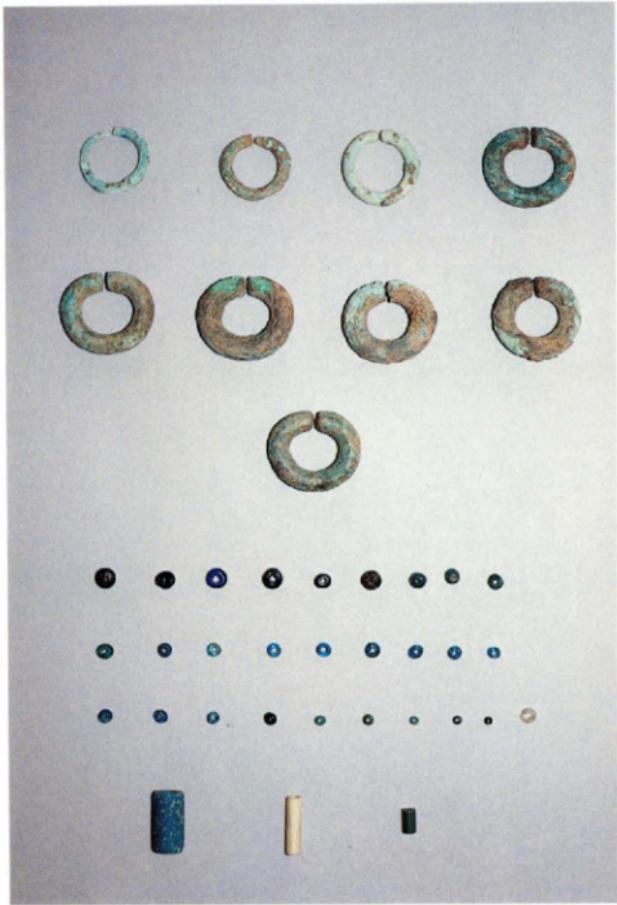


志賀島遺跡調査番号 9446
玄界島海底遺跡調査番号 9426

遺跡略号SKS
遺跡略号GKK

1995

福岡市教育委員会



中津宮古墳出土装身具

序

福岡市は古来より大陸文化攝取の門戸として栄え、現代におきましてもアジア諸国をはじめとして学術文化交流など、国際交流の事業を積極的に推進しているところです。

本市の玄関口である博多湾と玄界灘には小呂島、玄界島、志賀島、能古島があり、近年の急激な都市開発の中にあって、自然と歴史が残されている数少ない場所であります。しかしながら、玄界島、志賀島、能古島は都心より比較的近い距離にあり、近い将来リゾート開発が予想される地域でもあります。

このため、福岡市教育委員会では平成4年度に国・県の補助事業による遺跡発掘事前総合調査を能古島を対象にして実施したところです。平成6年度は「漢委奴国王」金印が発見されたことで知られる志賀島と、海底に中世から近世初期の陶磁器が散布している玄界島を対象にして遺跡発掘事前総合調査を実施しました。この調査は将来の開発に備え、事前にその地域の遺跡の範囲や性格等を把握すること目的にしています。

この度の調査では、志賀島の金印出土地に関する新たな調査結果をはじめ、中津宮古墳の発見、さらには玄界島沖海底遺物の調査など、多くの成果を得ることができました。

本書はその調査の成果を報告するものです。本書によって市民の皆様が遺跡を身近に感じるとともに、文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり快くご協力をいただきました玄界島と志賀島の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 刚

例　　言

1. 本書は平成6年度、福岡市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した、志賀島・玄界島の遺跡発掘事前総合調査の報告書である。
2. 本書に使用した遺構の実測は塩屋勝利、林田憲三、折居喜之、高木誠、春田城二、寺崎一弘、土肥貴弘が行い、遺物の実測及び製図は林田が行ったが、一部、英豪之の協力を得た。
3. 本書に使用した遺構、遺物の写真は林田が撮影した。
4. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
5. 本書の付図には志賀島遺跡分布図(1/10,000)、志賀島土地利用現況図(1/10,000)、志賀島表層地質図(1/10,000)の3葉がある。
6. 本書の執筆は第1章・第2章を塩屋、第3章を林田、第4章の1・2を塩屋、3・4を林田、第5章を林田、第6章の1を塩屋、2を林田がそれぞれ分担した。また、第3章で太刀打遺跡表採遺物の鉄滓の科学的分析と所見を大澤正巳氏にいただいた。
7. 本書の編集は塩屋の協力を得て林田が行った。
8. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査の経緯.....	1
2. 調査の組織.....	2
第2章 志賀島の地理と歴史的環境.....	3
1. 地理的環境.....	3
2. 歴史的環境.....	4
3. これまでの調査の成果.....	6
第3章 分布調査の記録.....	9
1. 調査の方法.....	9
2. 調査の概要.....	10
3. 調査の成果.....	20
第4章 試掘調査の記録.....	42
1. L 30区(叶ノ浜)の調査	42
2. E-3・4区(中津宮古墳)の調査	49
3. M-8区(裏遺跡)の調査	61
4. L-8区(堂山古墳)の調査	67
第5章 志賀島・玄界島の海底調査	70
1. 志賀島の海底探査.....	72
2. 玄界島の海底探査.....	82
3. 玄界島の潜水調査.....	87
4. 小結.....	97
第6章 まとめ.....	98
1. 志賀島調査の成果と課題.....	98
2. 海底調査の成果と課題	103
3. 英文目次 (Contents)	106
4. 英文要約 (Summary)	106

挿 図 目 次

Figure 1.	志賀島全景(勝馬沖上空より)	3
Figure 2.	志賀島遺跡分布図(1/20000)	5
Figure 3.	金印公園(南から)	6
Figure 4.	金印公園試掘トレンチ(T-1、T-2)配置図 (1/500)	6
Figure 5.	トレンチ(T-1、T-2)柱状土層模式図 (1/50)	7
Figure 6.	T-1トレンチ発掘作業風景(北から)	7
Figure 7.	T-1トレンチ土層断面(西から)	7
Figure 8.	勝馬地区高麗盤試掘トレンチ配置図(1/5000)	8
Figure 9.	試掘トレンチ地点遠景(南から)	8
Figure 10.	D-E-1区沖津宮(南から)	10
Figure 11.	D-E-1-2区遺物探査地点(北から)	10
Figure 12.	D-E-1-2区表探土器出土状況	10
Figure 13.	E-4区遺物表探地点(西から)	11
Figure 14.	K-3区弥五郎遺跡遠景(南から)	11
Figure 15.	K-3区弥五郎遺跡箱式石棺墓現況	11
Figure 16.	J-4区遺物表探地点(北から)	12
Figure 17.	N-6・7(1)区遺物表探地点(南から)	12
Figure 18.	N-6・7-(1)区表探ガラス小玉実測図(1/1)・ 写真	12
Figure 19.	M-8・9・10区遠景(南から)	12
Figure 20.	P-12-13区遺物表探地点(西から)	13
Figure 21.	P-12-13区表探鉄滓	13
Figure 22.	L-16-(1)区遺物表探地点(南から)	13
Figure 23.	H-22-(1)区遺物表探地点(西から)	14
Figure 24.	H-22-(1)区表探土器(1/3)	14
Figure 25.	I-26-(2)/I-26-27-(1)区表探土器実測図 (1/3)	14
Figure 26.	J-K-29-(1)区遺物表探地点(東から)	15
Figure 27.	J-K-29-(1)区表探土器(1/3)・写真	15
Figure 28.	H-27区蛇骨出土地点(南から)	15
Figure 29.	H-27区出土の蛇石	15
Figure 30.	Z-26(1)区遺物表探地点(南から)	16
Figure 31.	R-32-(1)区遺物表探地点(北から)	16
Figure 32.	R-32-(1)/T-S-31区表探土器(1/3)	16
Figure 33.	U-31-(1)区遺物表探地点(南から)	17
Figure 34.	N-O-33区(金印公園)遠景(東から)	17
Figure 35.	志賀島遺跡調査区割図(1/20000)	21
Figure 36.	表探遺物出土位置図1(1/2500)	22
Figure 37.	表探遺物出土位置図2(1/2500)	24
Figure 38.	表探遺物出土位置図3(1/2500)	26
Figure 39.	表探遺物出土位置図4(1/2500)	28
Figure 40.	表探遺物出土位置図5(1/2500)	30
Figure 41.	表探遺物出土位置図6(1/2500)	32
Figure 42.	表探遺物出土位置図7(1/2500)	34
Figure 43.	表探遺物出土位置図8(1/2500)	36
Figure 44.	表探遺物出土位置図9(1/2500)	38
Figure 45.	表探遺物出土位置図10(1/2500)	40
Figure 46.	L-30区(叶ノ浜)遠景(北から)	43
Figure 47.	L-30区(叶ノ浜)調査地点位置図(1/5000)	43
Figure 48.	L-30区(叶ノ浜)調査トレンチ配置図(1/500)	44
Figure 49.	L-30区(叶ノ浜)調査地点	45
Figure 50.	L-30区(叶ノ浜)調査地点トレンチ(西から)	45
Figure 51.	トレンチ上層断面図(1/80)	46
Figure 52.	Aトレンチ南壁土層(1-3)	47
Figure 53.	IIトレンチ東壁土層(1-2)	47
Figure 54.	Iトレンチ東壁土層(1-2)	47
Figure 55.	トレンチ出土遺物実測図(1/3)	48
Figure 56.	Aトレンチ出土遺物(1)	48
Figure 57.	Aトレンチ出土遺物(2)	48
Figure 58.	Iトレンチ出土遺物	48
Figure 59.	E-3・4区調査地点遠景(北から)	49
Figure 60.	E-3・4区調査地点位置図(1/5000)	49
Figure 61.	E-3・4区中津宮古墳位置図(1/5000)	50
Figure 62.	中津宮古墳現況(東から)	51
Figure 63.	中津宮古墳充堀状況(東から)	51
Figure 64.	中津宮古墳周辺測量図(1/200)	52
Figure 65.	古墳石室	53
Figure 66.	石室東廻壁	53

Figure 67. 石室西側壁	53	Figure 101. 地層探査機及び自動測量送受波器	71
Figure 68. 石室南側壁	53	Figure 102. 地層探査機記録器	71
Figure 69. 石室北側壁	53	Figure 103. データ処理パソコン(右)・GPS(左)	71
Figure 70. 中津宮古墳石室実測図(1/40)	54	Figure 104. 採集データー処理作業風景	71
Figure 71. 中津宮古墳埴丘土解断面図(1/40)	54	Figure 105. 勝馬沖海底探査区域(西から)	72
Figure 72. 石室内遺物出土状況	55	Figure 106. 勝馬沖海底等深度線図(1/10000)	73
Figure 73. 石室東側壁付近遺物出土状況	55	Figure 107. 勝馬沖海底地形状況図(1/10000)	74
Figure 74. 石室中央部付近遺物出土状況	55	Figure 108. P-1地点海底及び地層堆積状況	75
Figure 75. 石室出土遺物実測図(1/1、1/2、1/3)	56	Figure 109. P-2地点海底及び地層堆積状況	75
		Figure 110. P-3地点海底及び地層堆積状況	75
Figure 76. 石室出土遺物	57	Figure 111. P-4地点海底及び地層堆積状況	75
Figure 77. S K-01・02遺構実測図(1/20)	59	Figure 112. P-9地点海底及び地層堆積状況	76
Figure 78. S K-02出土状況	60	Figure 113. P-12地点海底及び地層堆積状況	76
Figure 79. S K-01・02出土遺物実測図(1/1、1/3)・写真	60	Figure 114. P-10・11地点海底及び地層堆積状況	76
Figure 80. M-8区調査地点A・Bトレンチ(東から)	61	Figure 115. 金印公園冲海底探査区域(東から)	78
Figure 81. M-8区調査地点D・Eトレンチ(北から)	61	Figure 116. 金印公園冲海底等深度線図(1/10000)	79
Figure 82. M-8区調査地点位置図(1/5000)	61	Figure 117. 金印公園冲海底地形状況図(1/10000)	80
Figure 83. M-8区調査地点トレンチ配置図(1/500)	62	Figure 118. A-A'地点海底及び地層堆積状況	81
Figure 84. M-8区調査地点トレンチ土解断面図(1/80)	63	Figure 119. B-B'地点海底及び地層堆積状況	81
Figure 85. Aトレンチ西壁土層(1-5)	63	Figure 120. 玄界島海底探査区域遠景(南から)	82
Figure 86. M-8区調査地点Cトレンチ(東から)	64	Figure 121. 玄界島海底等深度線図(1/10000)	83
Figure 87. Cトレンチ西壁土層	64	Figure 122. 玄界島海底地形状況図(1/10000)	84
Figure 88. S E-01完掘状況(南から)	64	Figure 123. P-5地点海底及び地層堆積状況	85
Figure 89. S E-01及びDトレンチ出土遺物実測図(1/3)	65	Figure 124. P-6地点海底及び地層堆積状況	85
Figure 90. S E-01及びDトレンチ出土遺物・写真	66	Figure 125. P-7地点海底及び地層堆積状況	85
Figure 91. L-8区調査地点遠景(東から)	67	Figure 126. P-8地点海底及び地層堆積状況	85
Figure 92. L-8区調査地点位置図(1/5000)	67	Figure 127. 玄界島海底道路潜水調査区域(南から)	87
Figure 93. L-8区堂山古墳(箱式石棺墓)位置図(1/500)	68	Figure 128. 玄界島海底遺跡潜水調査区域図(1/10000)	88
Figure 94. L-8区堂山古塚石棺墓周辺測量図(1/200)	69	Figure 129. 潜水調査区域グリッド設定図(1/2500)	89
Figure 95. 堂山古塚石棺墓完掘状況(南から)	69	Figure 130. グリッド・マーカー設置状況	89
Figure 96. 堂山古塚石棺墓現況(南から)	69	Figure 131. 玄界島海底道路潜湖開帯の状況	89
Figure 97. 堂山古塚石棺墓実測図(1/40)・遺構写真	69	Figure 132. 出土遺物分布図(1/200)	90
Figure 98. 志賀島・玄界島海底探査区域図(1/50000)	70	Figure 133. グリッド・ロープ海塁設置作業状況	90
Figure 99. サイドスキャナー・ソナー・誤受波器	71	Figure 134. D-H遺物出土位置図(1/100)・折り込み	91
Figure 100. サイドスキャナー・ソナー・カラー映像器	71	Figure 135. 海底遺物分布状況調査	91
		Figure 136. 玄界島海底道路出土遺物実測図(1/3、1/4)	92
		Figure 137. P-1(A区)鉛垂 海底出土状況	93
		Figure 138. P-1鉛垂	93

表 目 次

Figure 139. P-4 肥前系白磁碗 海底出土状況	93
Figure 140. P-4 肥前系白磁碗	93
Figure 141. D-1 唐津系皿（2枚重ね）海底出土状況	93
Figure 142. D-1 唐津系皿（2枚重ね）	93
Figure 143. H-2 唐津系皿（4枚重ね）海底出土状況	93
Figure 144. P-3（B区）蛸壺 海底出土状況	93
Figure 145. II-1 唐津系皿 海底出土状況	94
Figure 146. H-1 唐津系皿	94
Figure 147. H-9 唐津系大皿 海底出土状況	94
Figure 148. H-9 唐津系大皿	94
Figure 149. H-7 唐津系大皿 海底出土状況	94
Figure 150. H-7 唐津系大皿	94
Figure 151. H-17 唐津系大皿 海底出土状況	94
Figure 152. II-17 唐津系大皿	94
Figure 153. P-18 唐津系大皿 海底出土状況	95
Figure 154. P-18 唐津系大皿	95
Figure 155. H-18 唐津系片口鉢 海底出土状況	95
Figure 156. H-18 唐津系片口鉢	95
Figure 157. II-6 唐津系片口鉢 海底出土状況	95
Figure 158. H-6 唐津系片口鉢	95
Figure 159. H-4 唐津系瓶 海底出土状況	95
Figure 160. H-4 唐津系瓶	95
Figure 161. II-3 唐津系瓶 海底出土状況	96
Figure 162. H-3 唐津系瓶 海底出土状況	96
Figure 163. H-10 唐津系瓶 海底出土状況	96
Figure 164. H-10 唐津系瓶	96
Figure 165. H-5 唐津系壺 海底出土状況	96
Figure 166. H-5 唐津系壺	96
Figure 167. P-19 唐津系醬油甕 海底出土状況	96
Figure 168. P-19 唐津系醬油甕	96
Figure 169. 阿曾家山墓『筑前国熊風土記録緑絵図』	101
Figure 170. 中山平次郎博士金印出土推定地	101
Figure 171. 金印公開建設前の状況	101
Table 1. 鉄滓の化学組成	13
Table 2. 表掲遺物一覧表(1)	18
Table 3. 表掲遺物一覧表(2)	19
Table 4. 中津宮古墳出土耳環計劃表 (Figure. 75 : 23-31)	99
Table 5. 中津宮古墳出土小玉針附表 (Figure. 75 : 35-62)	99

付 図

付図 1. 志賀島遺跡分布図 (1/10000)

付図 2. 志賀島土地利用現況図 (1/10000)

付図 3. 志賀島表層地質図 (1/10000)

第1章 はじめに

1. 調査の経緯

博多湾を懷に抱いて玄界灘に面する福岡市は、初期稻作農耕遺跡の板付遺跡、弥生時代後期の大規模な環濠集落遺跡の雀居遺跡、古墳時代初期の前方後円墳である那珂八幡古墳、竪穴式石室から横穴式石室への過度的形態を示す竪穴系横口式石室の鷹崎古墳、古代の迎賓館である鴻臚館跡、さらには中世貿易都市博多の栄光を物語る博多遺跡群などをはじめ、古米から対外交渉の拠点であったことを示す遺跡が数多く残されている。

近年の福岡市は、都市機能充実のための公共交通網の整備、港湾整備、都心部の再開発事業、住宅建設等の各種開発が進行し、海に開かれたアジアの拠点都市を目指してめざましい発展を見せていく。この過程にあって、これらの開発に伴う埋蔵文化財の緊急調査も年々増加しているところであり、調査の効率化や円滑化を求める開発側の要望が強まっていることも事実である。

これまでの各種開発に伴う埋蔵文化財の調査は福岡市内各区に及んでいるが、近い将来には福岡市の島嶼地域にも大規模なリゾート開発等の事業が予想されるところである。福岡市には西区姪浜港から真北49kmの位置に小呂島、博多湾入り口に玄界島、博多湾の東部を限って伸びる海ノ中道先端に志賀島、湾内に能古島があり、小呂島を除いては都心部から比較的近い距離であることから、リゾート開発等の事業が日程にのぼっている。

このようなことから、福岡市教育委員会では平成4年度に国・県の補助を受け、能古島の遺跡発掘事前総合調査を実施し、すでに調査報告書を刊行しているところである(註1)。志賀島については「漢委奴国王」金印出土として知られ、万葉集にも数多くの歌が登場する歴史の島であり、近い将来の開発に備え早急に事前の調査を実施する必要があった。玄界島は1984年に福岡市立歴史資料館で海底遺物の分布調査を行っていたが不十分であり(註2)、より精度の高い調査を実施する必要があった。したがって、今回の調査は都市化の波が及びつつある志賀島と、港湾整備等が予想される玄界島の遺跡の範囲、性格を明らかにし、将来の開発に備えての基礎資料作成を目的としたものである。調査の概要と工程は以下のとおりである。

(1)調査前の準備(4月)

- ・地元説明会・調査の意図、内容説明、協力要請

(2)志賀島の分布調査(5月)

- ・分布地図にある遺跡を中心に全島を踏査、遺物の表面採集と散布範囲の確認

(3)志賀島・玄界島沖の海底探査(5月)

- ・サイドスキャナ・ソナー及びサブボトム・プロファイラーを使用し、海底地形の記録と地層探査

(4)玄界島の海底調査(6月)

- ・潜水による遺物の分布範囲の確認、写真撮影、記録

(5)志賀島の試掘調査(7月~10月)

- ・遺跡の範囲、性格の確認

註

註1. 管波正人編『能古島一能古島遺跡発掘事前総合調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第354集 1993年3月

註2. 垣原勝利「玄界島の海底陶磁」(『福岡市立歴史資料館研究報告第11集』) 1988年3月

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。

調査主体	福岡市教育委員会 教育長	尾花 剛		
	文化財部長	後藤 直		
	埋蔵文化財課長	折尾 学		
	埋蔵文化財課第2係長	山崎純男		
調査庶務	埋蔵文化財課第1係長	横山邦繼	中山昭則(前任)	内野保基(現任)
調査担当	埋蔵文化財課主席文化財主事	塙屋勝利		
調査補助	林田憲三			
調査作業	中村謙一郎 小林正美 小崎勘市 今泉春美 富永 壽 折居喜之 高木 誠 春田城 二 下澤雅昭 寺崎一弘 上肥貴弘 小林カメ子 中村郁子 馬崎千登美 柴田栄子			
整理補助	林田憲三			
地元協力者	阿曇磯和 荒木忠尚 泉 昭典 今泉治美 上田征一郎 奥村繁和 折居才蔵 折居正 憲 折居力曾 梶島芳之 日下部国男 高木順子 玉川桂 段上 孝 銚島喜代次 林 繁 平野恵達 前田敏明 松田清隆 山崎公明			
	福岡市漁業協同組合玄界島支所 福岡市漁業協同組合志賀島支所 福岡市漁業協同組合 弘支所 玄界島公民館 志賀島公民館 福岡県環境保全課 国民休暇村 志賀島を守る 会 志賀海神社			
調査協力	池田栄史 (琉球大学法文学部) 石原涉 (日本習字教育センター) 大谷光男 (二松学 舎大学) 奥村俊一 (筑紫野市教育委員会) 高倉洋彰 (西南学院大学) 高野晋司 (長 崎県教育委員会) 佐名 弘 (マリンプロサービス) 玉井敬信 (小都市教育委員会) 西健一郎 (九州大学文学部) 馬場保夫 宮武正登 (佐賀県立名護屋城博物館) 九州・ 沖縄水中考古学協会			
写真提供	朝日新聞西部本社写真部 KBC九州朝日放送 福岡市広報課			

今回の調査期間中、文化庁記念物課の西田道雄文化財調査官をはじめ、福岡県教育局文化課の橋口
達也、磯村幸男参事補佐から現地指導をいただいた。また、上記の方々のほかにも、玄界島と志賀島
の多くの皆様のご協力をいただいた。これらの方々に厚く感謝申し上げます。

第2章 志賀島の地理と歴史的環境

1. 地理的環境

志賀島は博多湾の東北部を限って延びる「海ノ中道」と呼ばれる海岸砂嘴の先端に位置する離島で、東西約2km、南北約3.5km、周囲約9.5km、面積約5.77km²の楕円形を呈する島である。しかしながら、1931(昭和6)年に全長205mの志賀島橋が架けられるまでは、湾頭に浮かぶ離島であった。島の海岸線は比較的単調で、全島が殆ど丘陵性の山地である。山地の主軸線はほぼ西北から南北に走り、東側は特に急峻で、高さ約50m前後の断層崖がそのまま海に迫っている。西側は高さ100m~50mの丘陵が海岸部におよび、その間に大小の谷が20か所余りに形成されている。河川は東南部の志賀島地区に天竜川、西部の弘地区に残田川、北部の勝馬地区に江尻川が流れ、それぞれの流域に小規模な沖積地が見られる。北部の勝馬地区を流れる江尻川流域が最も大きく、志賀島の穀倉地帯となっている。

島の地質は大部分が角閃花崗岩地帯で、風化が顕著である。とくに山地斜面や谷部では花崗岩風化土壤が厚く堆積しており、その中に花崗岩塊の包含が認められる。北部から中央部にかけての山地には、花崗岩層の上部に洪積層が堆積する所があり、島の北端部では、洪積丘陵の崖下に第三紀層の砂岩が認められる。また東南

部と西北部には閃綠岩が露出する所がある。海岸の地形は概ね磯浜をなしており、東部から北部にかけては花崗岩の岩礁地帯である。東南部から北西部の海岸は岩礁の間に砂丘が発達しており、夏には海水浴場に利用されている。

島の最高所は標高167mの潮見山で、現在は公園として整備されている。ここに立てば東は宗像地方を遠望し、相ノ島、宗像大島を望み、西は博多湾の能古島を経て今津、糸島地方が遠望できる。さらに北には玄界島を経て、小呂島、壱岐島も遠望でき、南は福岡市街から太宰府までが指揮の内にある。

島の気温は福岡市街地よりも平均3~4度高く、冬季も比較的温暖で、山地はシイ、マテバシイ、ツバキなど照葉樹の雑木林が発達し、その間を縫うようにスギ、ヒノキの植林が行われている。山地の斜面を利用してビワ、夏ミカン、イチゴなどの栽培が盛んである。水田は山地の谷間に溜池灌漑によって當まれ、前述した江尻川流域が最大の水田地帯となっている。

島の集落は南部の志賀島、西部の弘、北部の勝馬の三か所に形成され、全戸数790戸、人口は約3000人である。志賀島地区が島内最大の570戸あり、内300戸が漁業で、ワカメの採捕、サザエ・アワビの採取、一本釣漁、定置網漁、干魚製造を中心として営んでいる。農業は90戸で、ビワ、日向夏柑、イチゴ栽培など、園芸農業が主体である。弘地区は130戸、大半が漁業に従事し、ワカメの採捕、サザエ・アワビ・ウニの採取のほか、一本釣漁が行なわれている。しかしながら近世においては、潜水漁業専業の蟹（あま）浦であった。勝馬地区は専業農家90戸で、水田經營のほか、各種野菜、ビワ、ミカン、イチゴのハウス栽培などが盛んである。



Figure 1. 志賀島全景（勝馬沖上空より）

2. 歴史的環境

志賀島は1971（昭和46）年4月5日、柏屋郡志賀町から福岡市に合併された。この島の郡名が最初に文献に登場するのは『万葉集』で、巻第十六の「筑前国志賀白水郎歌十首」の奥書に「糟屋郡志賀村」と記されている。また、「欽日本紀」に引く「筑前國風土記」逸文には「糟屋郡資珂島」とあり、「延喜式」神名帳、『倭名類聚抄』にも糟屋郡と記され、古代律令時代から平安時代には糟（柏）屋郡に属していた。しかし、戦国時代の1542（天文11）年の「大内義隆大宰府序宣言」、慶長年間（1596～1614）の「筑前国圖」などには那珂郡とあり、1701（元禄14）年の「筑前国圖」では再び糟屋郡になっている。貝原益軒編の「筑前国統風上記」では那珂郡となり、その後1880（明治13）年1月に柏屋郡に編入されるまで那珂郡に属していた。志賀島の地名については、『日本書記』の「磯鹿」が初見で、古代においては「志賀」、「資珂」、「然」、「鹿」、「牡鹿」、「思香」、「四可」、「之賀」などの漢字が当てられている。

志賀島の人々が初めて歴史に登場するのは『万葉集』で、前記の「筑前国志賀白水郎歌十首」を含め、23首に志賀島が詠まれている。島内には10基の万葉歌碑が建てられており、合併以前の志賀町が4基、福岡市になって6基が建てられた。主なものをあげると、

ちはやぶる鐘の岬を過ぎぬとも

われは忘れじ志賀の皇神（巻七、1号歌碑）

志賀の山いたくな伐りそ荒雄らが

よすがの山と見つづ思ばむ（巻十六、2号歌碑）

志賀の浦に漁する海人明けければ

浦み漕ぐらし楫の音聞こゆ（巻十五、4号歌碑）

沖つ鳥鷗とふ船は也良の崎

たみて漕ぎ来と聞えこぬかも（巻十六、9号歌碑）

志賀の海人は瀧刈り塩焼き暇なし

斐梳りの小櫛取りも見なくに（巻三、10号歌碑）

などがあり、これらの歌で想像される古代の志賀島の人々の生業は、製塩、釣漁、潜水漁業な

ど漁撈活動に関するものである。しかし、「筑前国志賀白水郎歌十首」の奥書に記されているように、「住む郡を越えた人々が同じ船に乗り込む」海運業にも従事し、そのプロフェッショナルとして認められていたことも知られるのである。また、島の南部にある志賀海神社は、「古事記」、「日本書記」にみえる底津綿津見神、仲津綿津見神、表津綿津見神の三柱の神を祭神とし、「延喜式」神名帳に「志賀海神社二座^{坐名}神大」とあって式内社に列せられており、古代における海人の信仰の神であった。10世紀初頭の「三代実録」には、874（貞觀16）年に香椎廟の春秋の祭日に志賀島の白水郎男女各10人が風俗樂を奏したことがみえ、古代において志賀島と香椎宮が密接な関係にあったことを示している。鎌倉時代の1274（文永11）年と1281（弘安4）年の2度にわたって元軍が博多湾に襲来し、志賀島は2度とも戦場になった。『蒙古襲米経詞』や「八幡大菩薩愚童訓」には、文永の役で志賀島に取り残された元の軍船1艘を襲い120人の首を切ったこと、弘安の役に志賀島の海上や陸上で激戦が展開されたことなどが描写されている。

近世以降の志賀島は半農半漁の島として歴史の表舞台から遠ざかるが、再びこの島が脚光を浴びるのが「漢委奴國王」金印の発見である。その届出文書が『那珂郡志賀島村百姓苗兵衛申上ル口上之覚』で、これによると金印は天明4年の旧暦2月23日に、志賀島の「叶の崎」という所から発見されている。このニュースは福岡藩内はもとより全国に伝えられ、亀井南冥がいち早く『金印弁』を著わしたのをはじめ、上田秋成、本居宣長、皆川淇園、藤貞幹、伴信友など当時の著名な学者がさまざまな考説を発表した。その後明治時代までの金印研究は印文の解釈が中心であったが、大正時代以降は考古学的な視点からの研究も行われるようになり、現在までさまざまな角度からの研究が継続している。

3. これまでの調査成果

戦前の調査

志賀島で最初に考古学的な発掘調査が行われたのは大正時代に遡り、福岡日日新聞社（西日本新聞社の前身）の主催で、1913（大正2）年

の7月26日と27日の2日間実施された（註1）。この調査には考古学者の中山平次郎博士も参加し、初日に地元で「唐人墓」と伝承されている古墓、2日目に金印出土推定地および西側14.5m離れた松山が発掘され、前者からは人骨、赤色土器、陶器、鉄刀、宋銭などが出土している。金印出



Figure 2. 志賀島遺跡分布図 (1/20000)

土推定地は、当時志賀島内で唯一人金印出土地を伝聞していた某病老夫の指摘による地点で、発掘では石棺などの遺構は発見されなかつもの、形態不明の須恵器片が出土している。その後1922（大正11）年3月になって、発掘された金印出土推定地の跡に「漢委奴國王金印發光之處」の記念碑が建立された。



Figure 3. 金印公園（南から）

続く調査は1932（昭和7）年11月に福岡男子師範学校内に発足した福岡県郷土教育研究会によるもので、その成果は1935年7月に刊行された『志賀島の研究』郷土研究第一輯第二章の「考古探訪」に報告されている。それによると、志賀海神社横から勝馬に通じる山道の途中の高松という所から発見された石包丁が報告され、これは今でも保存されている。唐人墓現地の状況は、五輪塔や板碑が草に埋もれて散乱し、近くに組合せ式石棺の蓋石が半没していると述べられている。遺跡・遺物の分布状況については、通称堀太郎という地点での無数の弥生土器の散布、勝馬の西福寺裏山（堂山）頂上の組み合せ式石棺、そこから北方に対峙する弥五郎塚の組合せ式石棺と須恵器片の散布、さらに高松の弥生土器片の散布状況が報告されている。

最後の調査

調査の最初は堂山の箱式石棺墓の発掘で、1956（昭和31）年に地元による桜の植樹作業中

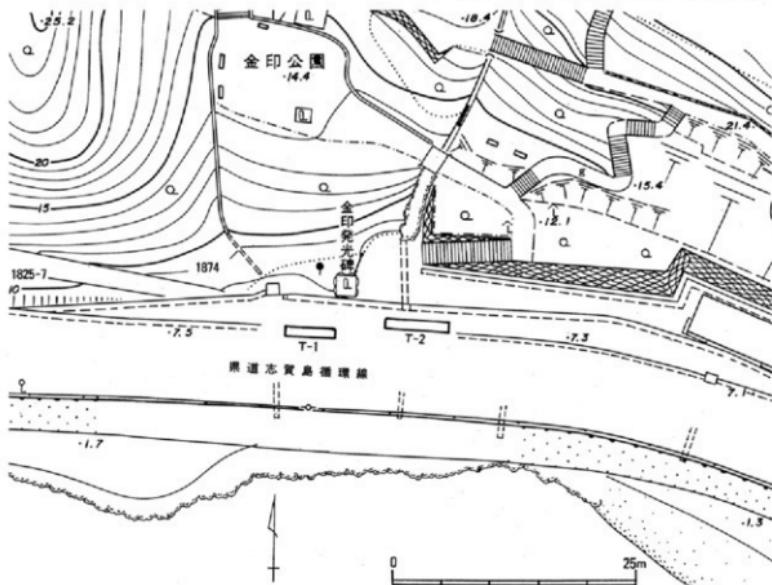


Figure 4. 金印公園試掘トレンチ（T-1、T-2）配置図（1/500）

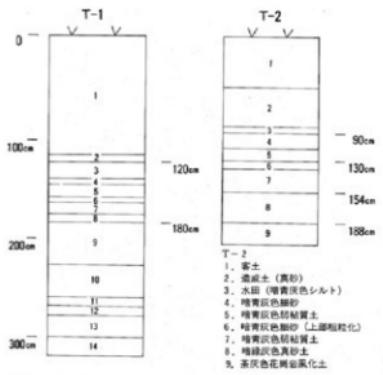


Figure 5. トレンチ (T-1, T-2) 柱状土層模式図 (1/50)



Figure 6. T-1 トレンチ発掘作業風景 (北から)



Figure 7. T-1 トレンチ土層断面 (西から)

に偶然発見されたものである。この調査は九州大学医学部解剖学教室が行い、石棺の中から男女2体の人骨と、ガラス小玉が200個近く出土した(註2)。

これに続く発掘調査は、森貞次郎・乙益重隆・渡辺正気氏等によって、1958(昭和33)年の4月30日からの2日間と翌年の3月25日からの6日間、勝馬地区で行われた。この調査の契機となつたのは、1947(昭和22)年4月、故前田富蔵氏(現当主敏明氏)宅の井戸掘り工事中に、地下10尺の深さから発見された細形銅劍鋒型である。これはそのまま前田氏宅に保管されていたが、1958年3月に森氏等が知ることになったものである(註3)。1958年の発掘地点は鋒型出土地点の南側に接して方1.5mのトレンチを設定し、深さ2.5mまで発掘された。須恵器、土師器のか、弥生後期終末の西新町式土器、中期の須恵式土器、石劍片、粘土塊などが検出された。翌年の発掘は、その東側の低い台地の長さ110m、幅60mの範囲に11か所のトレンチが設定され、鋒型出土地点から50m東側のA地点からの弥生・古墳時代の遺物が出土している。この森氏等の報告には、11か所の弥生時代の遺跡分布が示され、高松出土の石包丁や斐太郎出土の石戈の実測図が初めて紹介されている(註4)。

1973(昭和48)年には、福岡市経済局が「漢委奴國王金印発光之處」記念碑の後背地の畠地(面積6,100m²)に金印公園建設の計画を立て、このための事前調査が行われた。調査は九州大学考古学研究室を主体とする金印遺跡調査団が担当し、8月20日から26日までの建設予定地の発掘調査、翌年2月の延べ5日間にわたる一般調査の成果が1975年1月に刊行されている(註5)。建設予定地の発掘結果は、金印に関連する遺構・遺物は発見されず、歴史時代の須恵器片、白磁片、瓦質土器片が少量出土している。一般調査の成果では、これまで地元で志賀島の歴史探求をされてきた故北畠菊藏氏、日下部国男氏などが採集された考古資料が網羅され、繩文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代の志賀島が

初めて考古学的に集大成されたものである。

近年の埋蔵文化財事前調査

福岡市教育委員会では、各種開発事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の事前調査を実施しているが、志賀島での最初の調査は、福岡市土木局による金印公園前道路の拡幅工事に伴うもので、1989年12月6日に埋蔵文化財課の横山邦繼、吉留秀敏、佐藤一郎が行い、旧福岡市立歴史資料館の塙屋勝利が立会った。金印が水路修理工事中に発見されたという記録に基づき、トレンチは金印発光碑の西側道路中央の旧谷部に2か所設定した(Fig. 4)。北側のトレンチT-1は長さ5m、幅1.2mで設定し、地表下1.2mで旧水田面、1.8mより下位で有機質を含む黒色粘土と粗砂が堆積し、3.25mで砂礫層に達した。南側のトレンチT-2は長さ6.5m、幅1.2mで設定した。地表下0.9mから1.12mで水田面を確認し、1.3mで灰色粘質土、1.54mで暗緑灰色真砂土、1.88mで茶灰色風化花崗岩に達する(Fig. 5)。暗緑灰色真砂土中から14世紀代の土器器片が出土した。

以上の所見から、調査地点は水田が形成される以前、14世紀頃までは疊層岩盤上にグライ化土壤、粘質土、細砂が厚く堆積したラグーン状を呈していたことが判明し、金印の時代に何らかの造構が構築される状況ではなかったことが確認できた。

続く調査は農林水産局による勝馬寺浦地区のは場整備事業に伴うもので、1993年3月8日と9日に、約7.2haを埋蔵文化財課の菅波正人が踏査と試掘調査を行った。翌1994年2月10日と2月18には、その東側3.2haを長家伸が試掘調査を行った。丘陵は花崗岩風化土が露出しており、遺物包含層や造構の存在は全く認められなかつた。谷部は計17本のトレンチを設けて試掘したが(Fig. 8)、造構・遺物は検出されず、古くは沼池の状態であったことが知られた。

小 結

大正初期から現在までの調査成果を概観したが、金印出土推定地を含め、縄文時代から歴史時代の遺物出土地は24か所が知られている。今



Figure 8. 勝馬地区高麗窯試掘トレンチ配置図 (1/5000)



Figure 9. 試掘トレンチ地点遠景 (雨から)

回の調査はこれまでの調査成果を踏まえ、金印出土遺構の追跡と、これまで知られていた各時代の遺跡の面的な広がりを把握することに主眼を置いた。

註

- 註1. 「唐人墓と元寇史蹟」(福岡日日新聞1913(大正2)年7月27日)、「金印発掘地の新発見」(福岡日日新聞1913(大正2)年7月29日)
- 註2. 渡辺明夫・崎口達也・永井昌文「衆ノ上」(金印遺跡調査团「志賀島—漢委奴國王」金印と志賀島の考古学的研究) 1975年1月)
- 註3. 森貞次郎「福岡県志賀島の糸生遺跡」(『九州考古学』3・4号) 1960年9月)
- 註4. 森貞次郎・乙益重隆・渡辺正氣「福岡県志賀島の糸生遺跡」(『考古学雑誌』第46巻第2号) 1960年9月)
- 註5. 金印遺跡調査團「志賀島—漢委奴國王」金印と志賀島の考古学的研究) 1975年1月

第3章 分布調査の記録

1. 調査の方法

志賀島の遺跡発掘事前総合調査では、まず全島を踏査し、遺物の表面採集を行なった。採集した遺物の出土地点を詳細に記録するために精度の高い地図を利用した。この地図には採集した遺物の出土地点及び散布の範囲を示した。また志賀島の細部地域にわたって地形的特徴を把握することに努め、遺物の採集地点やその周辺地域が遺跡として立地可能な場所であるか、その評価をした。今回踏査のために採用した基本地図は福岡市都市計画図（1/2500）の志賀島全島を6地域（白瀬86、志賀島神社87、志賀88、勝馬96、弘97、金印98）に分割したものである。この基本地図（1/2500）から1/5000、1/10000の二種類の縮小した志賀島全島図を作製した。これらは（Figs. 2、8、35、47、60、61、82、92、106、107、116、117、121、122、128、付図1～3）の地図として使用した。

福岡市都市計画図（1/2500）を東西の座標軸にそって全域を100mを1単位として区割りをし、調査区域を地図上に設定した。調査区域については志賀島全島域を西側から東へアルファベットを使用して、A、B、Cから始まりX、Y、Z、AA、BBで終わる28区に東西を分割し、さらに北側から南へ1、2、3で始まり、34、35、36で終わる36調査区に全島域を南北に数字を付けて分割した。これにより個々の調査地点は東西南北の座標区割りに従って先頭にアルファベット、続いて数字、更に必要な場合には枝番号を（ ）を付けて記録することにした。（例、A-1、B-2-(3)）また調査地点が2区にわたる場合には（例、A-B-1-(1)、B-C-2-3）のように、「中グロ」を使って記録することにした。志賀島全島を調査区割りに分割する方法は「能古島」の調査で行なわれた方法を基本的に踏襲したものである。

全島にわたって踏査した区域、更に遺物の表面採集を行なった地点を記録するために100×100m四方の範囲を最小単位の調査区域とする東西に4調査区、南北に6調査区の計24調査区を載せる基本的な中調査区域地図を20頁（Figs. 36～45）を作製し、この中調査区域地図を踏査中に持ち歩き、遺物の表面採集地点・散布範囲や踏査した範囲を同時にこの中調査区域地図に色分けして記録した。

これ迄に行なわれた志賀島全島の考古学調査の成果である志賀島遺跡分布図（Fig. 3）を、今回の遺跡調査区割図（Fig. 35）と比較すると、島の東側には特に、区割りしたグリッドR-3からR-23迄にかけての南北に線を引いたラインより東側の玄界灘に面する海岸部までの地域は島でも最も陥深い地形を呈する所であり、土地利用現況でも森林として、その利用が限定されているため、この地域の踏査をより困難なものにしている。

この地域は遺跡の存在する可能性が低い場所であると評価し、この地域は今回の島の踏査から省くことにした。これ迄に確認された遺跡は島の南側の博多湾に面した志賀地区と西側の弘地区を中心とした地区、更に島の北側の玄界灘に面した勝馬地区に集中しているために、今回の分布調査でもこれらの地域ではより緻密な踏査を行なった。更に既に確認された遺跡に対しは再度遺跡の確認を行い、遺跡の現況を把握することに努めた。分布調査は弘地区的叶ノ浜地点から始め、引き続き志賀地区、更に弘地区的中心部地域、金印公園付近、勝馬地区へと進めた。志賀島の踏査は水稻栽培が始まる以前に終了させる必要があるため、5月中にはほぼ分布調査の目的を達成して、踏査を終了した。

2. 調査の概要

勝馬地区 (Fig. 35~41)

島の北半分を占める地域である。玄界灘に面した北端には下馬ノ浜、舞能ノ浜の海浜、江尻川の沖積地が発達している。

沖津宮 (Fig. 10)

沖津宮はD・E-1・2-区に所在している。島の北西端の明神鼻より100m沖合に位置し、標高18mの岩礁性の小さな島で、頂上部には小さな社が建立されている。明神鼻からこの島までは潮が引けば海底が露出する潮間帯である。頂上部には平坦地があり歴史時代の遺構の存在する可能性もあるが、表探した遺物はない。しかし潮間帯 (Fig. 11) では遺物の採集ができ、須恵器、土師器などを含む多量の近世国産陶磁器 (Fig. 12) が見つかった。明神鼻の西側約150m付近には陸地から沖へ延びる石組列があり、海岸の砂浜にその一部が現われている。これは小規模な防波堤の痕跡であると云われている。明神鼻にある中津宮の丘陵地の西側に勝馬小学校があり、校庭の西側に東西に延びて海に達する小さな暗渠が現存している。これは内陸からこの地点を通り海へ流れ込んでいた江尻川の古代の流路を復元する資料となると考えられる。江尻川の河口に立地した港の存在は昭和初期まで、地元の人々の言い伝えにもある。

中津宮丘陵

中津宮丘陵はE-3・4地点に位置している。標高18mの丘陵頂上部には社がある。社の裏の敷地を北側に拡張した折り、頂上部の壁の断面に甕の破片を見たという情報もあるが、現在は全く確認できない。頂上部に達する参道の小径が海岸部及び陸地側からあり、海岸からの参道には海の転石を利用した階段が設けられている。石段の最上段は「コ」状を呈した石の配列を確認し、残存している古墳石室の石組の上部構造であることが判明した。参道の脇の丘陵斜面で弥生土器、土師器などの破片を探集した。



Figure 10. D・E-1区沖津宮（南から）



Figure 11. D・E-1・2区遺物表探地点（北から）

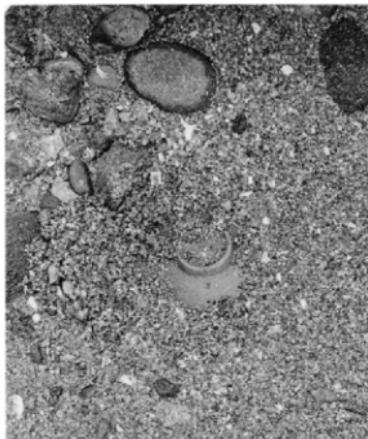


Figure 12. D・E-1・2区表探土器出土状況

表津宮丘陵

中津宮丘陵地より200m東に標高18mの東西に延びる低い丘陵地がH-3区に存在する。この丘陵は勝馬内陸部から流れ出た江尻川が大きく迂回して舞能ノ浜の海に達する地点にある。ここには以前に志賀海神社の表津宮があった場所である。この丘陵頂上部 (Fig. 13) では須恵器の环蓋の破片を採集した。

弥五郎

江尻川が沖積地の先端部西側から大きく東へ迂回して、海に達する地点の東側に立地する洪積丘陵地 (Fig. 14) に弥五郎遺跡箱式石棺墓がある。標高は24m、東西約200mの細長い丘陵は海岸部と内陸部を隔てる。その背後には良好な水田耕作地が広がる。頂上部は尾根状をなしていない、平坦部は殆ど見られない。松を含む雜木林が生い茂り表面採集を行なうには困難な自然条件をしている。丘陵の北側は開発により大きく削られている。頂上部の東側寄りの最も標高のある地点に箱式石棺墓が1基存在していることが昭和30年代に既に知られていた。今回の調査では石棺墓の位置を確認し記録写真を撮った。この石棺墓 (Fig. 15) およそ南北に主軸をもち、両側の側壁の板石が平行して2枚存在していることが今回確認できた。石棺墓の周辺は緩やかな傾斜面をなしているが、周辺では他に石棺墓を確認できなかった。30年代には既に墓は荒らされており、その当時を知る在住の人は石棺内に鉄製の刀劍らしきものが存在したこと



Figure 13. E-4区遺物採集地点（西から）

記憶している。今後本格的な調査を必要とする地点である。この丘陵の南側は東西に広がり、所謂弥五郎地下点J-4-(1), J-K-4-(2)の水田、畑に利用された開けた地域がある (Fig. 16)。標高が8~24mあり、西に向かって緩やかな傾斜面が東側へと続く。この地点では弥生土器、土師器、須恵器、近世国産陶器などを採集した。

高麗壁

F-13・14区は高麗壁地区の西側隅に位置している。散布地は南側へ緩やかに上る段階状の斜面に立地し、斜面の東西両側に標高50m前後の山塊が迫る。この山塊の間に開けた土地は水田、畑として利用されている。遺物が採集できるのは標高22~32mの間である。遺物は多くないが、弥生土器、須恵器、土師器、中国白磁、近世国産陶器、土鍾などがある。



Figure 14. K-3区弥五郎遺跡遠景（南から）

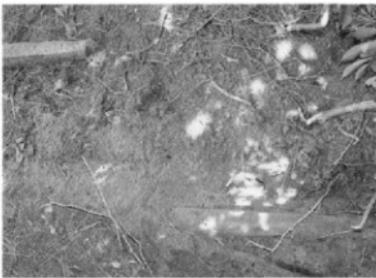


Figure 15. K-3区弥五郎遺跡箱式石棺墓現況



Figure 16. J-4区遺物表採地点（北から）



Figure 17. N-6・7-(1)区遺物表採地点（南から）

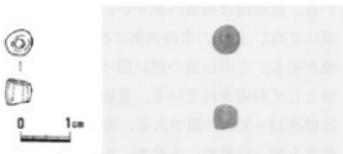


Figure 18. N-6・7-(1)区表採ガラス小玉実測図（1/1）

江尻川冲積地の周辺地

勝馬の江尻川冲積地の周辺地域の踏査では、江尻川右岸の丘陵西斜面、M・N・O-6・7区で遺物の採集を行なつた。この地点は西から東へと緩やかに階段状に標高が20~46mまで上がる。N-6・7-(1)地点 (Fig. 17) は4段程のテラス状になった比較的開けた台地が標高30~36m間にあり、このテラスの北側の端は比較的急な崖となって落ち、崖下には東の山塊より小川が流れ下る。この小川の流路付近では以前から弥生土器が採集されている。テラスは以前、宅地とし

て利用されていたが、今は雑木林が茂る荒地に変わったり、苺栽培用のビニールハウスが建っている。このテラスより上部のテラスでは柑橘類の栽培が行なわれている。テラスの段落ちの斜面の断面には厚さ50cm程の灰褐色の包含層が観察される。この包含層からは弥生土器、土師器、須恵器、格子目の叩きをもつ瓦片、さらにガラス小玉 (Fig. 18) を1点を採集した。

江尻川が上流の谷部から開けた沖積地へ流れ出る付近にL-8区の狭い平地がある。この地点は江尻川の右岸に隣接して細形銅劍鉗型が出土した井戸や、左岸には箱式石棺墓が出土した堂山の丘陵が急迫する地域である。この地域以外に谷部の江尻川添い右岸の東斜面 (Fig. 19)、M-9区、N-8・9区、江尻川左岸の西斜面のN-10区、L-10・11区、M-10・11区などは標高24~44m間にあり、これらの地点では弥生土器、土師器、須恵器、近世国産陶磁器などが採集できた。M-8区では細形銅劍鉗型が出土した前田氏所有の畠で試掘トレンチによる遺構の確認調査を行なった。更に堂山の標高36mの丘陵頂上部には昭和31年に発掘調査された箱式石棺墓があり、南北に延びた細長い丘陵の尾根には祀り墓が他の場所からこの石棺墓周辺に集められている。それ以来、尾根は徐々に削平され、尾根の東側の急斜面は崩落を続いている。丘陵の西側斜面は耕作地としての開発が迫っている。丘陵部での表採遺物は確認されなかった。



Figure 19. M-8・9・10区遺景（南から）

太刀打（P-12・13）区表採鉄滓の金属学的調査



Figure 20. P-12-13区遺物表採地点（西から）

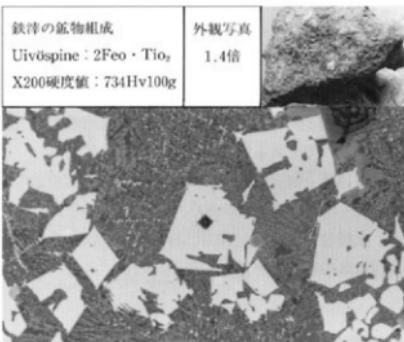


Figure 21. P-12-13区表採鉄滓

Table 1. 鉄滓の化学組成

試料	超純	Total Fe	Metallic Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	MnO	TiO ₂	V	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Cu
SKO-1		34.08	0.14	36.39	8.08	23.86	64.6	4.71	1.58	1.68	0.718	0.61	10.55	0.39	0.58	0.54	0.006

20×15×9 mmで10gの小塊鉄滓である。表裏共に淡茶褐色を呈し、木炭痕と小気泡を発した緻密質鉄滓であり、表面に石英粒が数点付着し、破面は小豆色で気泡なく緻密な炉内滓である。鉱物組成は淡灰白色多角形結晶のウルボスピネル (Uvöspinel : 2 FeO · TiO₂) と、淡褐色木ずれ状のファイアライト (Fayalite : 2 FeO · SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグ等から構成されて、砂鉄製鍊滓の品群である。ウルボスピネルの組織はピッカース断面硬度値が734Hvという数字からも同定された。

鉄滓の化学組成はTable 1.に示すように、砂鉄特有元素の二酸化チタン (TiO₂) が10.55%と高く、バナジウム (V) 0.39%を含み、全鉄分 (Total Fe) 34.08%レベルからも製鍊滓 (砂鉄を木炭でもって還元したときに排出される一次滓) に分類される。

なお、該品は福岡平野で出土する製鍊滓としてはチタン濃度の高い部類に属し、随伴微量元素は酸化クロム (Cr₂O₃) 0.54%、五酸化磷 (P₂O₅) 0.58%と多いことを特徴とする。勝馬地区周辺にこの様な砂鉄賦存があつて製鍊操業を行なった可能性が考えられる。今後炉跡の探索も課題となろう。ただし、太刀打という地名が鍛冶工房の反映であるならば、鉄滓出土地点内で

鍛冶原料荒鉄の小割選別場としての機能も考えられる。鉄滓は鉄塊抽出後の残滓といえる。

(大澤正巳「勝馬地区：太刀打跡 表採鉄滓の金属学的調査」)

ガラス小玉 (Fig. 18)

僅かに緑がかかった青色、透明感はない。穿孔のある上下両面はやや丸みを持つが、研磨が施されている。長さ5 mm、径5 mmを測る。

勝馬内陸部奥地

標高74~84mに溜め池があり、開けた土地は殆どないが、斜面を利用して立地しているのが太刀打 (Fig. 20) である。ここは北側に旧道が存在しており、勝馬と志賀地区を結ぶ要所であった。この急斜面を登り詰めた地点に狭いテラス



Figure 22. L-16-(1)区遺物表採地点（南から）

がある。ここには小さな祀があり、鍛冶工房がこの近くに存在したことが勝馬地区に伝承されている。この地点からは鉄滓、土師器、近世国産陶器などが今回の調査でも採集できた。

勝馬地区と弘地区とのほぼ中程に江尻川の水源のひとつでもある原江池がある。この付近のL-15・16区、M-16・17区では東斜面、南斜面の標高58～80mに耕作地があり、この地点で弥生土器、土師器、中国白磁(明代染付碗の破片)、近世国産陶磁器などを採集した。



Figure 23. H-22-(1)区遺物表採地点（西から）

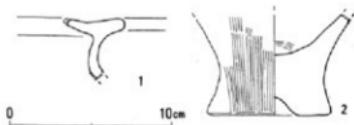


Figure 24. H-22-(1)区表採土器 (1/3)

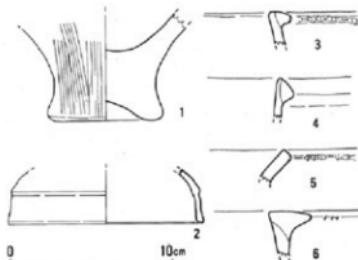


Figure 25. I-26-(2)/I-26・27-(1)区表採土器 (1/3)

弘地区 (Figs. 42-43)

H-I-22・23区

弘地区は志賀島の西側、博多湾に面した地域で勝馬と志賀との中央付近に位置する。この地域の中心地は沿岸漁業に従事する弘漁港である。漁港を中心にそれを取り巻く様に海岸沿いに発達した集落の後背地に緩やかな西斜面の平地があり、平地の南端を東から流れる下る残田川が南側の山塊と隔てる。この平地は残田川が内陸の狭い谷部から土砂を斜面台地に流し、この地点に扇状地を形成している。残田川はその水量は決して多くはないが、夏期でも涸れることはない。狭い扇状地は東西が200m、南北が100mの小規模なものである。上流地は畑作が行なわれ、下流では水田耕作が行なわれている。この扇状地はH-I-22・23区の範囲に入る。この地点 (Fig. 23) では多量の遺物が採集された。遺物量も採集地点によって異なり、扇状地の先端部の標高6～8m付近の水田では多量に採集できた。とくに、弥生土器中期の城ノ越タイプの甕の破片が多く見られる。その他の表採遺物に黒曜石、須恵器、土師器、近世国産陶磁器、土鍾などがある。

H-22-(1)区表採土器 (Fig. 24)

1は壺形土器の口縁部破片で内側に大きく跳ね上る鋸先口縁をもつ。口縁部外面には刷毛目が施される。その他は横ナデ調整痕が見られる。2は甕の底部で内外面とも刷毛目の調整が施され、外底部は横ナデである。砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。復元底径は7.6cmを測る。

H-I-26・27区

弘から海岸添いに県道志賀島循環道路を200m程南に下がると、内陸の山間部へ向かう道路が現われる。この道路に入ると、すぐ北側に標高6～18mに水田、畑に利用された比較的開けた平坦部がある。

この地点はこれ迄遺物の確認はされていなかったが、今回の調査では黒曜石、石包丁、弥生土器、土師器、須恵器、近世国産陶器、土鍾などが採集できた。



Figure 26. J+K-29-(1)区遺物表探地点（東から）

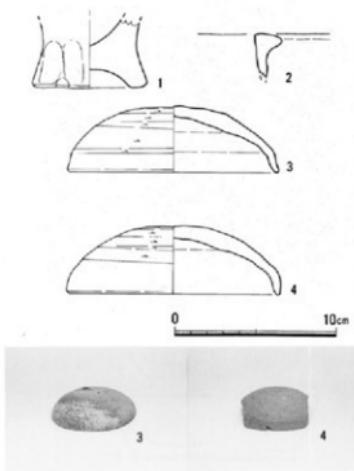


Figure 27. J+K-29-(1)区表探土器 (1/3)・写真



Figure 28. H-27区破石出土地点、(南から)

I-28-(2)/ I-28-27-(1)区表探土器 (Fig. 25)

1～3はI-26-(2)区の表探遺物である。1、3は弥生土器である。1は甕の底部、城ノ越タイプである。復元底径6.2cmを測る。3は甕の口縁部片で、端部には刻目が施されている。2は須恵器の壺蓋で口縁部と天井部の境には明瞭な段を設ける。口縁部は僅かであるが、外側に開く。胎土は砂粒を少量含み、暗茶褐色を呈する。全面に横ナデ調整が見られ、灰黒色を呈する。復元口径は11.9cmを測る。4～6はI-26-27-(2)地点で表探したものである。これらの土器は全て弥生土器の口縁部破片である。

J+K-29-(1)区 (Fig. 26)

この調査地点は叶ノ浜に面している。北側奥地の谷地から小川がここを通って海へ流れ込んでいる。さらに南下すると、L-30区の叶ノ浜金印推定地に至る地点である。ここは他部の最西端で、その出口になっている。標高5～6mで、畑や宅地として立地している。この地点では弥生土器、土師器、須恵器、近世国产白磁などが採集された。

J+K-29-(1)区表探土器 (Fig. 27)

1・2は弥生土器で、弥生時代中期の城ノ越タイプである。1は甕の底部片で、胎土には多量の砂粒を含み、淡褐色～褐色を呈する。復元口径は6.4cmを測る。3・4は須恵器壺蓋である。3は口縁部3/4を欠損する。外天井部は逆時計回りの回転ヘラ削り、口縁部と内面は横ナデ調整。砂粒を多く含み、灰色を呈する。復元口径



Figure 29. H-27区出土の破石

は12.7cm、器高4.0cmを測る。4は口縁部1/3を欠損する。外天井部には逆時計回りの回転ヘラ削りを行ない、口縁部と内面は横ナデ調整を施す。砂粒を多く含み、外面口縁部には窪変が見られる。灰色を呈する。口径は12.9cm、器高は4.1cmを測る。

H-27区

H-27区の海浜部では志賀島循環道路から沖へ50~60m地点の潮間帯で地元関係者の証言に基づいて碇石を確認できた(Fig. 28)。この花崗岩の碇石は両端部が大きく欠損し、表面や抉りの部分は磨滅が著しく、残存状態は良くない。残長は1.1m、幅と厚みは20×23.3cm、中央部の碇軸着裝部は16cmを測る(Fig. 29)、固定溝幅は6cm、深さは1.5cmである。

志賀地区 (Figs. 44+45)

この地区は島の南側地域で博多湾に面し、東より砂嘴が延びてきて、博多湾を外海の玄界灘と隔てている。この地区も玄界灘と博多湾に面した地域に大きく二分することができる。

志賀海神社口付近では縄文から歴史時代の遺物がこれ迄確認されている。今回神社を中心に広い範囲で踏査を行なった。その中で、遺物を探集した地点はZ-26区 (Fig. 30) である。この地点は神社入口の西側に位置し、標高8mで畑として利用されている狭いテラス状となった場所である。神社の立地している丘陵部の西側には天竜川の小川が流れ下っている。神社入口付近で流路を大きく北東に変え、埋立地を流れて、玄界灘に注ぐ。更に島の山地を貫いて勝馬に到る道路がこのテラスの東側を大きく削っている。またテラスの西側は山塊の斜面が迫る。今回の調査でも少量ではあるが弥生土器、土師器などの破片を採集した。

X・Y-28-(1)区

この地点は地元の人により通称「ドウトコロ」と呼ばれている。標高14~18mの間にある。苺ハウス栽培の畑として利用されている。南側に面した山塊の谷部から小川が流れ落ち、南へ向か



Figure 30. Z-26-(1)区遺物表探地点（南から）



Figure 31. R-32-(1)区遺物表探地点（北から）

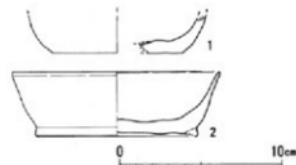


Figure 32. R-32-(1)/T・S-31区表探土器 (1/3)

って海岸砂丘部を貫いて志賀島漁港内に注いでいる。この小川が狭い谷部から沖積堆植物を運び、小さな扇状地をこの狭い地域に形成する。今回の調査では、遺物が採集できた地点はこの扇状地の先端部に集中している。先端部は8mの落差のある急斜面があり、南側に発達した海岸砂丘部とは顕著な境をなしているためにテラス状の台地の様相を呈している。黒曜石、弥生土器、土師器、須恵器、黒釉陶器、鐵津などが多く採集できた。



Figure 33. U-31-(1)区遺物表探地点（南から）



Figure 34. N-O-33区（金印公園）遠景（東から）

R-32区

遺物を表面採集した地点 (Fig. 31) は標高 30~50m で南側に向いて開けた急斜面に立地している。斜面はテラス状に造成され、果樹園に利用されている。周辺地は森林となっている。山道脇の斜面を下る側溝附近で遺物が発見されている。採集遺物には土師器、須恵器、中国白磁、近世国産施釉陶器などがある。土師器の小皿、環は糸切り底をもっている。

R-32-(1)区表探土器 (Fig.32-1)

1 は土師器の环である。外底は糸切り、その他は横ナデを施す。全体に二次的な火を受け、部分的に煤の付着が認められる。復元底径 7.7cm を測る。

T・S-31区

この地点は標高 38~46m の東側斜面に立地している。西側には水量の少ない小川が流れ落ちている。斜面の土地は果樹園、森林として利用

されている。ここからは須恵器が採集された。

T・S-31区表探土器 (Fig.32-2)

2 は須恵器の高台付の环である。底部に貼りつけた高台は殆ど欠損しているが、僅かに残存する。砂粒が多く混じり、茶褐色を呈する。復元口径 12.7cm、器高 3.95cm を測る。

L-31区

この地点は叶ノ浜の砂浜に面した志賀島循環道路沿いにある。標高は 4 m で果樹園や畠として利用されている。L-30区（叶ノ浜）の調査地点に隣接して、南側に立地する。表探遺物は多くはないが、黒曜石、土師器、中国白磁などをこの地点で採集した。

U-31区

この地点は志賀島小学校の校舎裏の狭い空き地 (Fig. 33) である。空き地は苺栽培のビニールハウスの畠として利用されている。標高は 6 ~ 8 m で、北側と西側は丘陵斜面が迫っている。東側に小川が流れる。小さな扇状地の先端部の上に立地している。小川は谷部から僅かに開けた狭い海岸部の平地の入口に達し、一瞬にして市街地を流れ下って志賀島漁港内に注ぐ。この地点は以前より縄文から歴史時代の遺物が確認されており、今回この地点周辺を含めて表探を行った。その結果、弥生土器、土師器、須恵器、高麗陶器などの破片を採集した。

N・O-33区

この地点は金印公園前の海岸部 (Fig. 34) である。潮が引くと広範囲にわたって海底が露出する潮間帯である。潮間帯の観察は海底地形状況を知る上では有効な手段である。金印公園前面の海岸の両側には陸地が海に向かって張り出した地形的特徴の「鼻」或いは「岬」がある。西側は L-33 区に位置し、東側は O-33 区にある。岬の先端部は海底に押し出されている。そのため岬周辺の海底の水深は浅く、潮が引けば広い海底が露出する。遺物や遺構の残存の有無を調べるために潮間帯を踏査した。表探できた遺物はない。この地点の海底状況は第 5 章で詳しく述べる。

地 点	標 高	地 目	採 集 遺 物	備 考
D-E 1・2-(1)	0~2m	海浜	須恵器、土師器、近世国産陶磁器(唐津系・肥前系)	土師皿(糸切り底)、陶磁器の採集は多量
E-4-(1)	10~14m	森林	弥生土器、須恵器	須恵器は同心円文を内面に持つ種の破片
F-13-(1)	22m	水田	弥生土器、須恵器、土師器、近世国産陶磁器、土輪	須恵器(高台环)、土師皿(糸切り底)
F-14-(2)	26~28m	水田	中国青磁	
F-14-(3)	30~32m	畑	弥生土器、土師器、近世国産陶磁器	国産陶磁器(梅判陶器、白磁染付碗破片)
G-H-8-(3)	22m	畑	近世国産白磁	碗破片
G-20-21(1)	8~12m	荒地	弥生土器、須恵器、土師器、近世国産瓦器、土輪	国産陶磁器(梅判陶器、白磁染付碗破片)
H-3-(1)	14 18m	森林	須恵器	环壺破片
H-8-(1)	20m	畑	土師器	小皿破片
II-8-(2)	20~26m	水田・畑	弥生土器、土師器、近世国産白磁	白磁(染付碗破片)
H-22-(1)	6~8m	水田	黑曜石、弥生土器、須恵器、土師器、近世国産陶磁器、土輪	弥生(城ノ越タイプ)甌の口部、瓦片等、採集遺物は多量
H-22-(2)	8m	水田	弥生土器、須恵器、土師器、中国青磁、近世国産陶磁器、鉄製品、土鍬	採集遺物は多量
H-I-22-(3)	11~14m	水田	弥生土器、須恵器	
H-I-23-(5)	11~19m	水田・沼	弥生土器、須恵器	
H-I-26-(3)	6~8m	荒地	弥生土器、須恵器、近世国産白磁	白磁(染付碗破片)
H-27	0~1m	海浜	碇石	
H-28-(1)	2m	海浜	土師器、近世国産陶磁器	陶磁器(白磁染付碗、指り鉢)
I-22-(4)	14m	畑	土師器、須恵器、近世国産施釉陶器	
I-24(1)	20m	畑	土器	糸切り底の皿
I-25-(1)	14~20m	水田・畑	弥生土器、土師器、須恵器、近世国産施釉陶器	
I-26-(2)	16 17m	畑	弥生土器、土師器、須恵器	弥生土器(城ノ越タイプ)、土器唇の量は多い
I-26-27-(1)	14~18m	水田・畑	黑曜石、弥生土器、土師器、須恵器、近世国産施釉陶器、石舟」、土鍬	質石製石造丁破片
J-4-(1)	8m	水田	弥生土器、土師器、近世国産陶磁器	近世国産陶器製造片を含む
J-K-4-(2)	9m	水田・畑	須恵器	
J-5-(1)	18m	畑	弥生土器、土師器、近世国産陶磁器	
J-8-(1)	16 18m	畑	弥生土器、土師器、土鍬	
J-29-(3)	4m	荒地	近世国産施釉陶器	
J-K-29-(1)	5~6m	畑	弥生土器、土師器、須恵器、近世国産白磁	弥生土器(城ノ越タイプ)焼底基片、須恵器(环壺)
K-L-4-(3)	20~24m	畑	土師器、近世国産青白磁	
K-L-4-(5)	18m	畑	須恵器	
K-5-(1)	28~30m	畑	弥生土器、土師器、須恵器、近世国産陶磁器	陶磁器(白磁碗、白磁染付碗、萬利窑船形)
K-7-(1)	12m	畑	土師器、近世国産白磁	白磁(染付小碗破片)
K-L-8-(1)	13 15m	畑	土師器、近世国産陶磁器	
K-9-(1)	20m	水田	弥生土器、土師器、近世国産陶磁器	陶磁器(白磁欠片小碗破片、施釉陶器破片)
K-9-(2)	25~30m	畑	弥生土器、近世国産施釉陶器	
K-L-10-(1)	23~30m	畑	弥生土器、土師器、近世国産白磁	白磁(染付小碗破片)

Table 2. 表採遺物一覧表(1)

地點	標高	地目	採集遺物	備考
K-26-27-(1)	25m	畑	近世国産織器	花瓶口縁破片、白磁焼付破片
K-28-(1)	6 m	畑	近世国産白磁	
K-29-(1)	6 m	畑	須恵器	
K-L-30 (2)	4 m	畑	土師器	
L-4-(4)	14m	畑	弥生土器、須恵器	
L 4 (6)	16-18m	畑	弥生土器、須恵器	須恵器(甕の内面青苔液浸ある)
L-4-(7)	22-24m	畑	近世国産陶器等	白磁(小碗破片)
L-7	10m	畑	弥生土器、上師器、須恵器、黒色土器、近世国産陶器等	弥生土器(前期の甕破片多い)
L-11	30-44m	水田・崖	弥生土器、土師器、土壁	
L-15-(1)	58m	崖地	土師器、近世国産織器	
L 16 (1)	64-71m	水田	土器類、中国白磁、近世国産白磁	中国白磁(明代の染付陶器片)
L-M-29	13m	畑	土師器、近世国産白磁	
L-30	4 m	水田	土師器	
L-31-(1)	4 m	果樹園・谷	黒曜石、土師器、中国白磁	中国白磁(焼付陶器片)
M-N-2-3-(2)	40m	畑	土師器、近世国産白磁	白磁(染付小碗の破片)
M-7	20-28m	水田	弥生土器、須恵器、土師器、中国白磁、中古青磁、近世国産陶器類、土瓶、鐵製品	
M-8	12-19m	畑・宅地	弥生土器、土師器、近世国産埴輪器、土瓶	
M-9 (1)	24-26m	畑	弥生土器、須恵器、土師器、近世国産陶器等	近世陶器(火薙の破片)
M-16-(2)	80m	水田	弥生土器、土師器、近世国産陶器、土瓶	
M-29 (2)	16-24m	畑	須恵器、近世国産施釉陶器	
M-30-(1)	14-18m	水田	土瓶、瓶残	
M-N-33-(1)	10-18m	果樹園	土師器、近世国産白磁	白磁(染付陶器片)
N-2・3	40-42m	畑	土師器、須恵器、近世国産白磁、砾石	
N-4-(2)	46-49m	畑	弥生土器、上師器、中國青白磁、近世国産白磁	
N-4・5 (1)	45m	畑	近世国産陶器等	
N-6	32-46m	果樹園	弥生・1級、土師器、須恵器、近世国産埴輪器、土瓶	土師器(小瓶は系切り底)、須恵器上蓋(鉢破片)
N-6・7	30-42m	水田・畑	弥生土器、土師器、須恵器、中国青磁、土瓶、鐵製品	弥生・土師器の採集量が多い
N-6・7-(1)	30-36m	畠・果樹園	弥生土器、上師器、須恵器、瓦	格子目の押文様の瓦礫片、ガラス小玉1点を含む
N-8・9-(2)	20-30m	畑	弥生土器、土師器、近世国産埴輪器、土瓶	
P-12-13	74-84m	果樹園	土師器、馬糞海器、鐵滓	
R-32-(1)	48-56m	果樹園・荒地	土師器、須恵器、中国白磁、近世国産施釉陶器	土師器は系切り底の小皿破片を含む
R-32-(2)	30-42m	果樹園	土師器	系切り底の土師小皿破片1点
T-S 31	38-46m	草地・果樹園	須恵器	青苔付き环
U-31-(1)	6-8 m	畑	弥生土器、上師器、須恵器、高麗陶器	
X-Y-28-(1)	14-18m	畑	黒曜石、弥生土器、上師器、須恵器、黑釉陶器、鐵滓	弥生土器、上師器、須恵器の量が多い
Z-26-(1)	8 m	畑	弥生土器、土師器	

Table 3. 表採遺物一覧表(2)

調査の結果

志賀島全島わたって踏査を行い、遺物の散布地やその範囲を確定する多くの資料や記録を得ることができた。

勝馬地区では海岸から内陸部まで平均標高23~26mの丘陵地の斜面や耕作地からの採集遺物が多く見られる。更に丘陵の頂上部に選地された箱式石棺墓が弥五郎、堂山の標高20~35m前後にある。今日江尻川の沖積地は水田や畑として開墾されているが、この河川の古代からの氾濫は大きく地形的様相に変化をもたらした。このことは遺物の散布地点が沖積地の周辺地域に顕著に見られることからも窺える。更に古代の入江の復元にもこの沖積地が立地する意義は大きいと云える。遺物散布地は江尻川の右岸の弥五郎、猪狩、裏地区の丘陵斜面に多い。また江尻川の谷部と平地との境付近にも見られる。谷部から平地へと急に開けるM-9付近やM-8地点は、標高20m以下で江尻川の氾濫の影響をまともに受けるため表採した遺物も少ない。昭和20~30年代には土砂を含んだ江尻川の濁流水が大きな被害をこの地区に与えている。内陸部にある開墾された水田や畑は江尻川が運ぶ堆積土砂によって入江が埋まり、陸地化へと発達してきた結果である。H-K-4-7は古代においては良好な入江をなし、北からの季節風や荒波を入江の開口部に位置した洪積丘陵地の中津宮、表宮あるいは弥五郎の丘陵が遮蔽する地形をなしていた。江尻川は今日のように大きく東へ迂回せず、勝馬小学校付近で西側へ流れを変え、下馬ノ浜の海へ流れ出していたと考えられる。耕作地への改田がこの地域で獎められたのは古代の入江が江尻川の堆積土砂により沼地化し、湿地帯を形成していくからである。戦前にはまだこの地域に沼地が存在していたことも知られている。古代の入江の名残を示す地名も堂山丘陵地下の地点L-M-8に「大浦」としてある。更にI-7の耕作地の下から貝殻が広い範囲で出土することも考慮する必要がある。

勝馬地区の弥生土器の散布地はE-4、F-13・

14、H-8、J-4・5、J-8、K-5、K-9、K-L-10、L-4、L-7、L-11、M-7・9、M-16、N-4、N-6・7で、これらの散布地点は沖積地の内側には存在しないで、周辺地域にある。平均標高は24~27mで、最低はJ-4の8m、最高はM-16の80mである。弥生時代の遺跡の立地した平均標高はそれ以降の時代の遺跡が立地した標高と比較してもあまり差がない。これは地理的環境に大きな変化が見られず、立地した集落の土地の選地条件が近世を除き古代から変わっていないことが窺える。

弘地区では遺物の散布地は主に弘漁港の背後に開けた標高6~20mの水田や畑である。遺物の密集地は海岸部に近い所で顕著に認められ、内陸部へと標高を上げていくに従い出土量も減少する。H-22区が量も最も多く、弥生中期の城ノ越タイブの土器片を数多く確認した。弘の街の北側G-22・23でも弥生土器を確認している。弥生時代の弘に集落の立地する環境を考慮すると、残田川の存在は大きい。水量は豊富で、北側は標高40m前後の丘陵が迫り、西側は浅い入江となっている。I-26・27は縄文から近世まで人間の生活の痕跡が認められる地点である。海岸から僅かに奥まった場所は10~30mの丘陵が北側と西側を遮蔽し、東側には小川が流れるといった地理的環境のもとに遺跡が立地している。叶ノ浜のJ-K-29、K-29は標高5~6mで、東に小川があり遺跡の立地に適している。L-29、L-30、M-29では叶ノ浜の金印推定地調査に関連する遺物の採集はなかった。

志賀地区では南側斜面に遺跡が立地する。海岸部から奥まった場所でなく、丘陵から延びた扇状地の先端部に選地をしている。飲料水は得やすいが、利用できる土地は狭く、農耕には不適である。そのため海への生活依存度は必然的にたかくなる。島民の海への依存はひいては海洋の知識を蓄積する結果となったであろう。

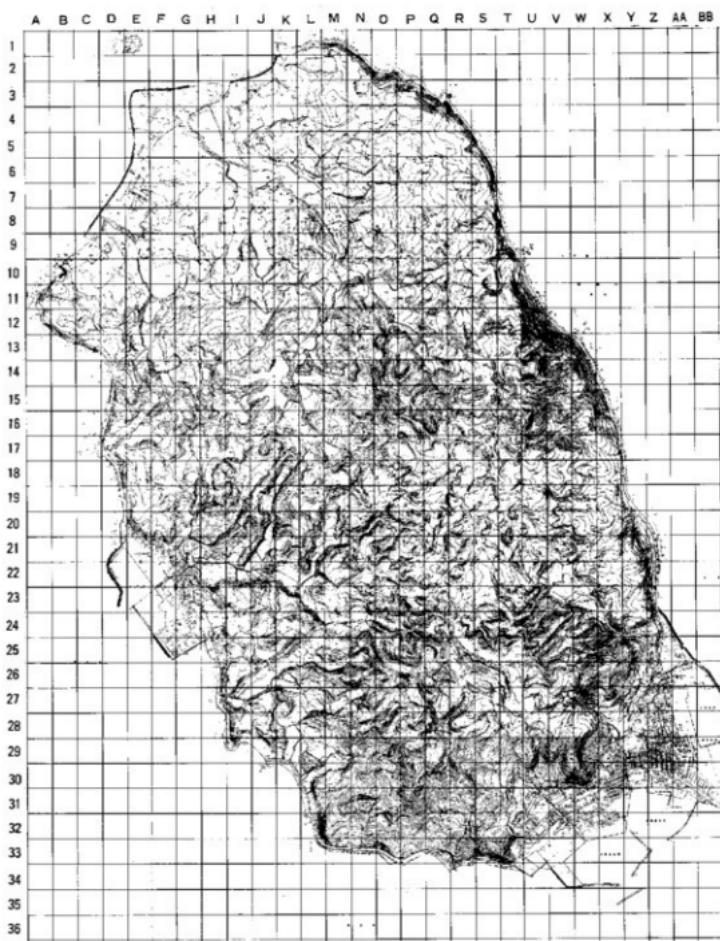


Figure 35. 志賀島遺跡調査区割図 (1/20000)

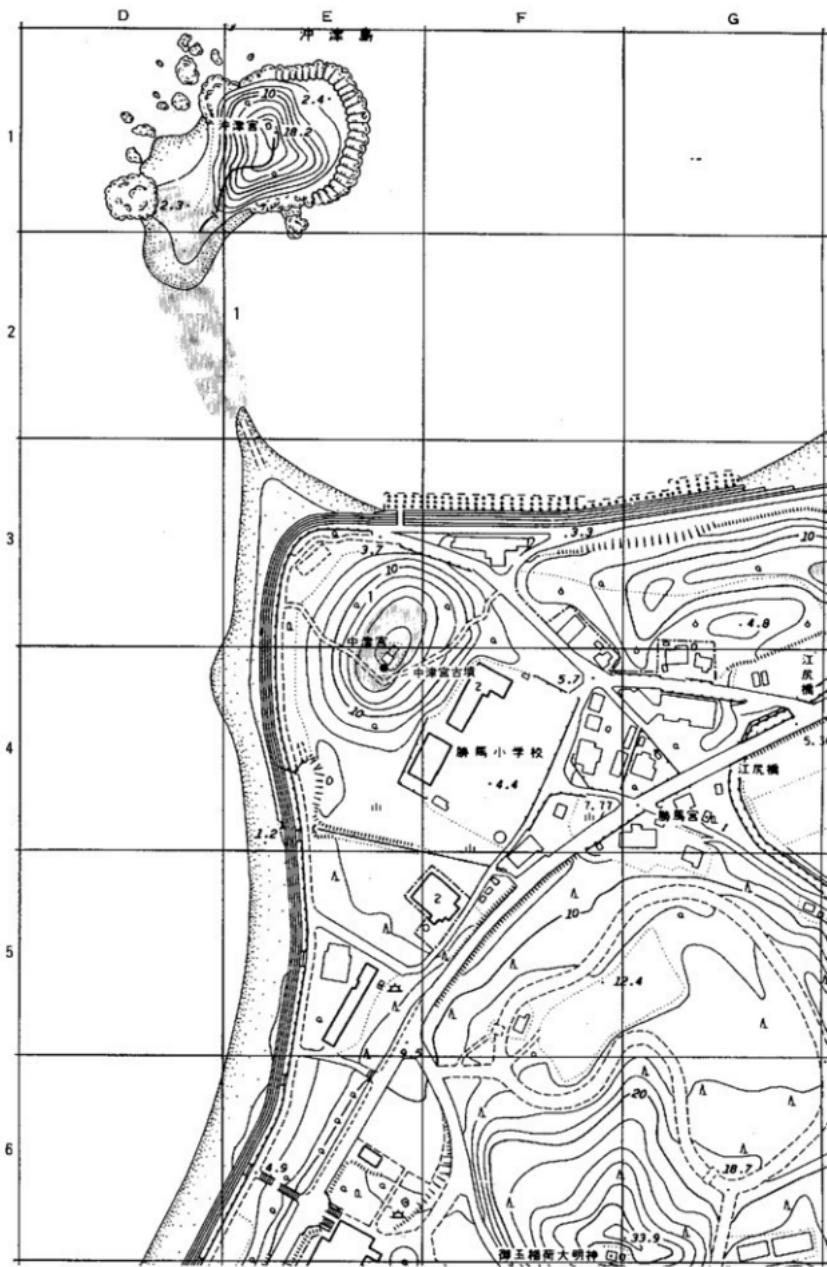


Figure 36. 表探遺物出土位置図(1/2500)



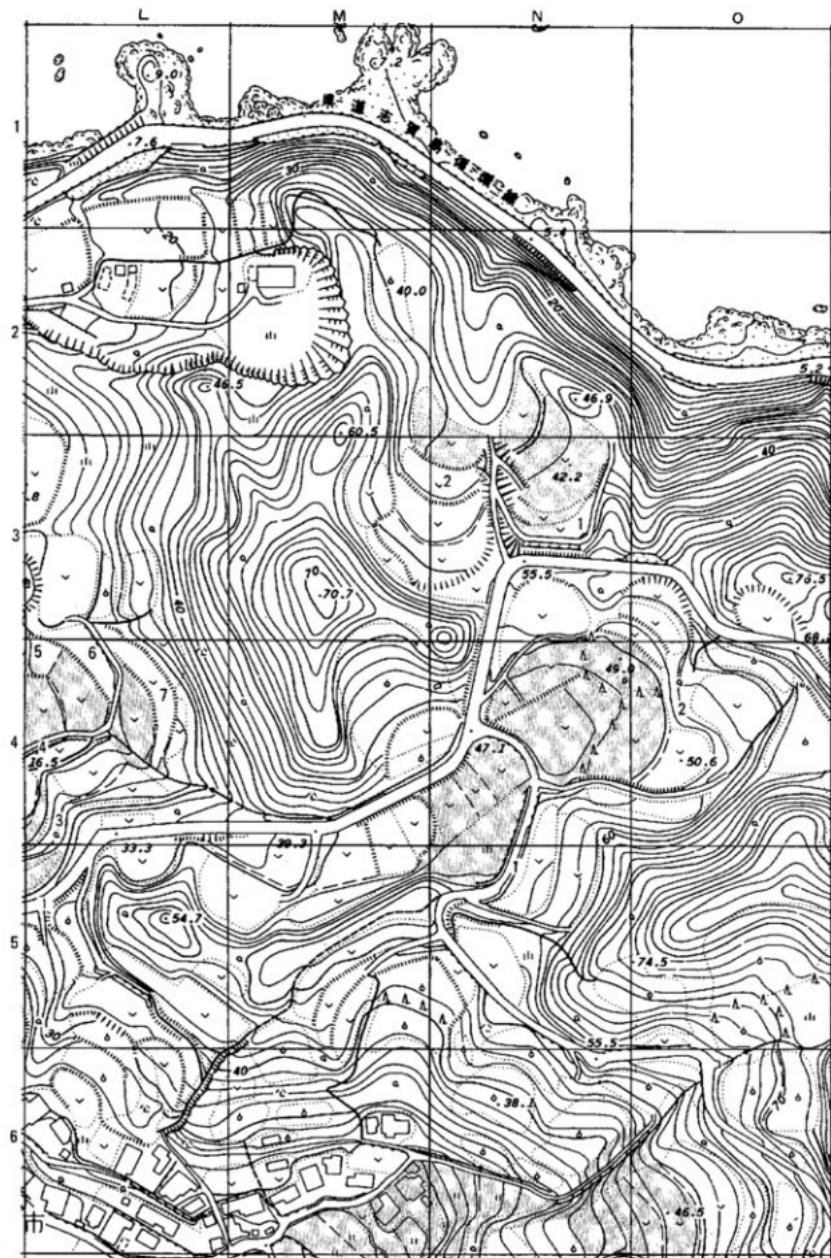
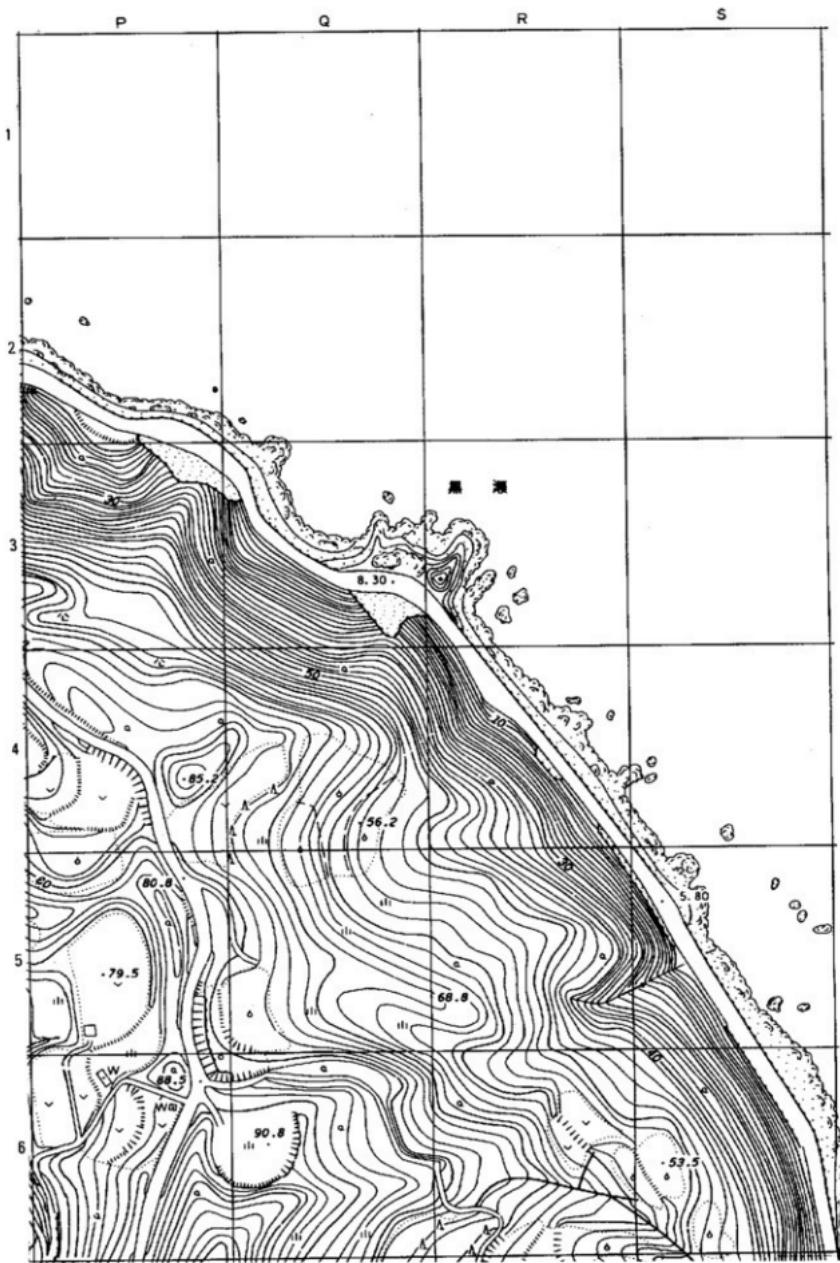


Figure 37. 考探遺物出土位置図2 (1/2500)



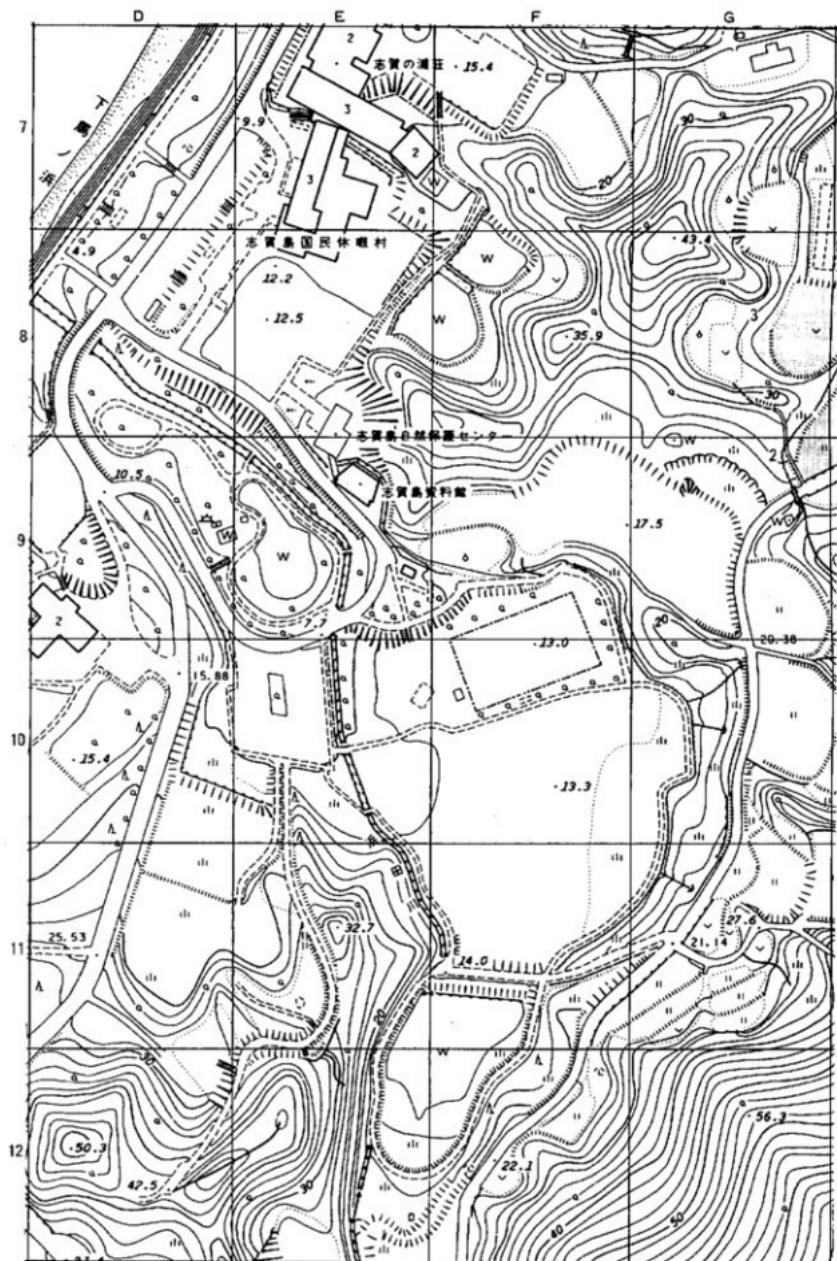
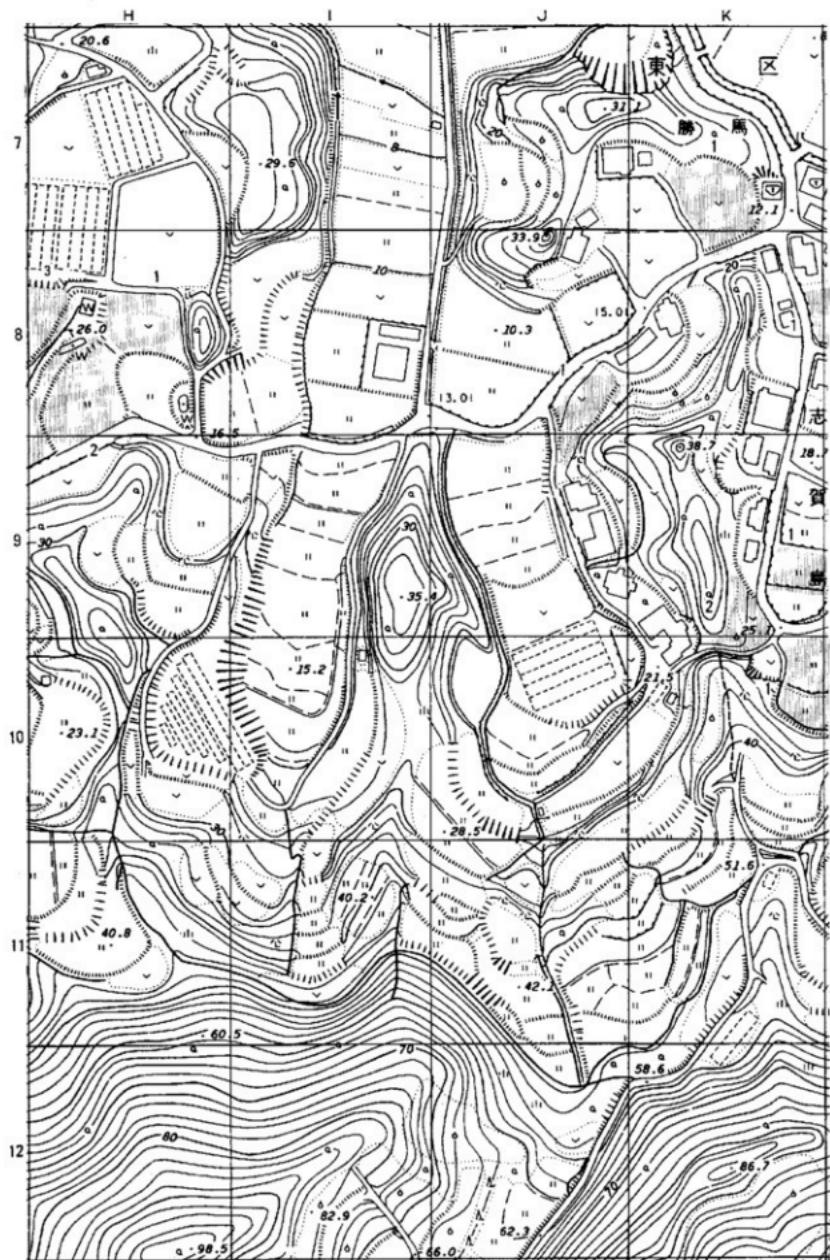


Figure 38. 表探遺物出土位置図3 (1/2500)



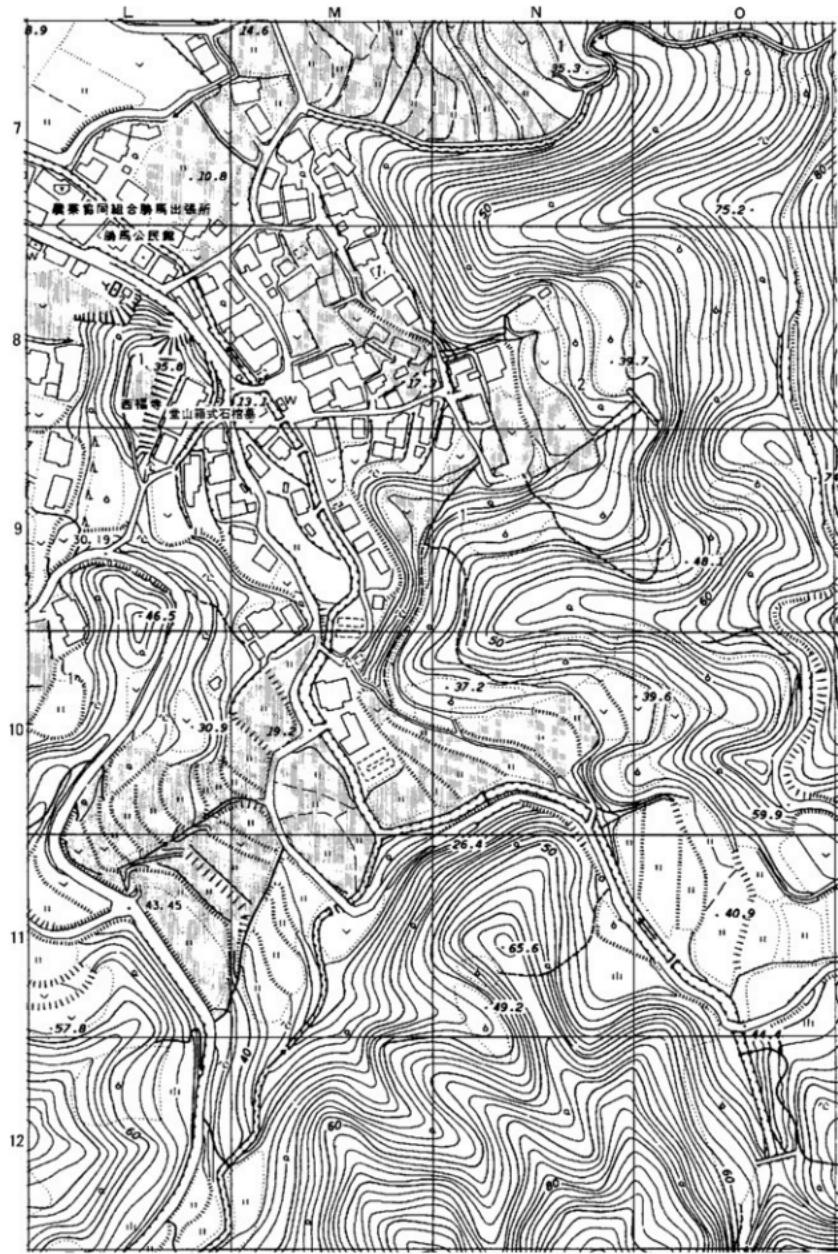
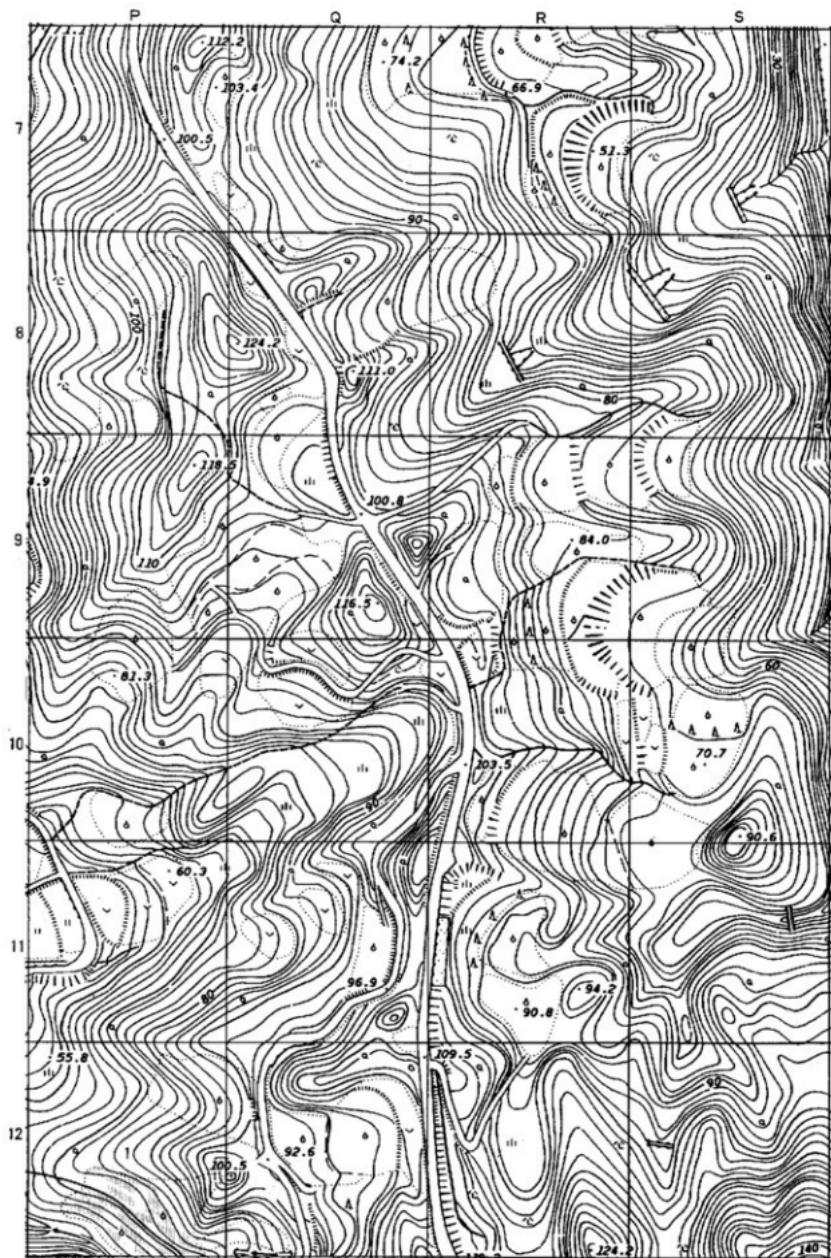


Figure 39. 表採遺物出土位置図4 (1/2500)



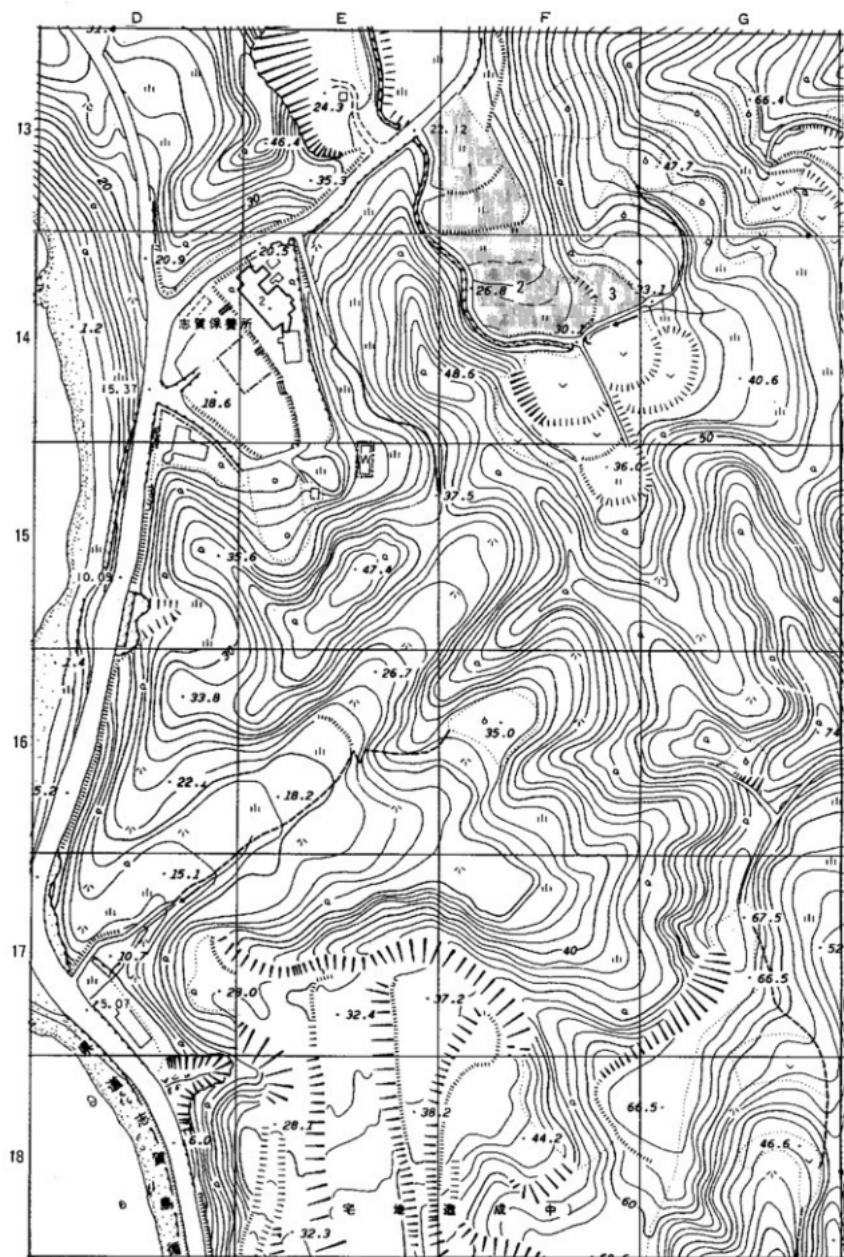
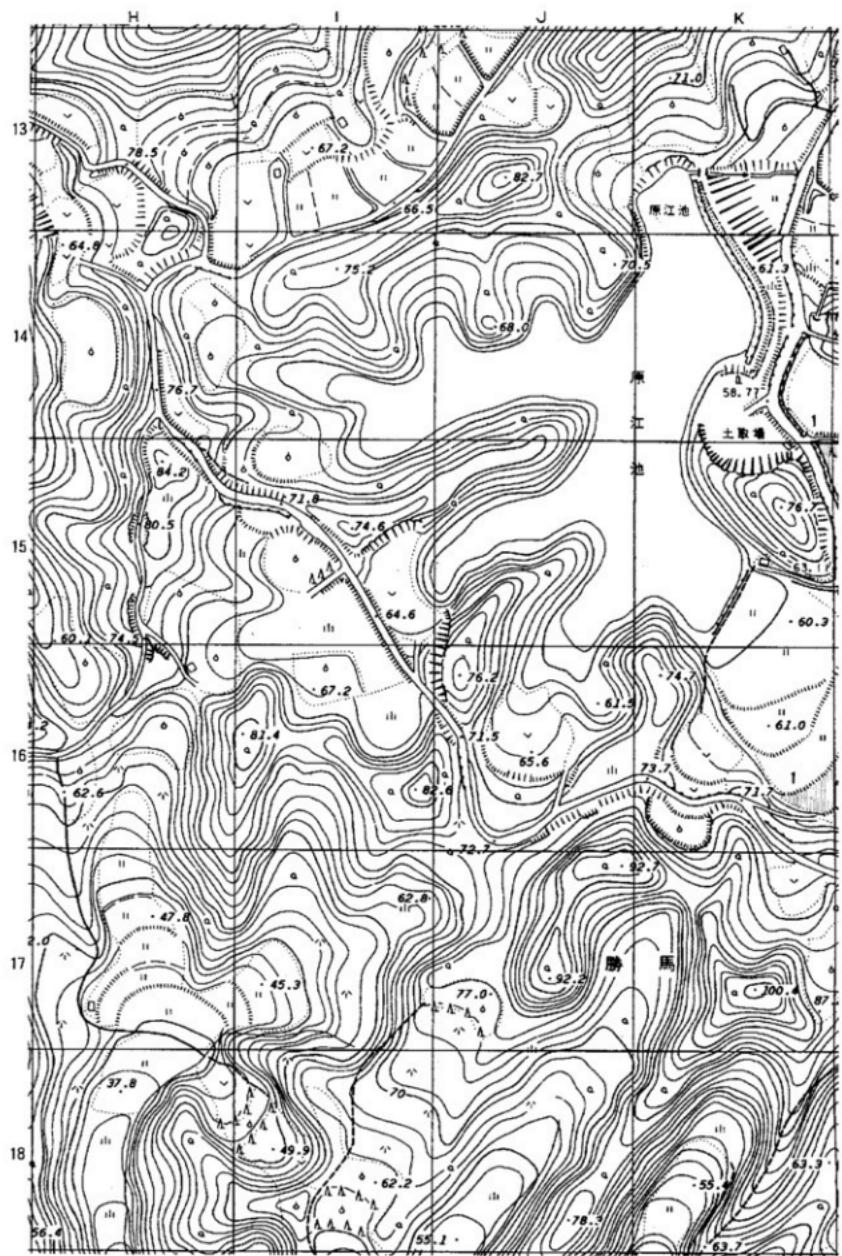


Figure 40. 表探遺物出土位置図5 (1/2500)



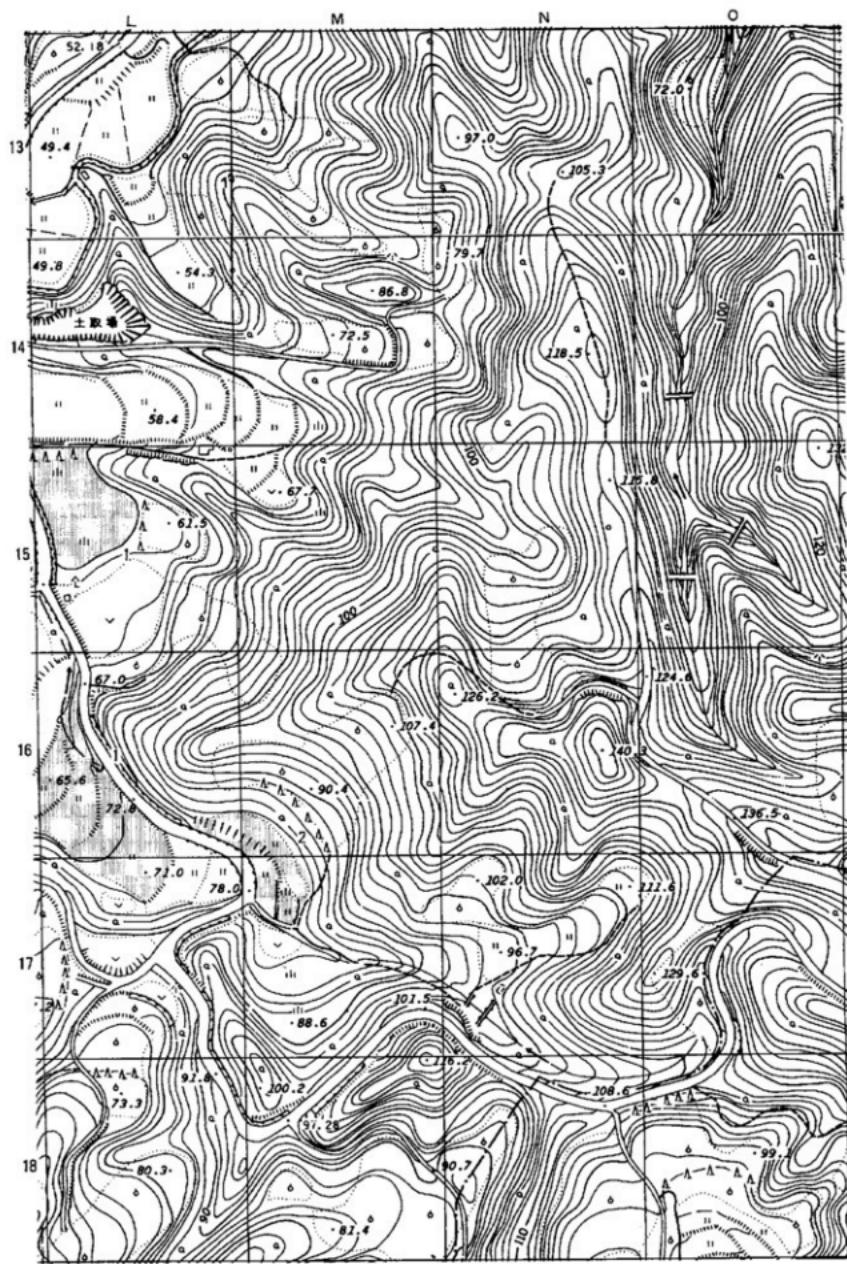


Figure 41. 表探遺物出土位置図6 (1/2500)

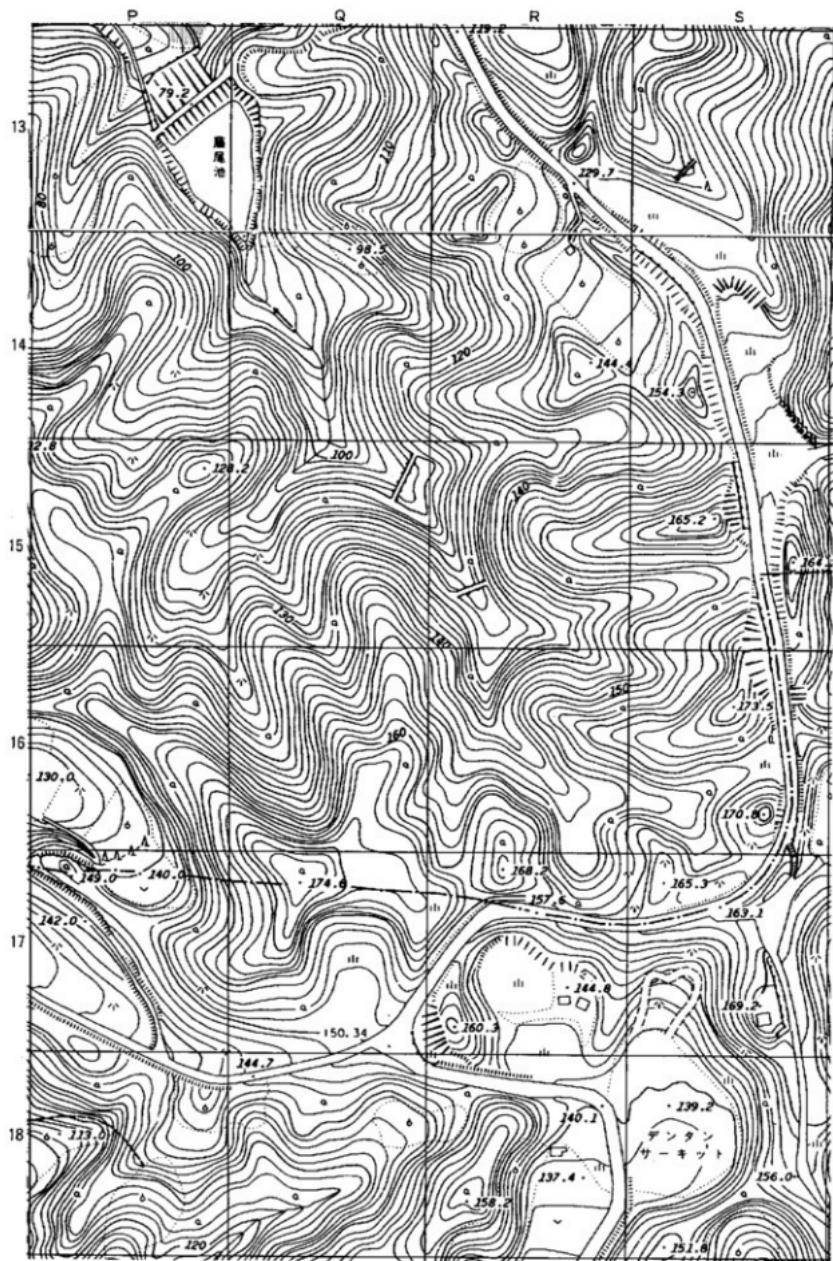
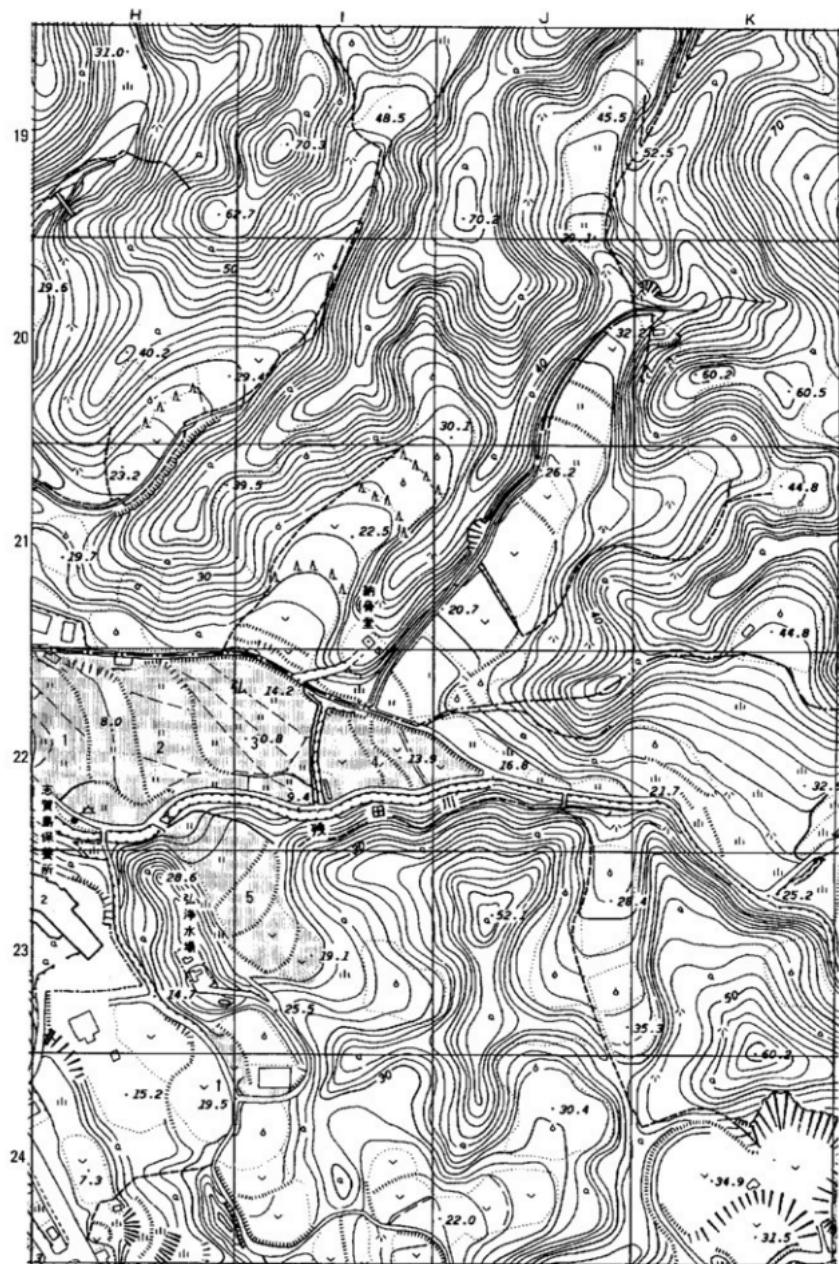




Figure 42. 表採遺物出土位置図7 (1/2500)



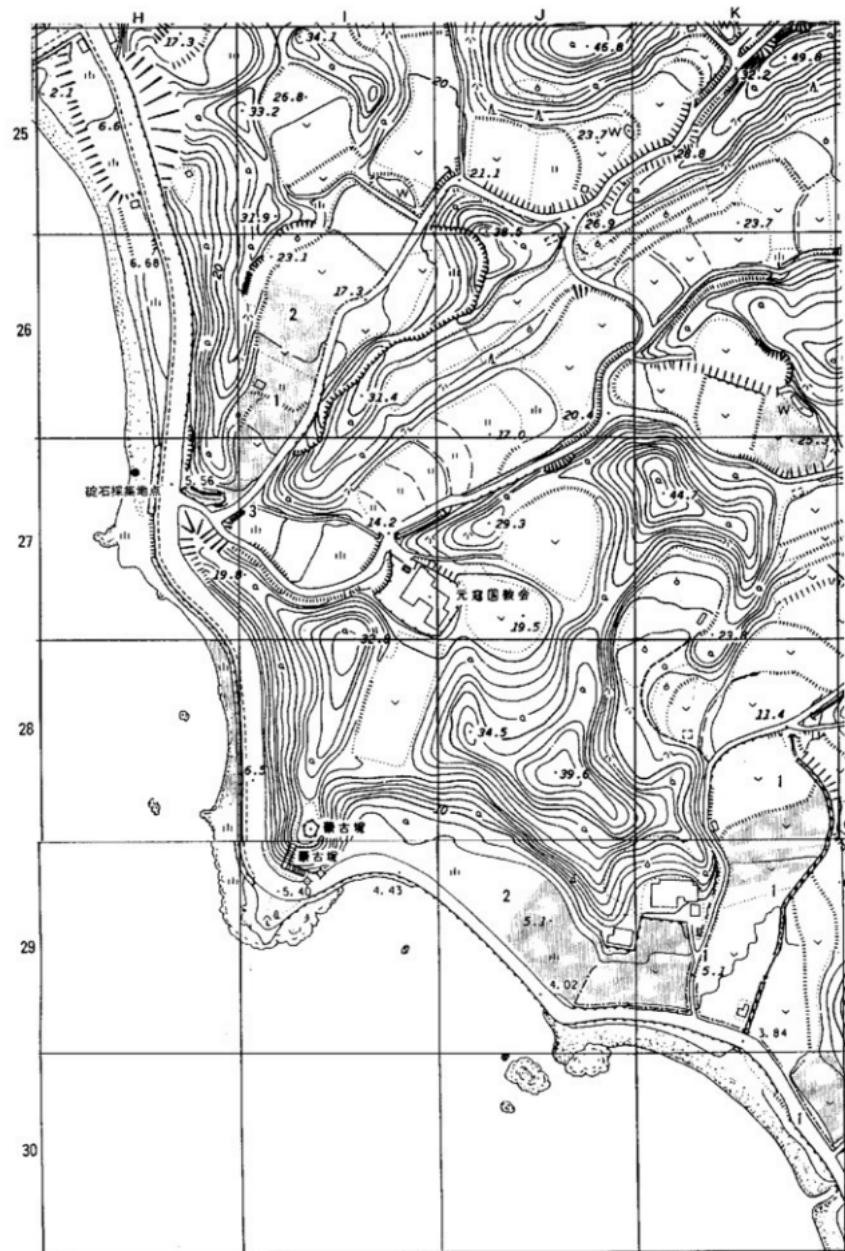
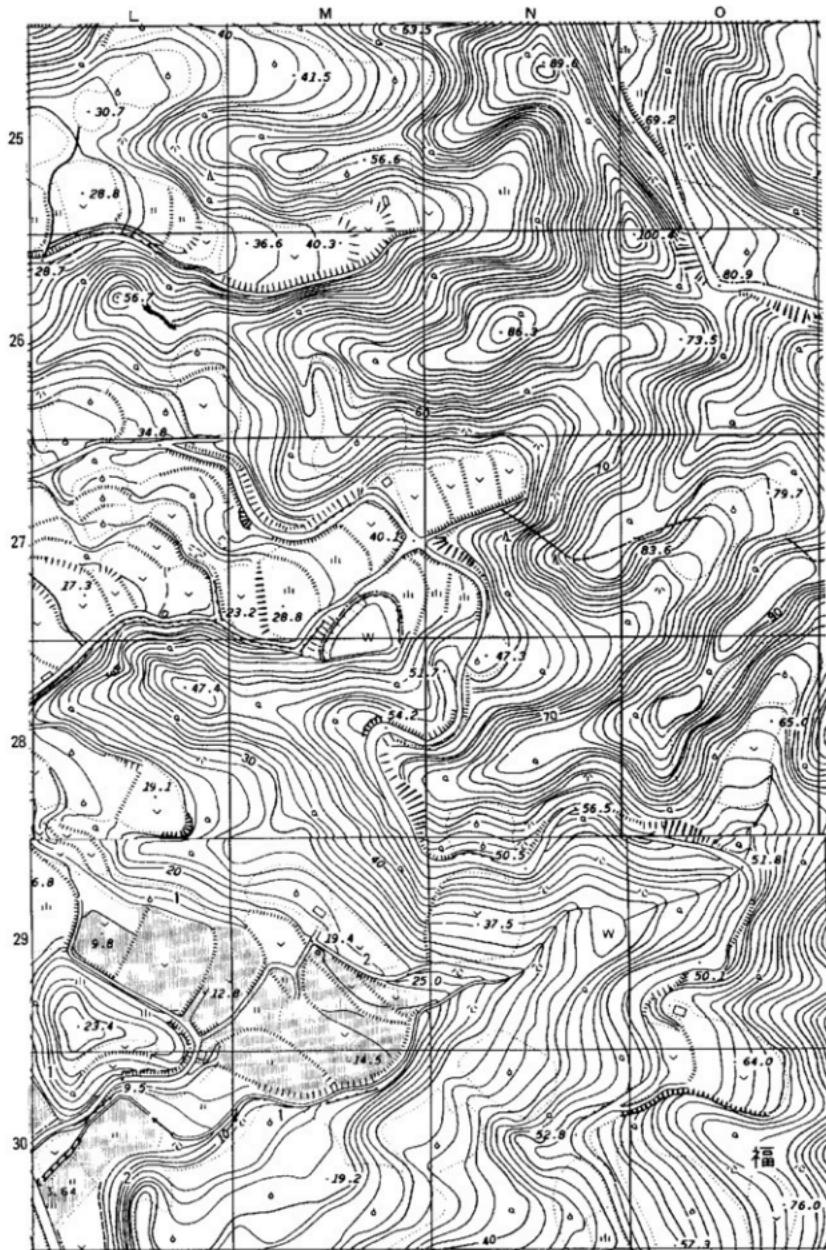


Figure 43. 表採遺物出土位置図8 (1/2500)



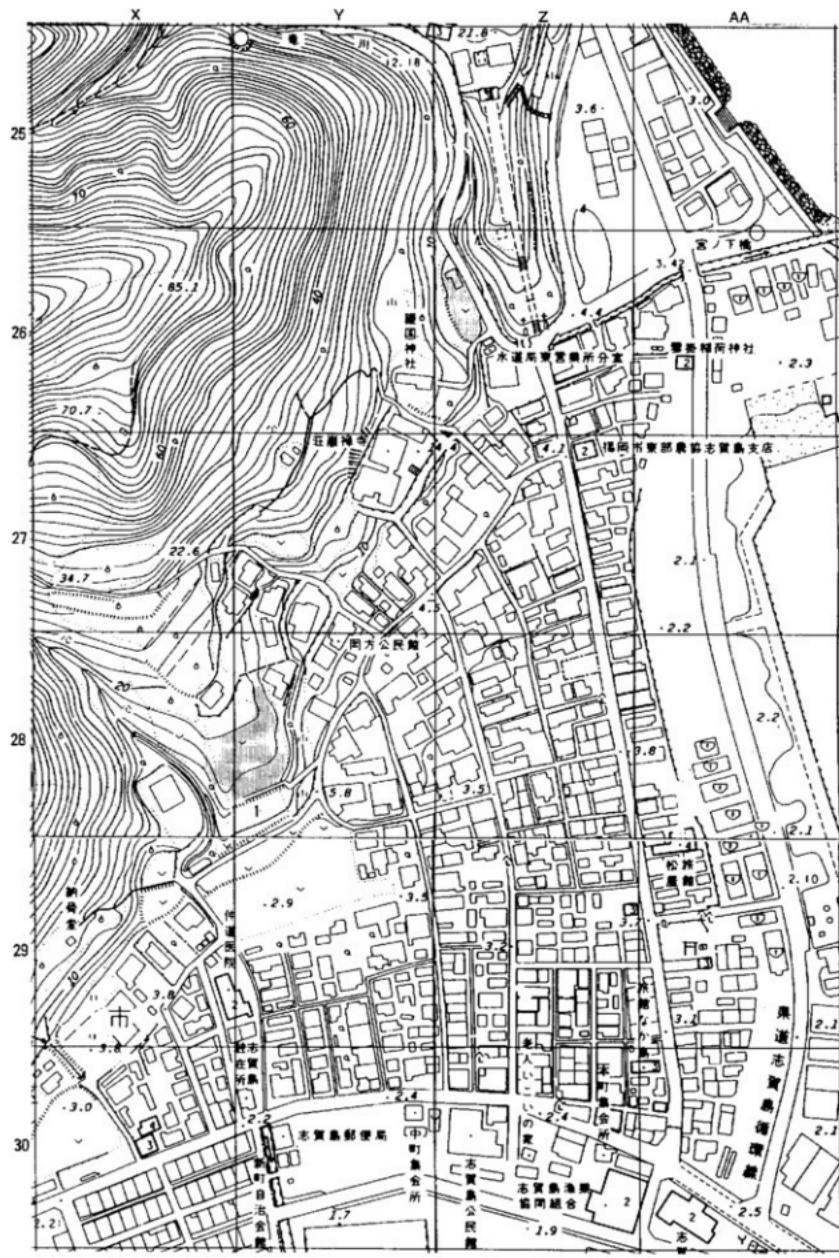
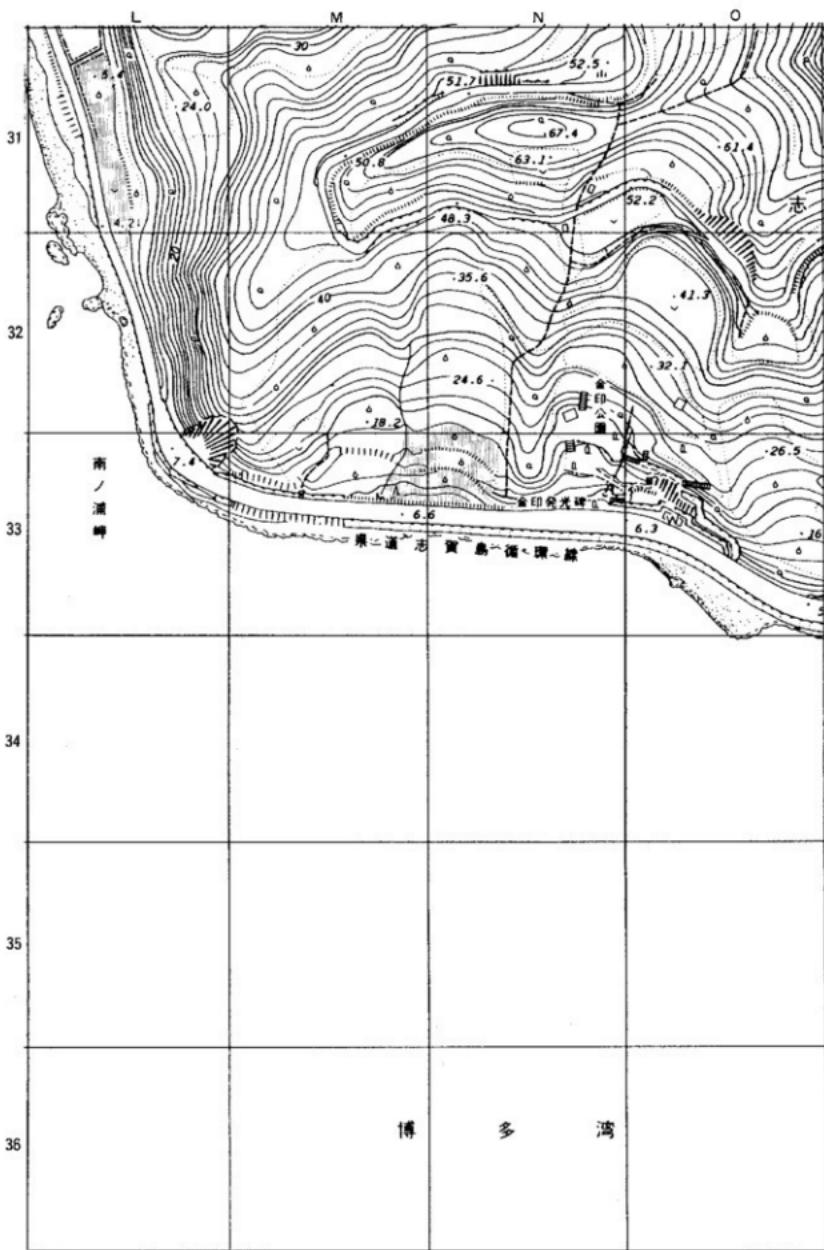


Figure 44. 表探遺物出土位置図9 (1/2500)



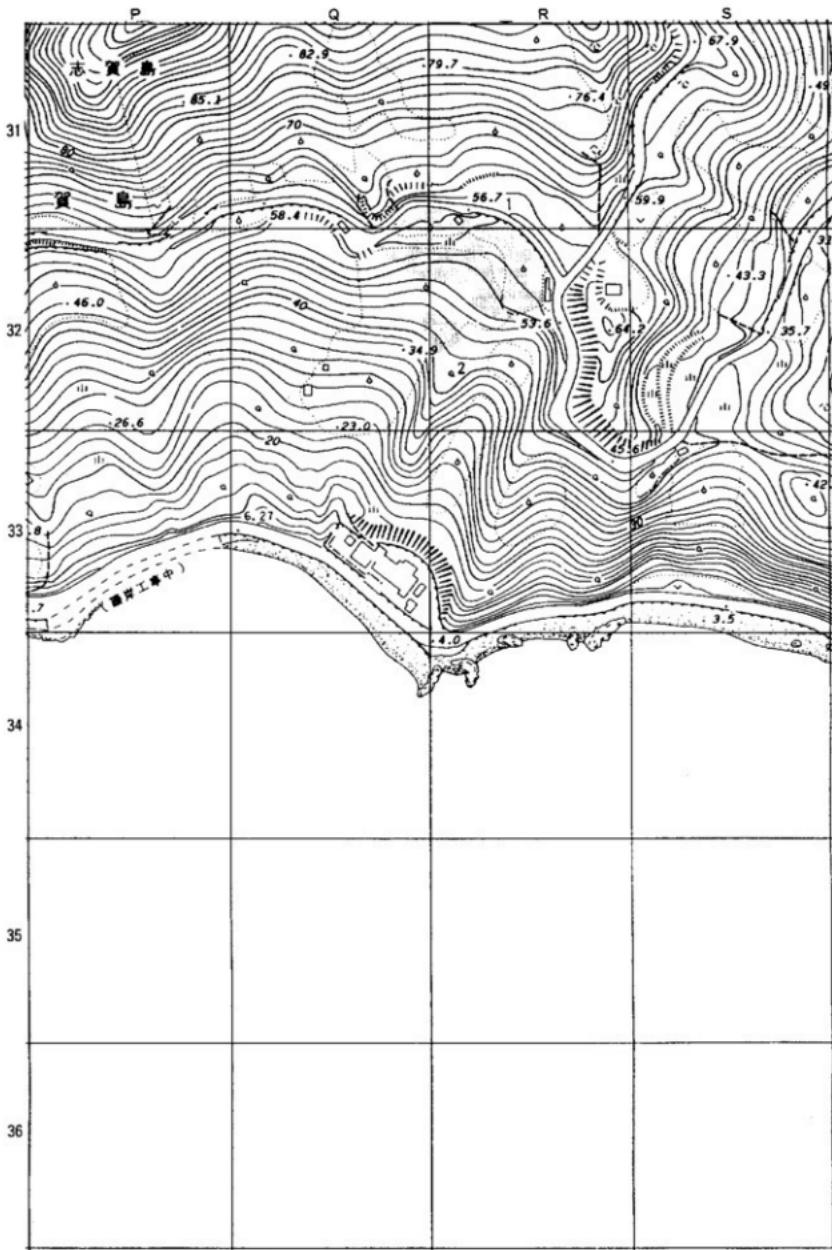
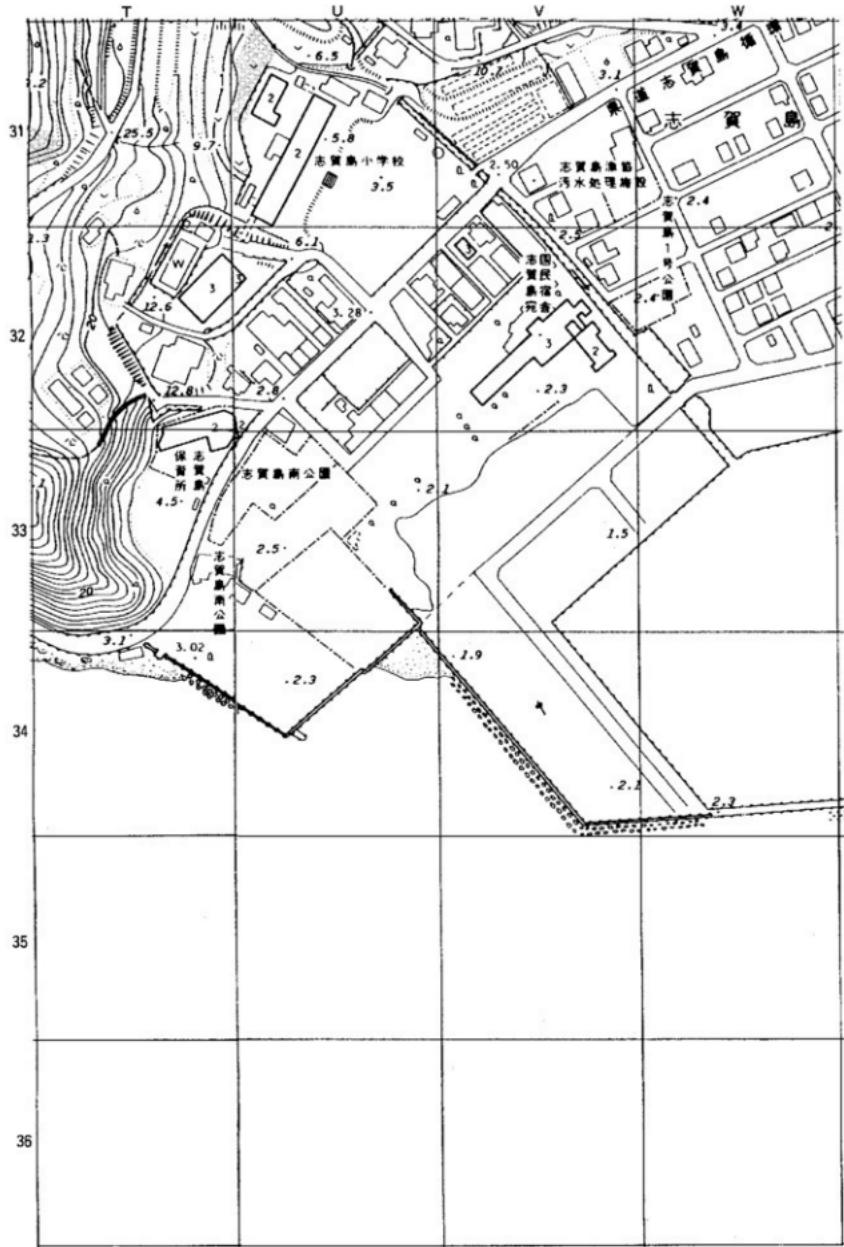


Figure 45. 表探遺物出土位置図10 (1/2500)



第4章 試掘調査の記録

1. L-30区(叶ノ浜)の調査

調査の目的

「漢委奴國王」金印(以下金印と省略)の出土推定地は、中山平次郎博士が推定された金印発光碑前道路付近(註1)と、森貞次郎博士などが指摘された叶ノ浜付近(註2)の2か所である。

中山博士の推定の根拠となったのは、志賀海神社宮司阿鑑家に伝えられていた『続風土記付録』とその絵図で、金印に関連する本文は、「那珂郡志賀島村、叶の崎、此所の名本記に見ゆ。天明甲辰の年二月二十三日、志賀島邑農甚兵衛と云者、此所田の尻と云地にて、土中より金印一箇を得たり。明神の境地より得たる故、神寶とせん事を占ひしに神闘下らざる事再三也といふ。故に府廷に呈けしとなり。其図左の如し。」とあり、絵図1枚が残されていた。これらの資料をもとに、中山博士は先年の金印出土推定地発掘地点(現在の金印発光碑建立地点)を修正され、その西南側至近の水田部を想定されたのである。中山博士推定地点は、その後の道路拡幅工事で道路下に埋没したと考えられる。しかしながら1989年の金印発光碑前道路の試掘調査の結果では、少なくとも14世紀代以前には当該地はラグーン状を呈し、人為的な遺構が構築できる地形ではなかったことは第2章で述べたとおりである。

森博士などの推定根拠は、やはり『続風土記付録』とその絵図に基づくものであるが、中山博士推定地付近は、弥生時代の遺跡が立地するような地形ではないという前提によるものである。すなわち、「現地は絵図に比べて極めて狭隘かつ地形が急峻すぎるくらいがありどうも適合しない。また現地は今日では叶ノ崎の名称は用いられない。若しこの所伝の地を離れて、弘と志賀両部落の中間に絵図に最も近似した地

形を求めるに、むしろ叶ノ浜の方が適しているように見られる。叶ノ浜には二本の小流があり、その間に標高25.3mの独立小丘がある。この小丘から南側の溝川と水田を挟んだ手前の丘陵先端部附近までの地域がむしろふさわしい。しかしこれも細部に涉ってはなお考慮すべき点がある。」と述べられ、絵図に描かれている金印出土地が叶ノ浜付近である可能性を指摘されている。

以上のように、これまでの金印出土推定地は、叶ノ崎と叶ノ浜の2か所に絞られているのであり、今回の調査は叶ノ浜に金印に関連する遺構や遺物が存在するかどうかを確認する目的で実施した。

位置と地形(Figs.46~47)

調査地は福岡市東区大字志賀島字南浦1926番、1927-1番に所在し、志賀島から弘へ向かう志賀島循環道路の蒙古塚バス停手前の道路東側に隣接する。道路のすぐ西側が叶ノ浜という砂浜で、博多湾を挟んで糸島半島と対峙する位置にある。

叶ノ浜の後背地は風化花崗岩の丘陵と谷部からなっており、谷部は標高23.4mの平面三角形をなす小独立丘で分けられたおおよそ南北二つの谷となっている。この小独立丘南側の谷は狭く、谷奥から流れ下る小流が叶ノ浜に注ぎ、標高25mの高さまで流れに沿って水田と畠地が造成されている。北側の谷はそれより広く、谷奥から小流が叶ノ浜に流入し、標高50m前後の高さまで畠地が造成されている。

今回の調査地点は、小独立丘南側の谷部先端に当る最も浜に近い水田で、標高は3.10~3.60mの間にある。森博士などが想定された『続風土記付録』の絵図に合う場所は、叶ノ浜に注ぐ2本の小流のうち小独立丘南側の流れに沿う地域であり、今回の調査地点はそれを含む地点である。

調査の経過

調査地は現在休耕田となっているが、将来の耕作に備えて、手掘りによる最少限の発掘を行う必要があった。調査は7月1日より着手し、雑草の除草作業から始め、地形測量、トレーンチ設定、発掘、記録作成、埋め戻しを順次行った。例年ない猛暑のために調査能率が低下し、全ての作業が終了したのは8月4日となった。

調査区 (Fig. 46)

調査区は幅16m、長さ60mの長方形を呈する2枚の水田のほぼ中央部を縦断するように、幅1.5m、長さ9~4mのトレーンチを設定し、さらに、その南側の2か所に直交するトレーンチを追加した。最も南西端に長さ9mで設定したトレーンチをAとし、1mの間をおいて長さ5.5mで設定したトレーンチB、そこから1段上の水田南西端からは、C~Gまでの長さ4mのトレーンチを4m間隔で5本設定した。また、D、Eトレーンチの間に長さ4mのHトレーンチを、Aトレーンチ中央部に1mの間をおいて南側に直交する長さ4mのIトレーンチを設定した。



Figure 46. L-30区(叶ノ浜)遠景(北から)



Figure 47. L-30区(叶ノ浜)調査地点位置図(1/5000)

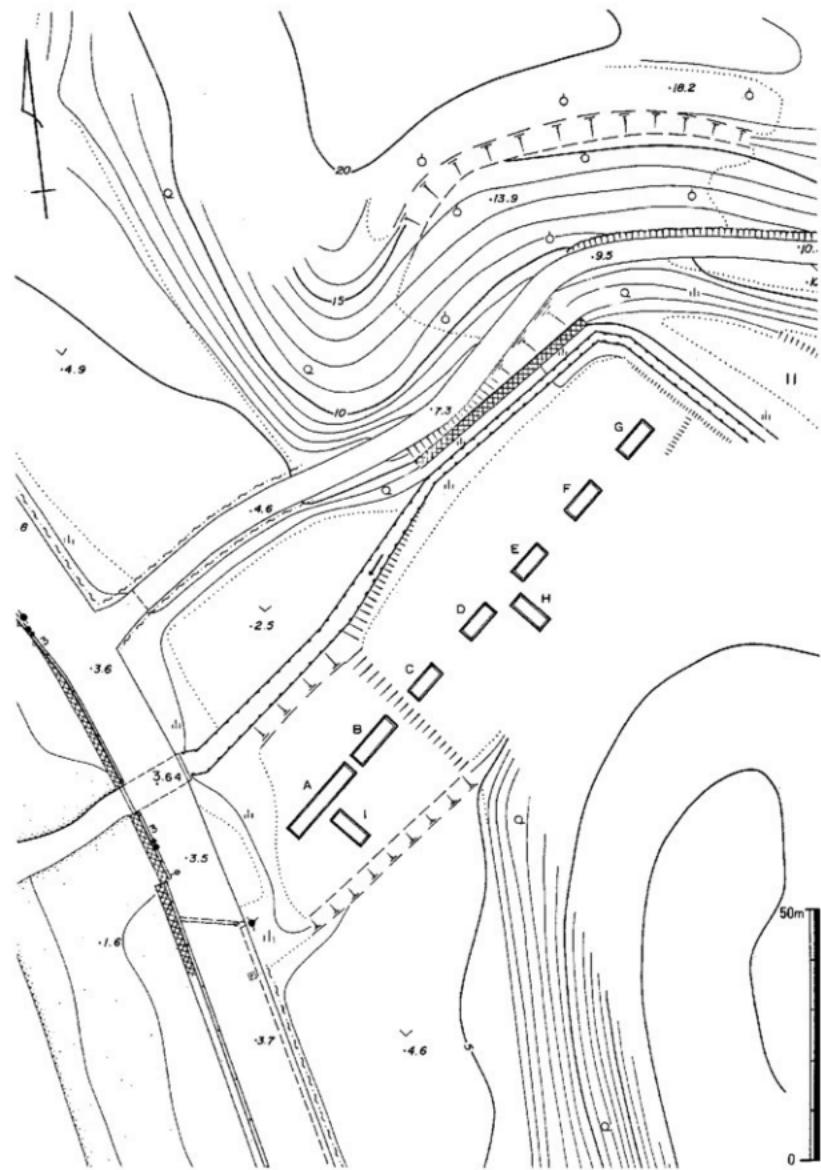


Figure 48. L-30区(叶ノ浜) 調査トレンチ配置図 (1/500)



Figure 49. L-30区（叶ノ浜）調査地点

土層堆積状況（Figs. 51～54）

谷部水田を縱断して設定した最も浜に近いAトレンチでは、地表面の標高は3.10m前後で、概ね平坦である。表土は厚さ25cm程度の耕作土、下部は厚さ5cmの床土がある。その下は45～55cmの互層状態にある灰褐色粘土質土が堆積し、その下部は5～10cmの暗灰色砂質土となり、そこから下は砂層となる。すなわち南西端で地表下1.0m、北東端で0.85mから砂層となり、砂層の堆積状況は、北東側から南西側へ、つまり谷の上から下へ向かって流れた状況を示している。南西側で1.6m、北東側で1.4mまで発掘したが、基盤砂層は灰褐色粗砂で、南西側へ傾斜を強めながら堆積し、その上部は暗褐色中砂、暗褐色細砂がそれぞれ10cm、25～30cmの厚さで乗っている。その下は褐色細砂、灰黑色粘土混細砂、灰黑色粘土、淡褐色粘土等が織り成りた構造をなして堆積し、上部からの水の流れと沈澱が交互になされたことを示している。

Bトレンチでは、南西端は地表下0.8m、北東端が0.55mで砂層と

なり、その上部の灰褐色粘土の堆積も南西側が深く、北東側が浅い。砂層の堆積状況はAトレンチと同様であるが、北東から南西への傾斜が顕著である。

東側1段上の水田面の標高は3.55m前後で、西側水田面より45cmほど高くなり、ほぼ平坦である。南西端のCトレンチでは、地表下0.3mまで耕作土、1.20m前後まで褐色混灰褐色粘質土、灰褐色粘質土、淡褐色粘質土の順で堆積し、その下から砂層となる。地表から1.5mまで発掘したが、砂層は上から暗褐色砂、淡灰黑色砂、灰色粗砂、茶褐色粗砂となり、この面から湧水する。水田の比高差から、砂層はBトレンチよりも20cm高くなっている。

さらに砂層上面はDトレンチで地表下1.10m、Eトレンチで0.85m、Fトレンチで0.60m、Gトレンチ北東端では0.45mの深さで検出された。調査区最南西端から北東端までの延長約55mの間では、砂層の傾斜は1mとなる。またIトレンチでは、地表下1.40mの黒色粗砂層の下から角閃花崗岩の岩盤が検出され、南端部では人頭大の礫岩の集積が認められた。

以上のように調査区の基本的な層序は、旧水



Figure 50. L-30区（叶ノ浜）調査地点トレンチ（西から）

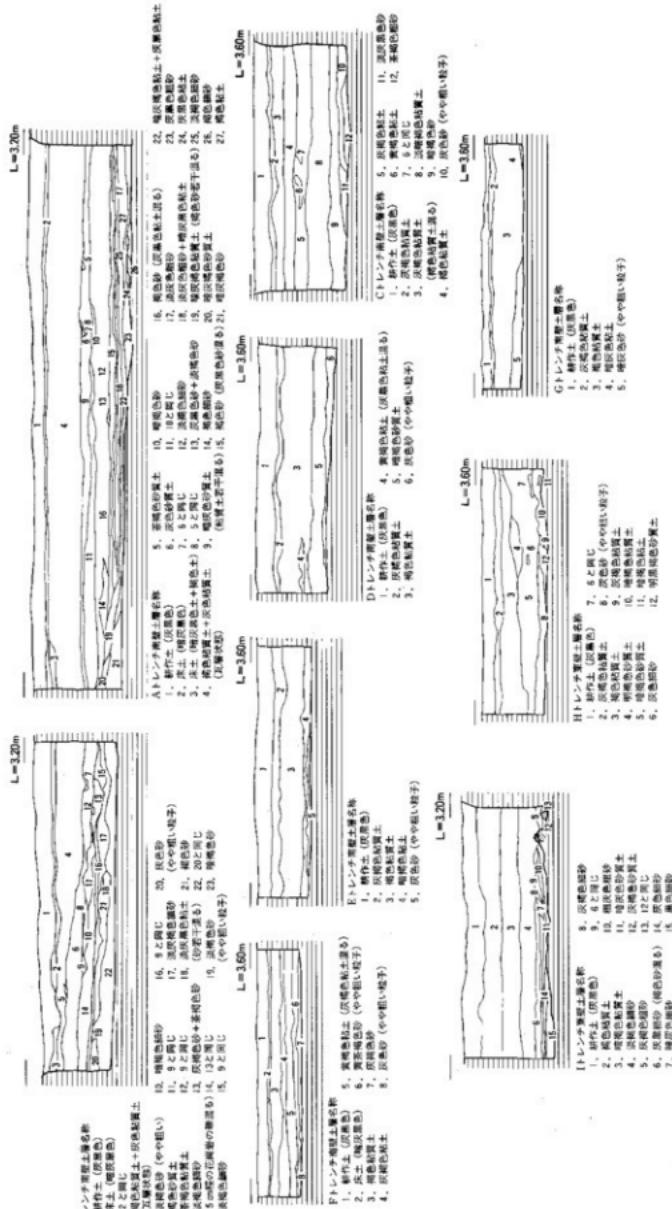


Figure 51. ドレンチ土層断面図 (1/80)

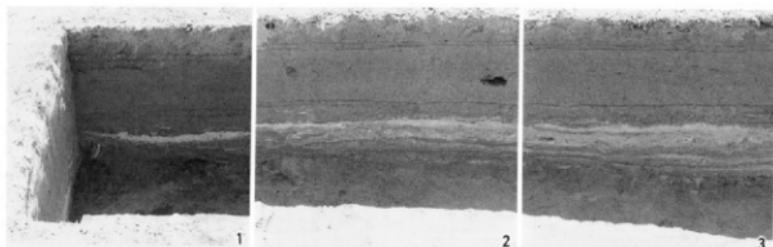


Figure 52. A トレンチ南壁土層 (1-3)

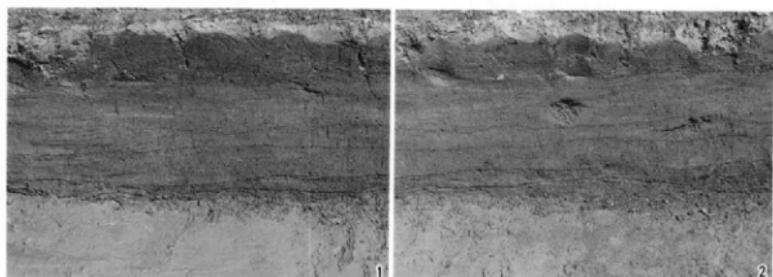


Figure 53. H トレンチ東壁土層 (1-2)

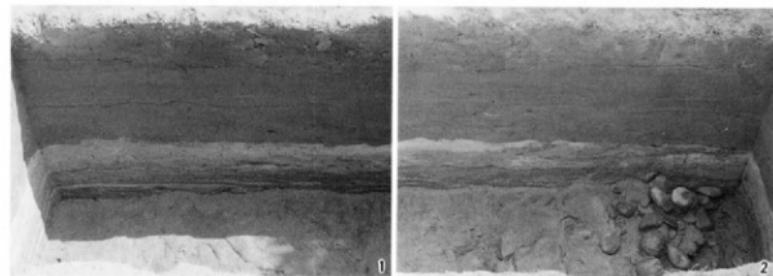


Figure 54. I トレンチ東壁土層 (1-2)

田の耕作土、畑地を造成したと考えられる褐色粘質土、その下の砂層、さらに調査区南端部で検出された角閃花崗岩の基盤層である。しかしながら何らの人为的な遺構も検出されず、砂層の堆積状況は、谷の上から流れ下る小流の氾濫状態を示している。

出土遺物 (Figs. 55~58)

出土遺物の量は極めて少なく、石器1点、縄文

土器片1点、土師器3点、青磁片1点、土鍤1点である。Fig. 56はA トレンチの黄褐色砂層の地表下1.40mの深さから出土した黒曜石製の削器である。良質の黒曜石を素材とし、先端に表裏から二次加工を加え刃部を造り出している。器面は磨耗しており、器長5.8cm、幅4.5cm、最大厚1.3cmを測る。縄文時代後期頃のものと考えられる。

Fig. 55の1は完形の土師器皿で、口径7.3cm、

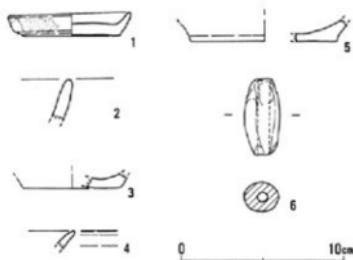


Figure 55. トレンチ出土遺物実測図 (1/3)



Figure 56. A トレンチ出土遺物(1)



Figure 57. A トレンチ出土遺物(2)

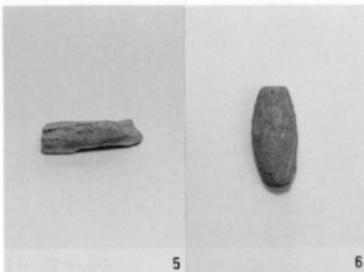


Figure 58. I トレンチ出土遺物

器高1.35cmを測る。厚さ0.7cmの分厚い底部からそのまま口縁部を引き上げる。内外面ともヨコナデ、底部は糸切離しの後板目調整している。胎土に細い砂粒が多く含み、焼成良好、色調は茶褐色、一部に煤の付着が認められる。14世紀代のものであろう。

2はAトレンチ最下砂層から出土した口縁部の細片で、残高2.55cmを測る。胎土に砂粒が多く含み、焼成良好、色調は暗褐色を呈す。器面は磨滅が著しいが、繩文土器の破片である。3はEトレンチ褐色粘質土から出土した土師器皿の底部破片で、糸切り底である。4はHトレンチ暗褐色粘質土から出土した龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、残高1.1cm、胎土は精良で釉色は灰緑色である。5はIトレンチ褐色粘質土から出土した土師器皿の底部片で、復元底径9.0cm、残高1.35cmである。底部は板状压痕、胎土に砂粒が多く含み、焼成良好、器面は褐色を呈す。6

もIトレンチ褐色粘質土から出土した管状土錐で、長さ4.6cm、最大径2.15cm、孔径0.8cm、重さ17gを測る。胎土は精良、焼成良好で、器面は茶褐色を呈す。

小結

以上の調査結果から、当該地は少なくとも縄文時代後期以降は小河川の氾濫原で、集落や墓地などが形成される地形ではないことが知られ、水田あるいは畑地が造成されるようになったのは14世紀以降と考えられる。したがって、金印に関連する造構も全く存在しないことが明らかとなった。

註

- 註1. 中山平次郎「漢委奴国王印の出所は奴国王の墳墓に非らざるべき」(『考古学雑誌第5卷第2号』1914年10月)
- 註2. 森貞次郎・乙益重隆・渡辺正氣「福岡県志賀島の弥生遺跡」(『考古学雑誌第46卷第2号』1960年9月)

2. E-3・4区(中津宮古墳)の調査

位置と環境 (Figs. 59~60)

調査地は福岡市東区大字勝馬1787-1番に所在し、勝馬小学校北西側の独立丘陵頂上部付近に位置する。この丘陵は北東～南西方向で約110m、北西～南東方向で約90mの平面橢円形を呈し、最高所の標高は20.50mである。丘陵の基盤層は花崗岩風化土で、丘陵の中位以下は風成砂



Figure 59. E-3・4区調査地点遠景（北から）

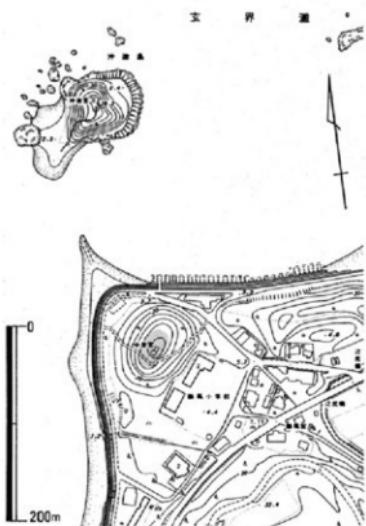


Figure 60. E-3・4区調査地点位置図 (1/5000)

で覆われている。

この丘陵上には志賀海神社の中津宮が造営され、北北西約150mを隔てた海上には沖津宮を祭る沖津島という小島があり、干潮の時には徒歩で渡ることができる。また東側には道路を隔てて長さ240m、幅70mの東西に長い低丘陵があり、東端部は地元の伝承で「ふるみや」と呼ばれている。貝原益軒編纂の『筑前國統風土記』には、「此三神は三所に跡を垂給ふ。底津少童命は、則今之志賀の町の北なる本社他(中略)。中津少童命は、志賀島の西北勝馬と云所の濱、勝馬明神の社より南に、小なる山ありて、中津明神と云社あり。是也。表津少童命は、中津明神の社より北一町餘に、勝馬明神の社あり。是也。」とあり、中津明神が中津宮であることを記している。地元の伝承の「ふるみや」の地は、本来志賀海神社の底津宮が鎮座していた所と考えられる。

また、現在の中津宮社殿はコンクリート製の基礎で瓦葺きであるが、いつごろ建て替えられたかは不明である。志賀海神社宮司阿曇家に伝えられていた『万暦家内年鑑』には、福岡藩三代藩主光之の1669(寛文9)年の条に「黒田光之志賀宮本社末社内外拝殿樓門文殊堂藥師堂修復。中津宮沖津宮再建」とみえ、両宮とも再建されている。さらに1819(文政2)年の条に「八月二日沖津宮修復に付遷宮、二十三日上遷宮」、1832(天保3)年の条に「九月二十二日沖津宮修復に付き中津宮へ遷座」とあり、近世に中津宮の修復が何回か行われていたことが推測される。

調査の経過

この丘陵周辺は、かつて日下部国男氏により弥生土器、土師器、須恵器などが採集され、中津宮遺跡として知られていた。5月の分布調査では、丘陵中位の花崗岩風化土層から弥生土器の細片を採集したが、丘陵頂部付近は古くからの中津宮社殿の造営と前庭の造成のため、遺構が存在するとは考えなかったのである。しかしながら、7月下旬に再び踏査を行ったところ、

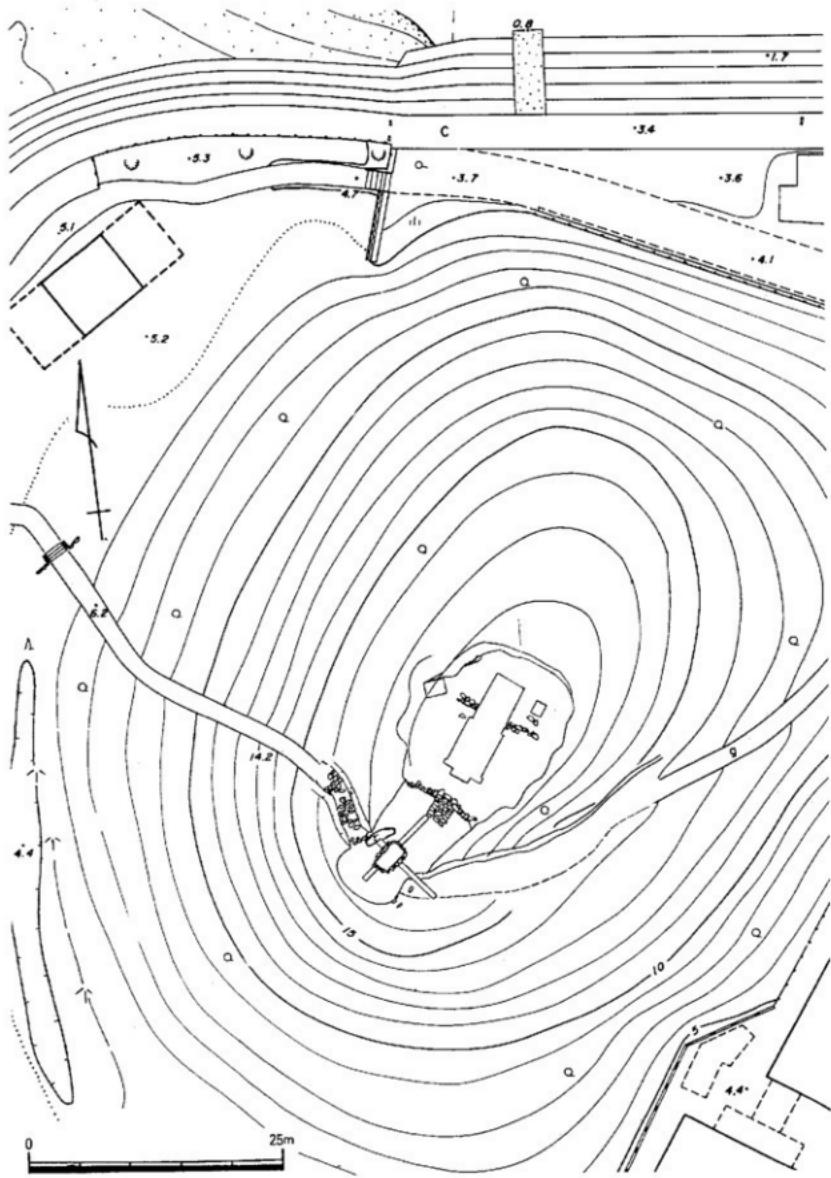


Figure 61. E-3-4区中津宮古墳位置図 (1/500)



Figure 62. 中津宮古墳現況（東から）

降雨による土砂流失で前庭部の平坦部にコの字形の石組みがわずかに観察され、石室の残存することが予想された。

調査は8月8日から着手し、石室内の埋土除去、埋土の洗浄、周辺の地形測量、石室実測、盛土と石室の裏込め状況の観察のためのトレノ掘削、埋め戻しを順次行った。記録的な猛暑や石室内外とともに土が固く踏み締められていたため、発掘作業は難航し、全ての調査を終了したのは9月18日である。

古墳の立地と現況 (Figs. 61~62)

古墳は独立丘陵頂部からやや西寄りの尾根先端部に立地し、中津宮社殿前庭の位置にある。北西側と南西側には古くからの海側から登る石段参道があり、南東側にも新しい参道が造られている。したがって、古墳の立地する部分は3方向からの参道が交差する位置にあり、土が固く踏み締められていることもうなづける。この前庭は8×11mの平面長方形の平坦面をなしており、標高15.50mの等高線がめぐる。前庭から社殿側には7段の石段が積まれ、比高差は1.5mである。この2段の平坦面の造成時期は記録上不明である。

石室の構造 (Figs. 65~70)

石室は長軸方位をN-45°-Eにとり、平面長方形を呈する竪穴系石室である。天井石は失われており、腰石から4~3段目までが残っていた。西側壁長275cm、東側壁長265cm、北（奥）壁長165cm、南（前）壁長155cmを測る。奥壁は長さ



Figure 63. 中津宮古墳発掘状況（東から）

65~110cm、高さ30cmほどの平石を2枚据えて腰石とし、2段目は中央部に同じ規模の石を横積みし、両側にやや小振りの石を積んでいる。3段目、4段目は更に小振りの石を横積みしており、床面からの残高は75cmで、壁体の傾斜はほぼ垂直である。

前壁は奥壁と同様の大きさの平石を2枚据えて腰石とするが、西側隅には幅15cm、厚さ12cmの小石をかませている。2段目は中央部にやや小さ目の平石を2枚横積みし、両側に小振りの平石を積んでいる。3段目~4段目の石積みは前壁とは異なり、東側約半分の位置までは長さ40~35cm、幅15~30cm、厚さ11~22cmの平石を小口積みし、そこから西側は同じ規模の平石を横積みしている。石積みの傾斜はやや外開気味である。

両側壁は長さ75~110cm、高さ20~30cm程度の平石をそれぞれ3枚据えて腰石としている。2段目からは小振りの石を横積みし、3~4段目まで残存する。壁体の傾斜は西側壁がほぼ垂直、東側壁は3段目から持ち送り気味となる。石材は大部分が花崗岩の転石で、奥壁の一部に角閃石が使用され、周辺の石材が利用されたと考えられる。

この石室の型式については、前壁の石積み状況や後述する遺物等から、当初は横穴式石室になるものと考えたが、石室掘り方の観察から竪穴系石室とした。

墳丘および石室掘り方 (Fig. 71)

墳丘の残存や石室掘り方の観察のため、A~D

までのトレンチを石室に直行するように幅50cmで設定した。石室を乗せる中津宮丘陵の基盤層は花崗岩風化土で、南東側のBトレンチではそれを直接切り込んで掘り方を造っている。掘り方と石室外には間隙がなく、石材は掘り方に接して構築されている。墳丘は流失し、現状を

止めない。

奥壁側のAトレンチでは石室上端部から茶褐色粘土が検出され、腰石下部まで観察された。掘り方はその粘土を切り込んで造られ、掘り方と石室外には間隙がないことはAトレンチと同様である。西側壁のDトレンチでは、堅く締

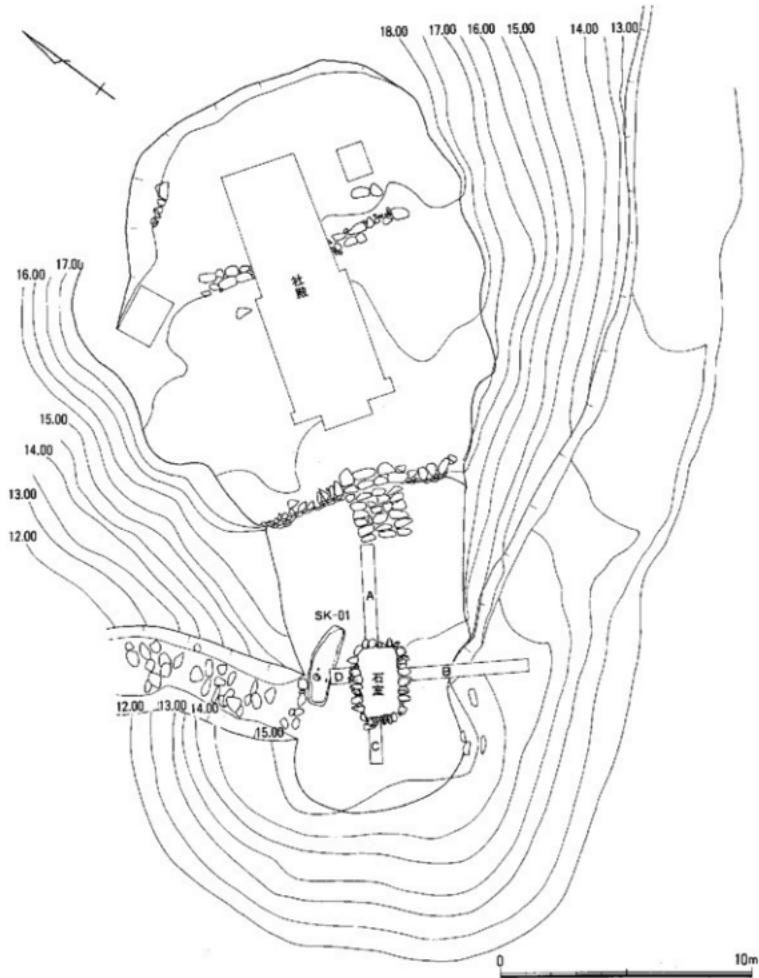


Figure 64. 中津宮古墳周辺測量図 (1/200)

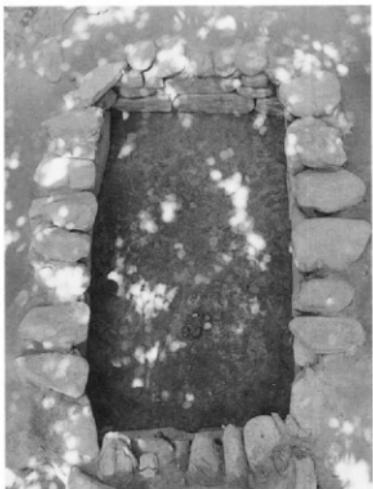


Figure 65. 古墳石室



Figure 66. 石室東側壁



Figure 67. 石室西側壁



Figure 68. 石室南側壁



Figure 69. 石室北側壁

また黄褐色粘土を切り込んで石室掘り方を造り、掘り方と石室外面との間隙はない。当初渋道部と考えた前壁側のCトレンチでも、固く締まった黄褐色粘土を切り込んで石室掘り方を造っている。

以上の各トレンチの土層観察状況から、石室の構築に当っては、まず尾根の西側部に粘土を敷き詰めて整地を行い、さらに石室掘り方を造っていたことが知られる。墳丘の形態は残存しないで不明であるが、周辺の石材の散乱状況や、石段に古墳石材が利用されているものもあることなどから、積石塚の可能性が強いと考えられる。

遺物出土状況 (Figs. 72~74)

石室内の埋土は固く踏み締められており、移植ゴテも通らない状態であったが、埋土は全て洗浄して遺物の検出に努めた。埋土上位には黒曜石片、弥生土器片、土師器片、須恵器片が混

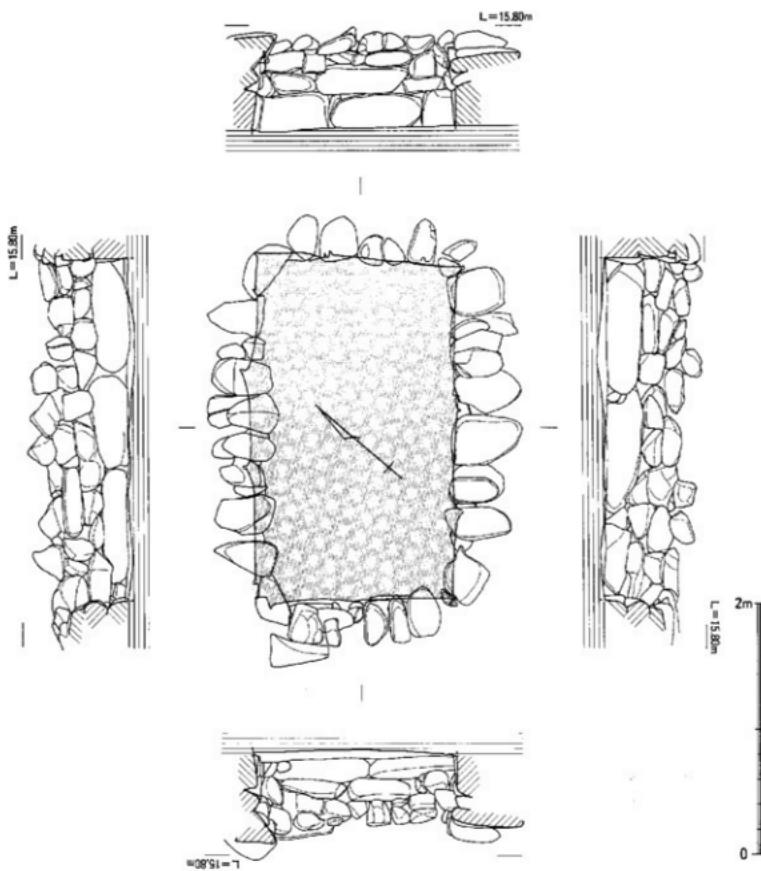


Figure 70. 中津宮古墳石室実測図 (1/40)

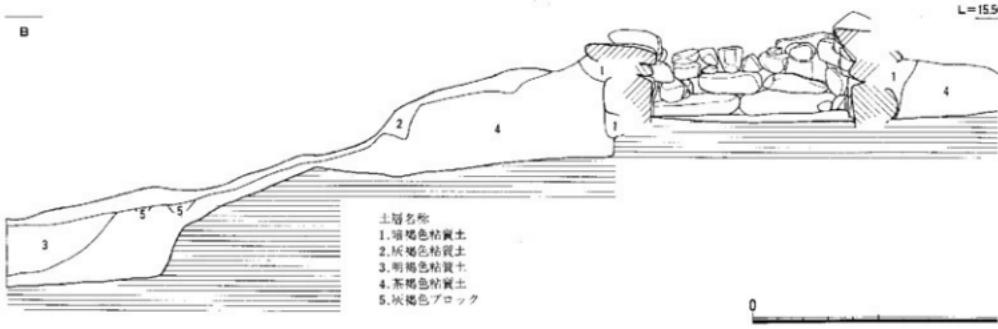


Figure 71. 中津宮古墳墳丘土層断面図 (1/40)



Figure 72. 石室内遺物出土状況

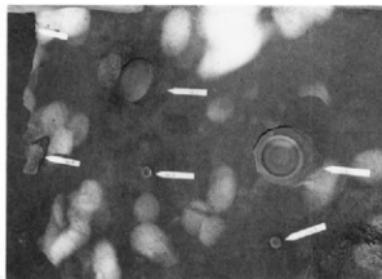


Figure 73. 石室東側壁付近遺物出土状況

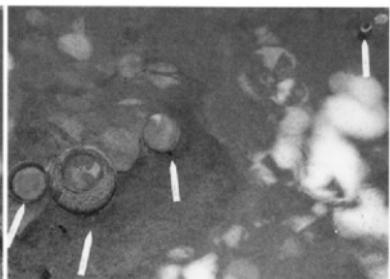


Figure 74. 石室中央部付近遺物出土状況

在しており、後世の擾乱を受けていた。埋土中位からは遺物の出土量も増加し、ガラス小玉や耳環などの装身具、刀子や斧などの鉄器が検出された。床面から20cmまでの埋土からは、石室の築造年代を示すと考えられる須恵器の坏身と坏蓋の完形品、小玉、耳環などが出土した。床面直上からは須恵器の坏、壺、鉄矛、耳環などが検出されたが、その殆どは原位置を保つ状況

ではなかった。

以上の状況から、石室は古くから開口し、弥生土器などを含む周辺の残土が埋められたことが知られる。

出土遺物 (Figs. 75-78)

須恵器 (Fig. 75の1~5)

1は坏身で口縁部を一部欠損する。口径9.9cm、器高3.2cmで、底部はほぼ平坦、体部から口

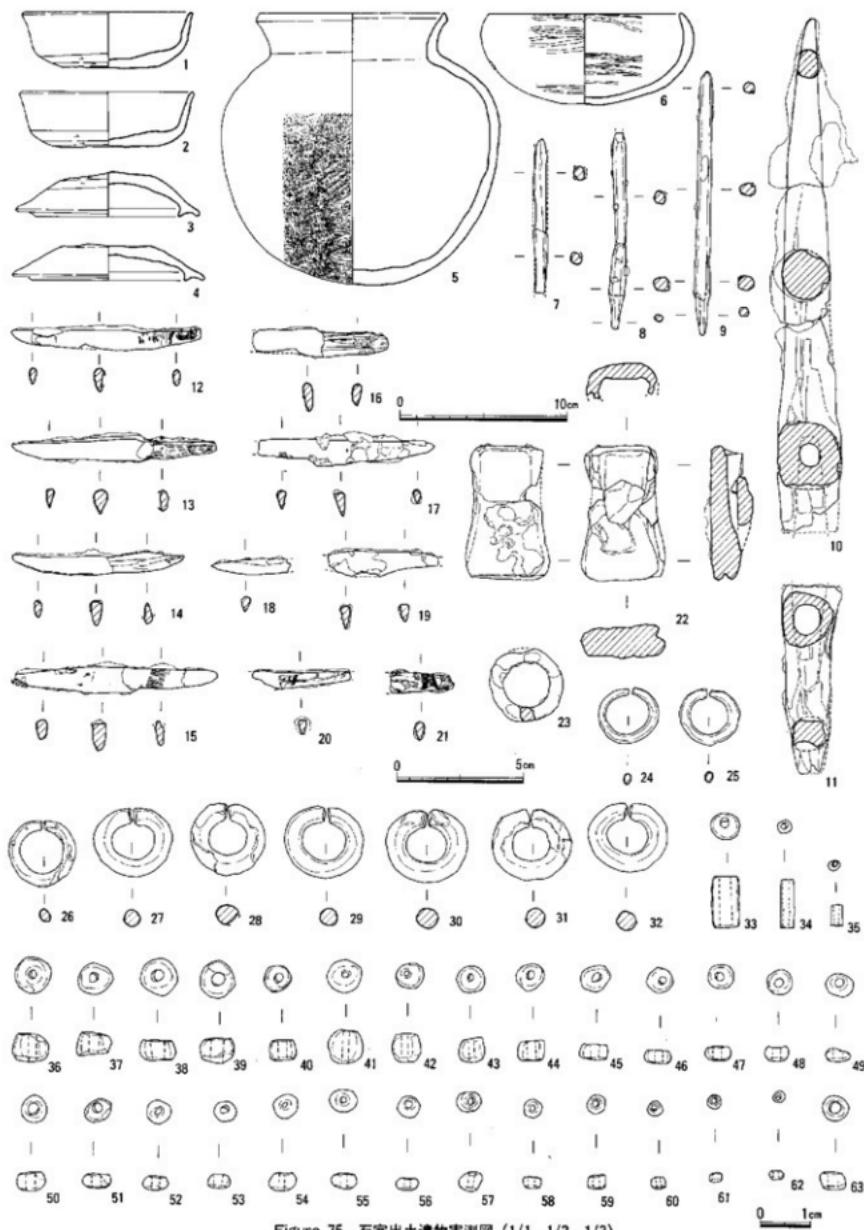


Figure 75. 石室出土遺物実測図 (1/1, 1/2, 1/3)

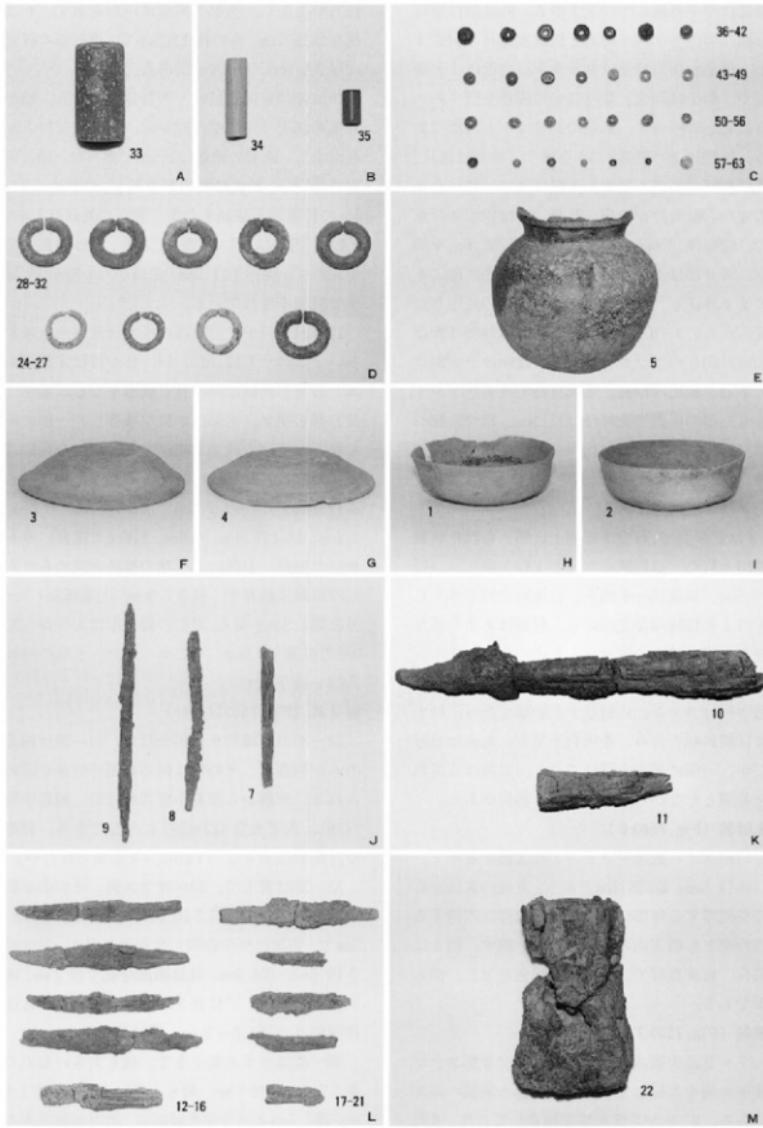


Figure 76. 石室出土遺物

縁部はやや外反しつつ立上がる。外底部は順時計回りのヘラケズリのあと板状施文具で調整する。体部から口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整で、胎土は精良、焼成良好で灰色を呈する。2は完形の环身で、形態や調整は1と同様である。口径10cm、器高3.2cmを測る、胎土は精良、焼成良好で灰色を呈す。内部に詰まっていた土の中から獸骨片が検出された。3は完形の环蓋で、受部径10.9cm、口径8.5cm、器高2.6cmを測る。天井部はやや平坦で、体部から受け部にそのまま外反しつつ張り出す。口縁部の立上りは受部から0.3~0.1cm程度である。天井部外面は順時計回りのヘラケズリ、そのほかはナデ調整である。胎土は精良、焼成良好で灰褐色を呈す。4も完形の环蓋で受部径は11.3cm、口径9.1cm、器高2.1cmを測る。3に比べてやや扁平で口縁部の立上りは受部から0.2cmである。胎土、調整、色調は3と同様である。

5は短頸壺で、石室床面直上に据えられた状態で出土した。口頸部を3分の1程欠損し、口径10.9cm、器高16cmを測る。口縁部は短く外反し、そのまま口縁端部を収める。肩部はあまり張りをもたず、球形の体部から丸底の底部へ続く。外面は口縁部から肩部までがナデ、体部から底部が平行タタキ、内面はナデ調整である。胎土には細砂粒を含み、茶褐色を呈す。焼成は良好だが、一部に窯変を受けており、器面は灰黒色を基調としながら灰色を呈する部分がある。

土師器 (Fig. 75の6)

口縁部から底部を3分の1程欠損する环で、口径11.5cm、器高5.4cmを測る。丸底の底部からやや肥厚する体部に続き、口縁端部に内湾する。内外面とも横方向のヘラミガキを施す。胎土は精良、焼成良好で、器面は茶褐色を呈し、滑らかである。

鉄器 (Fig. 75の7~23)

7~9は尖根式の鉄鎌で、殆どが身部および茎部先端を欠損しており、範被部と茎部の破片である。8・9が茎部先端が残存しており、8の現存長11.7cm、茎の長さ2.0cm、範被部の断面は

長方形を呈し、茎部の断面は円形を呈す。9は現存長15.7cm、茎の長さ2.5cmで、範被部の断面は厚さ1.0cm、幅1.0cmである。

10は矛の身部、11はその石突部である。10が石室西側寄りの奥壁付近から、11は前壁付近から出土し、両者の距離は1.5mであった。10の現存長30.4cm、断面は略円形を呈し、切先から24.8cmの位置から袋状をなす。袋部の外径は3.8×4.0cm、内径は1.4×1.2cmである。11は基部先端が完形で、現存長11.3cm、先端から4.8cmの位置まで袋状をなしている。

12~21は刀子で、鉄器の中では最も出土数が多い。このうち12、13、14、15がほぼ完形である。刃身の断面はいずれも楔形をなし、茎部は長方形を呈す。茎部は木質が残存し、一部に糸で巻いた痕跡を残すものがある。12は全長11.3cm、刀部長7.3cm、身幅1.5cmを測り、13は同じく12.1cm、7.7cm、1.5cm、14は10.2cm、6.0cm、1.2cm、15は12.0cm、6.6cm、1.6cmで茎部に糸を巻いた痕跡、刀部に木製鞘の痕跡が認められる。

22は鍛造鉄斧で、長さ7.9cm、上端部幅4.2cm、刃部幅4.5cmを測る。刃部の最大厚は刃先から3.0cmの位置で2.0cm、そこからソケット状の柄插入部を造り出す。

装身具 (Fig. 75の24~63)

24~32は耳環で9点出土した。24~26が銅芯のみが残存し、その他は銅芯銀張の痕跡が認められる。形態から細芯小型(24~25)、細芯中型(26)、太芯大型(27~32)に分類できる。詳細な計測値は第6章のTable. 4を参照されたい。

33~35は管玉で、33がガラス製、その他が碧玉製である。33は長さ20.5mm、径11mm、孔径4.5mmで、表面はやや白濁した青色を呈す。34は長さ19.5mm、径4.5mm、孔は両面穿孔で径2mm、淡灰緑色を呈す。35は長さ8.5mm、径4.5mm、孔は片面穿孔で径2.5~2mm、深緑色を呈す。

36~62はガラス製小玉で、最も大きいもので長さ5.5mm、径7mm、最も小さいもので長さ1.5mm、径2.5mmとバラツキがある。肉眼観察であるが、色調も黒色、濃緑色、紺色、青色、淡青色、

青緑色、緑色などがある。63は透明白色の水晶小玉で、これらの小玉の詳細は第6章のTable.5を参照されたい。

SK-01

Dトレンチの発掘過程で検出した平面隅丸長方形の土壙で、石室西側側壁から1m離れた位置にある。長軸をほぼ東西にとり、長さ3.23m、最大幅1.0m、両端は東側で0.48m、西側で0.54mを測る。深さは0.50m～0.27mである。底面には東側短壁に接して平面楕円形の浅皿状のビット、東側長壁に接して隅丸方形のビットが埋められている。前者は長径0.50m、短径0.32m、深さ0.22mで、後者は径0.60m、深さ0.26mを測る。床面近くの埋土中から石包丁と磨製石剣が各1点出土した。弥生時代中期のものと考えられるが、遺構の性格は不明である。

SK-02

Dトレンチの発掘中に検出した土師器の壺で、SK-01が埋められたものと考えられる。体部上半部から口縁部と底部を欠いており、取り上げた後復元に努めたが図示するには至らなかった。器体は2.0mmと極めて薄く、外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリが施されており、古墳時代前期の布留式土器である。なお、内部からガラス製小玉1点が出土した。

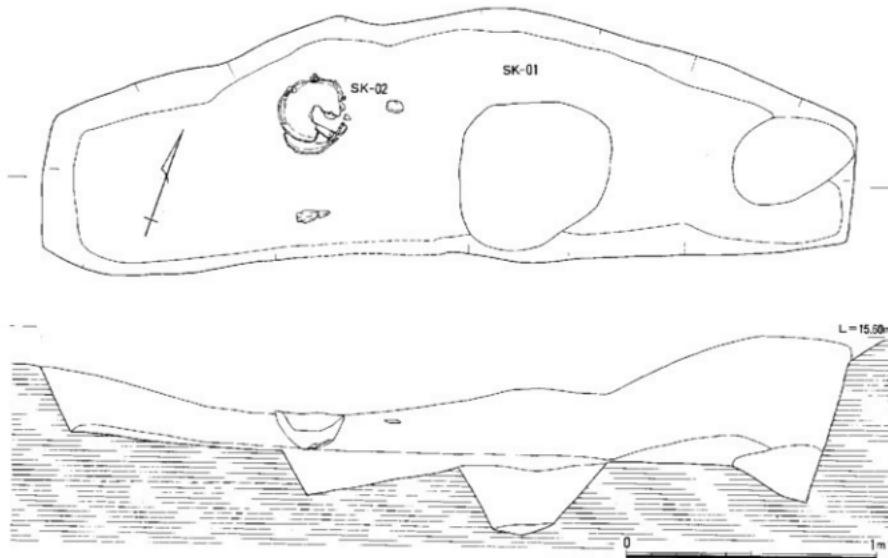


Figure 77. SK-01・02遺構実測図 (1/20)



Figure 78. SK-02出土状況

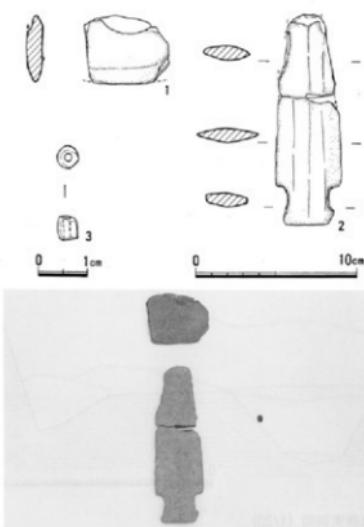


Figure 79. SK-01・02出土遺物実測図 (1/1, 1/3)・写真

SK-01出土遺物 (Fig. 79-1・2)

1・2の石製品はSK-02(埋納土器—土師器壺形土器)を挟んで出土したものである。1が凝灰岩製の石包丁の破片である。表面は丁寧な研磨痕が見られ、刃部の棱線が明瞭に認められる。裏面は剥離を生じている。刃の先端部は鋭さに欠け、丸味をもち、その一部には平らに研いだ加工痕も認められる。残長は5.2cm、幅も4.2cmを残す。2は灰褐色の粘板岩製の石剣である。先端部は欠損している。表面は研磨されており、風化しているものの残存状態は良好である。柄の抉りは両端からほぼ均等に加工され、基部にいたる。基部の端部は丁寧な研磨が施されている。刃部は鋭角に加工され、研磨を施す。残長は12.9cm、厚さ0.9cmである。

SK-02出土遺物 (Fig. 79-3)

3は壺形土器の内側の底部近くで出土したガラス小玉である。深みのある青色を呈するが、透明感はない。長さ5mm、径4.5mmを測る。

3. L-8区（裏遺跡）の調査

位置と環境 (Fig. 82)

勝馬地区の沖積地南端の奥まった場所は字裏地区である。江尻川を挟んで調査地点の西側約100m離れて堂山の丘陵部がある。調査地点の東側には35mの落差のある丘陵斜面が迫る。西側は上流の谷部を下ってきた江尻川の流路が沖積地の南側の先端部に達する。昭和30年代の江尻川の水害では河川の氾濫で標高12mの平地を土砂混じりの濁水で水没させている。この出来事は古代から江尻川の存在がこの地域の古代環境や人々の生活に大きく影響を与えていたことが想定できる。この自然条件はこの地域の集落の立地、遺物出土状況、土層堆積状況を理解するにはこの状況を考慮しなければならない。また調査区の南側に接して、東側の丘陵斜面の窪地を流れる小川があり、調査区の西側で江尻川に流れ込む。これらの自然条件を考慮し、調査地点の全体像を把握する必要があろう。



Figure 80. M-8区調査地点A・Bトレンチ（東から）



Figure 81. M-8区調査地点D・Eトレンチ（北から）

調査の概要 (Figs. 80-81)

この調査地点は昭和22年に細形銅劍の鋲型が出土した前田氏宅の井戸が調査地点に隣接して北側にある。標高は12~13m、上下2枚の芯の苗畑になっている。南北に長軸をとるトレンチをA ($1.5 \times 7.5\text{m}$) B ($1.5 \times 6\text{ m}$) C ($3 \times 5.5\text{m}$) 開けた。CトレンチはSE-01(井戸)がトレンチの南端で出土したため東西に拡張した。D、Eトレンチは上段の畑に設定し、南北方向にD ($1.5 \times 12\text{ m}$)、これに直交するE ($1.5 \times 5\text{m}$) を開けた。

土層堆積状況 (Figs. 84+85)

A、Bトレンチでは上から約50cmは耕作土である。この下は整地層。さらに砂質土と砂の互層が続き、その下で焼土層がAトレンチで見られる。青灰色砂や砂質土がその下にある。さらにその下の灰色砂層が湧水点となる。この砂層の下は花崗岩の風化した粗砂層となる。遺物は表面から1m下の灰黒色砂質土層で天保通寶が一枚出土、Aトレンチの灰黒色砂層から弥生土器の小形の甕片が3~4個体出土している。



Figure 82. M-8区調査地点位置図 (1/5000)

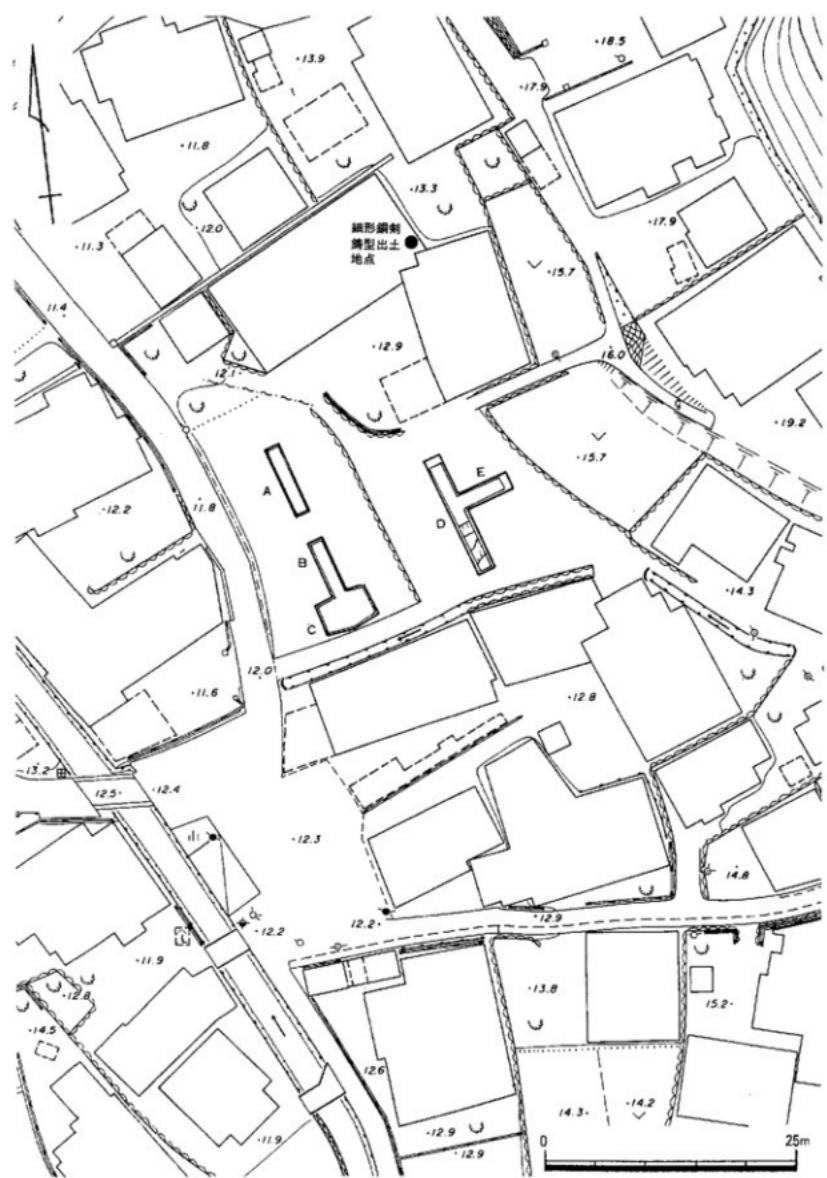


Figure 83. M-8区調査地点トレンチ配置図 (1/500)

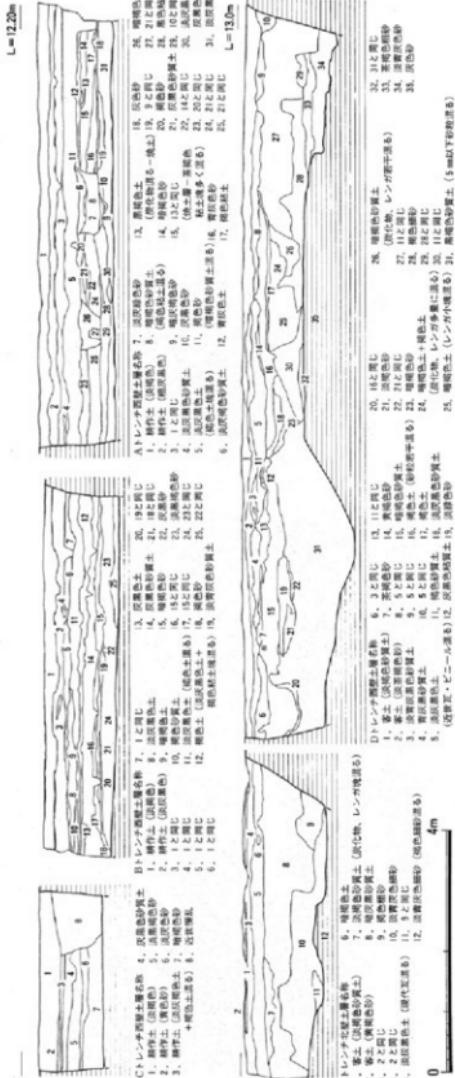


Figure 84. M-8区調査地点トレンチ土層断面図 (1/80)

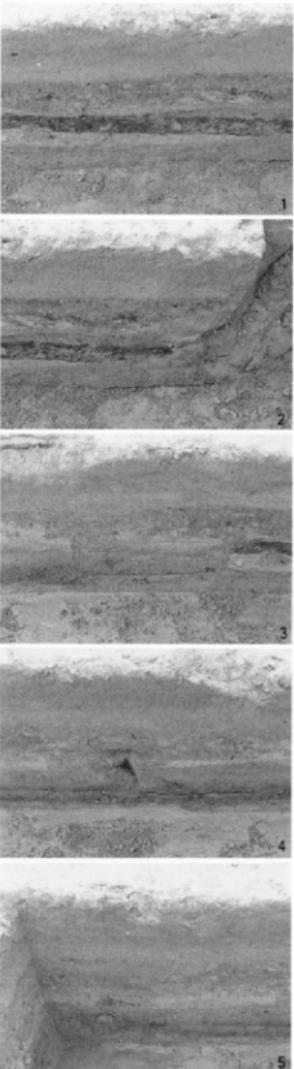


Figure 85. Aトレンチ西壁土層 (1-5)

SE-01の調査

調査の概要 (Fig. 86)

この石組の井戸はCトレンチの南側端で検出した。この遺構の1m程東でも別の石組の一部が出土した。この石組の全体像は明らかではないが、石組の隅の部分を検出している。挙大程の礫を2~3段に積み重ねている。これら石組遺構と井戸との関係は不明である。但し、両遺構共に暗褐色砂層(Figs. 84-87)で確認したものである。井戸の井側内には人頭大の礫が石臼、擂鉢、近世国産陶磁器などの破片に混じって出土した。

井側内の掘り下げは地下水の湧水点が高いので検出面より僅かに下がった地点で止めた。

遺構は井戸と石床からなっている (Fig. 88)。井戸は大形の礫で、裏ごめの石は小形の礫を用いている。裏ごめからは近世国産陶器の碗、擂鉢、甕、石臼などが出土した。石床には扁平な大形石を2か所におき、小形の礫を数段に重ねて隙間なく埋め込む。遺物はこの隙間で検出した。墨書き師器の環2点が大形石の直上に置かれる状態で検出した。瓦片、肥前系の染付け碗、施釉陶器の碗なども出土した。



Figure 86. M-8区調査地点Cトレンチ（東から）



Figure 87. Cトレンチ西壁土層



Figure 88. SE-01発掘状況（南から）

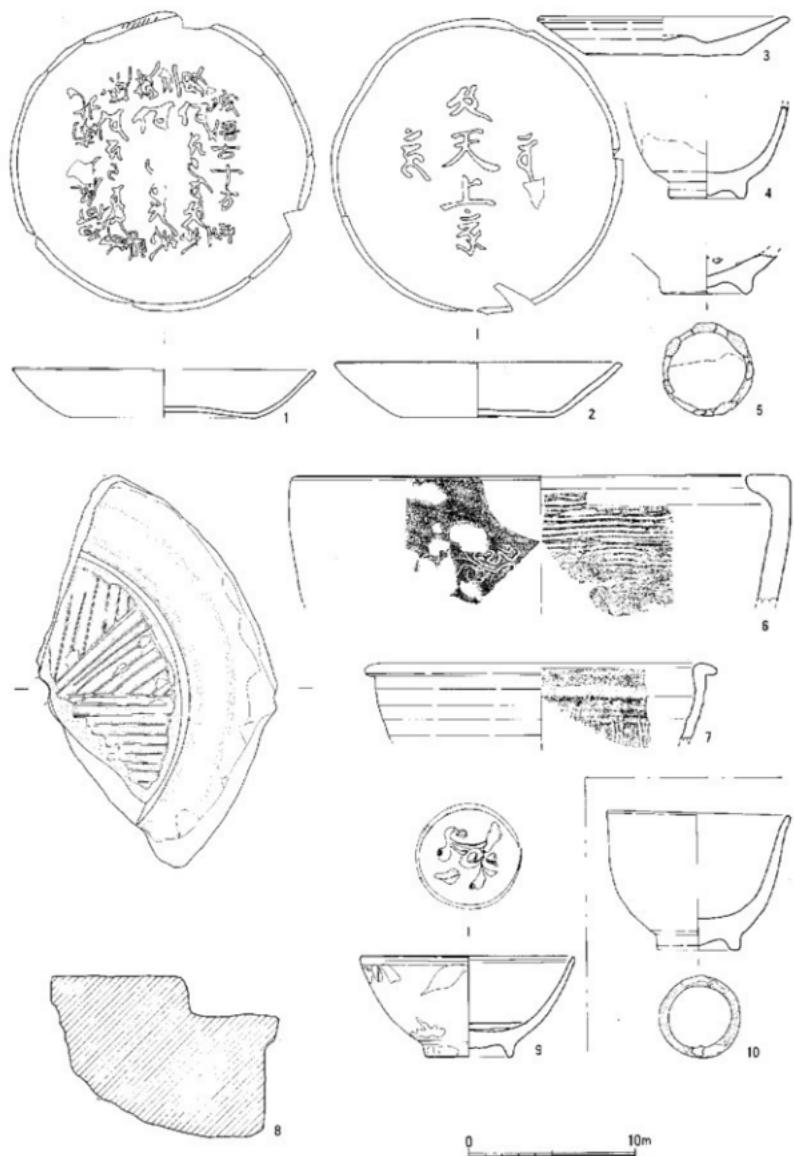


Figure 89. SE-01及びDトレンチ出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Figs. 89-90)

1・2 墨書き土師器の壊である。1の内底には墨による経文「空本來東西何原□南北遂故三界城悟古十方」が巡るように書かれ、内側には金剛界四仏種子をあらわす東西南北(アク)(タラーク)(ウーン)(キリーク)が縦三行にわたって書かれている。2は内底に「天上」と書き、周囲には上から時計回りに北(キリーク) 東(アク) 南(ウーン) 西(タラーク)が書かれている。器壁は薄く、焼成はあまり。口径17.5cmと16.6cm、器高、2.95cmと3.3cmである。3は土師器の

壊で井側内より出土した。器壁は厚く、糸切り底である。復元口径14.6cm、器高2.3cmを測る。4は雄鶴陶器の碗で、外面胴部下位から底部は露体である。5は白磁碗である。黒色粒を多く含む灰色の胎土で、釉はガラス質の灰色である。内底には5か所に砂目跡があり、高台疊付にも目跡が見られる。6は瓦質の火舍である。7は褐釉陶器の摺鉢、8は凝灰岩製の下白9は肥前系の染付の碗、10はDトレンチの耕作土の下の褐色砂質土層より出土した施釉陶器の碗である。釉は透明度のある灰色を呈する。

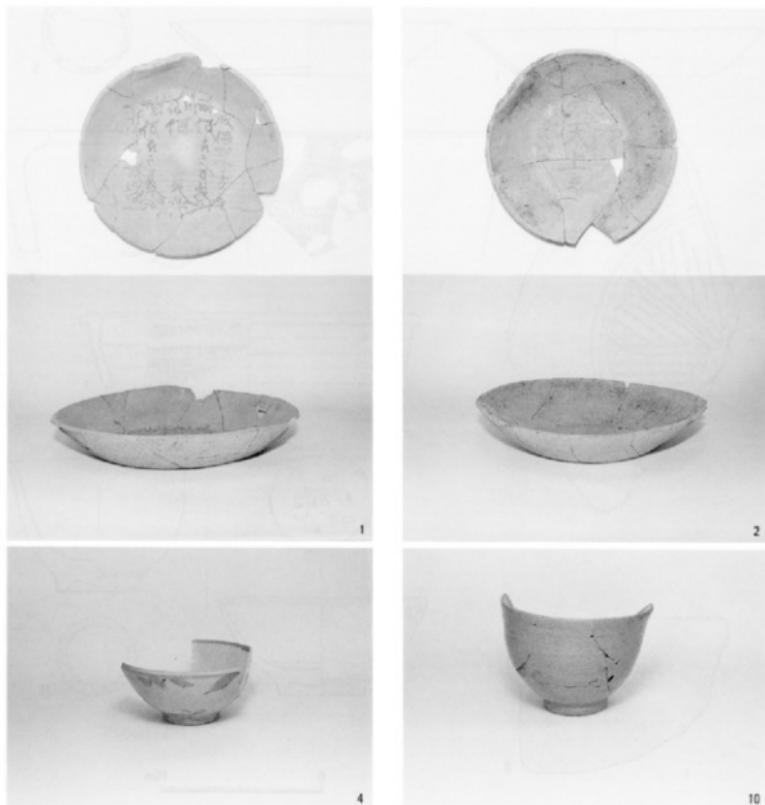


Figure 90. SE-01及びDトレンチ出土遺物・写真

L-8区（堂山古墳）の調査

位置と環境 (Figs. 91~93)

堂山の丘陵地は南から張り出す標高47mの丘陵部が15m程に一旦標高を下げ、鞍部を作り、ここから北へ堂山の丘陵部へ再び10m程登る。この鞍部からは頂上部の尾根に小径が延びる。小径の両側には果樹園や畠が作られている。堂山の丘陵の東側直下には西福寺がある。西福寺の裏側は丘陵の東斜面となるが、近年この斜面の崩



Figure 91. L-8区調査地点遠景（東から）



Figure 92. L-8区調査地点位置図 (1/5000)

落が著しいために、丘陵頂上部の平坦部が狭くなっている。丘陵部西側の斜面は15m程の落差があり、斜面には雜木林が生い茂り、旧地形をほぼ留めていると思われる。しかし標高20m以下では丘陵部斜面の開発が既に行なわれており、農地や宅地がこの標高まで迫っている。丘陵北側斜面は急傾斜、約30mの斜面は頂上から丘陵下迄に22~23mの落差がみられる。今回の堂山の丘陵地の考古学的調査は5月の遺物の分布調査で始まり、この丘陵周辺の踏査を行った。この踏査では丘陵とその周辺では北側の丘陵裾部の標高13~16m前後のK-L-8-(1)区の畠で土師器、近世国産陶磁器などが採集され、南西側のK-9-(1)区の標高20mの水田では弥生土器、土師器、近世陶磁器などを採集している。さらに丘陵の東側地点は江尻川が山塊の谷部から流れ下り、開けた沖積地へ流れ込む入り口にあたり、沖積地が古代において奥深く造り江を形成していたとすれば、丘陵直下付近が入江最奥部となり、江尻川の流路の変遷を考慮したうえで、丘陵部東側地域での集落の立地を考える必要があろう。

調査の概要 (Figs. 94~97)

堂山丘陵では昭和31年に箱式石棺墓が1基発見され、調査が行われた。この石棺墓の他に更に2基の箱式石棺墓が存在したことが知られていた。今回は堂山丘陵部の遺物の表面採集と頂上部の箱式石棺墓周辺の測量 (Fig. 94) を行った。露出している石棺墓については内部を清掃し、記録写真 (Fig. 95) を撮った。さらに石棺墓周辺地で、その他の遺構確認調査を行い、これ迄その存在の判明しない2基の箱式石棺墓の搜索を行なった。頂上平坦部の北東隅では東側に僅かに張り出して旧地形を残している部分の調査を行なったが遺構らしきものは全く出土しなかった。しかし平坦部西側端の段落ちしている斜面に扁平な自然石の小口部分が重なった状態で確認できた。この石組は箱式石棺墓の残存部分と思われるが、墓の石材としての複数の扁平な自然石であろうと考える。



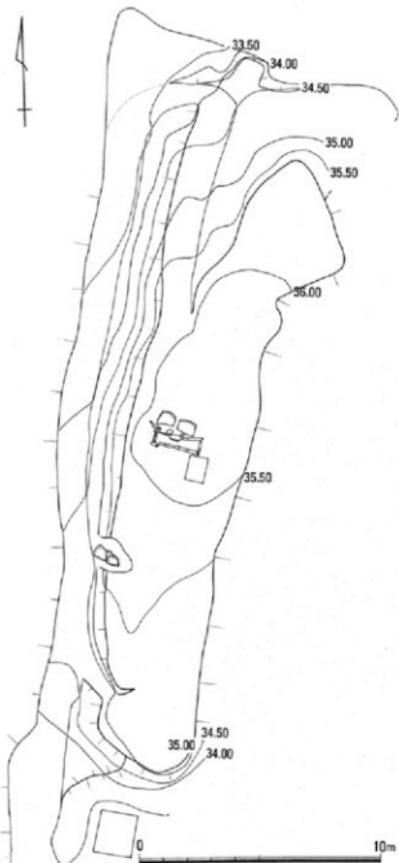


Figure 94. L-8区堂山箱式石棺墓周辺測量図 (1/200)

石組造構 (Fig. 97)

丘陵頂上の平坦部から一段下がった西側端に取り付けられた小径の東側斜面で出土したものである。石組は4枚の石からなっていたが、その内1枚は原位置から離れて見つかった。扁平な自然石を使用して1枚の石の上に2枚の石が重なった状態で検出をした。この石組以外には造構は出土せず、これに伴う遺物もない。



Figure 95. 堂山箱式石棺墓完掘状況 (南から)



Figure 96. 堂山石組造構現況 (南から)

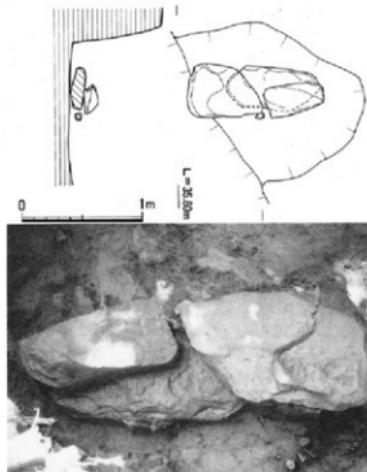


Figure 97. 堂山石組造構実測図 (1/40)・造構写真

第5章 志賀島・玄界島の海底調査

調査の目的

今回の遺跡発掘事前総合調査では、調査対象を陸上の遺跡や遺物ばかりではなく海底の遺跡や遺物にも注目し、水辺の開発に備えて、事前に調査することを目的にしたものである。

そのためには精度の高い海底地図・海底地形状況図（地層堆積状況を含む）を作成する。更に玄界島海底遺跡の分布調査及び遺跡の範囲、性格を確認することであった。これら海底地図の作成は今後この調査海域での開発、或いは遺物の発見や潜水調査があった場合に、その位置をこの地図に詳細に記録するための基本地図になり得ることを、この海底調査の目的にした。

調査の概要 (Fig. 98)

志賀島海底探査区域は北部区域の勝馬沖海域と南部区域の叶ノ浜～金印公園沖海域が探査対象区域である。

勝馬沖探査海域は北東地点：33°41'42"N、130°18'00"E、北西地点：33°41'42"N、130°16'48"E、南西地点：33°40'36"N、130°16'48"Eの3地点と志賀島北部区域を結ぶ直線の内側の区域からなっている。対象面積は約2.57 km²である。叶ノ浜～金印公園沖探査海域は北西地点：33°39'42"N、130°17'24"E、南西地点：33°39'12"N、130°17'24"E、南東地点：33°

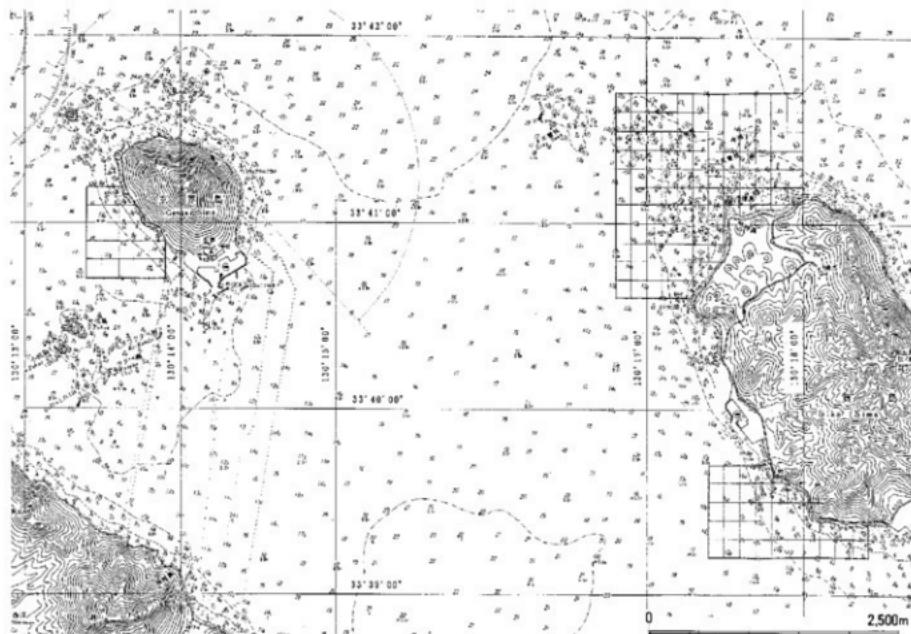


Figure 98. 志賀島・玄界島海底探査区域図 (1/50000)



Figure 99. サイドスキャン・ソナー送受波器



Figure 100. サイドスキャン・ソナー カラー映像器

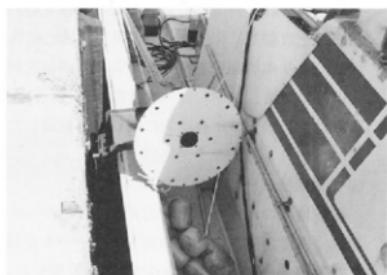


Figure 101. 地層探査機及び自動測量送受波器



Figure 102. 地層探査機記録器



Figure 103. データ処理パソコン(右)-GPS(左)



Figure 104. 探査データー処理作業風景

39°-12'N, 130°-18'-24"E. の 3 地点と志賀島北部区域を結ぶ直線の内側の区域からなっている。対象面積は約1.23km²である。

玄界島海底探査区域は玄界島南西部沖の区域の音無瀬戸海域である。探査対象海域は北西地点：33°-41'-12" N, 130°-13'-24"E、南西地点：33°-40'-42" N, 130°-13'-24"E、南東地点：33°-

40'-42" N, 130°-13'-54"E. の 3 地点と玄界島南西部を直線で結ぶ内側の区域からなっている。対象面積は約0.68km²である。

調査の方法

海底探査では現在利用できる機器より調査目的に沿って考古学・精度・経済性といった条件を配慮して選定した。(Figs. 99~104)

1. 志賀島の海底探査

勝馬沖海底探査区域 (Fig. 105)

調査の概要

志賀島の北端から北西沖の玄界灘には約1kmに渡って多數の岩礁や瀬があり、干潮時には博多湾から外海へ出る潮の流れはこの地点で激しい。海浜部では島の北端に下馬ノ浜、舞能ノ浜海浜があり、これらを挟んで標高18mの岩礁性の小さな沖津宮が明神鼻より100m沖合に位置し、この島の周辺海底は潮間帯となっている。明神鼻の西側には小規模な港の防波堤の痕跡がある。

海底探査対象区域には沖津宮より北側と東側の海域では海面下の洗岩や瀬が数多くあるため調査船をこの区域に入れての探査は不可能となり、調査対象区域の1/3の海域の探査に留まった。そのため探査に記録も下馬ノ浜沖合の限定調査区域のものとなった。今回の勝馬の海底調査で使用する基本地図は福岡市都市計画図(1/2500)の勝馬96である。この地図に海底探査による記録を図化し海底等深度線図 (Fig. 106) と

海底地形状況図 (Fig. 107) を作成した。今回使用した海底探査機は以下のものである。

サイドスキャン・ソナー (Figs. 99-100)

船の両舷から超音波を出し、海底起伏、底質変化等の反応強度を8段階の色調で表示する。

地層探査機 (Figs. 101-102)

周波数 (3.5KH_z) の超音波を使用した水中音波探査機で、海底面の起伏や海底質や堆積状況を把握する装置である。

自動測量装置 (Figs. 101-104)

周波数 (200KH_z) の超音波を使い水深を測定する水中音波探査機である。海底の測深を行い深浅図を自動的に作図させる装置である。この装置により地層探査を行いながら水深測量を同時に位置、水深、波の上下動、潮位、時刻等をコンピュータに自動的に収録し、収録したデータはコンピュータで処理する。

GPS受信機 (Fig. 103)

探査地点の正確な位置を出すには陸上からの測量は困難である。海底の測量・データを記録した地点の位置を出すためにGPSを使用した。



Figure 105. 勝馬沖海底探査区域（西から）

Figure 106. 湖州冲海床带深度图 (1/10000)

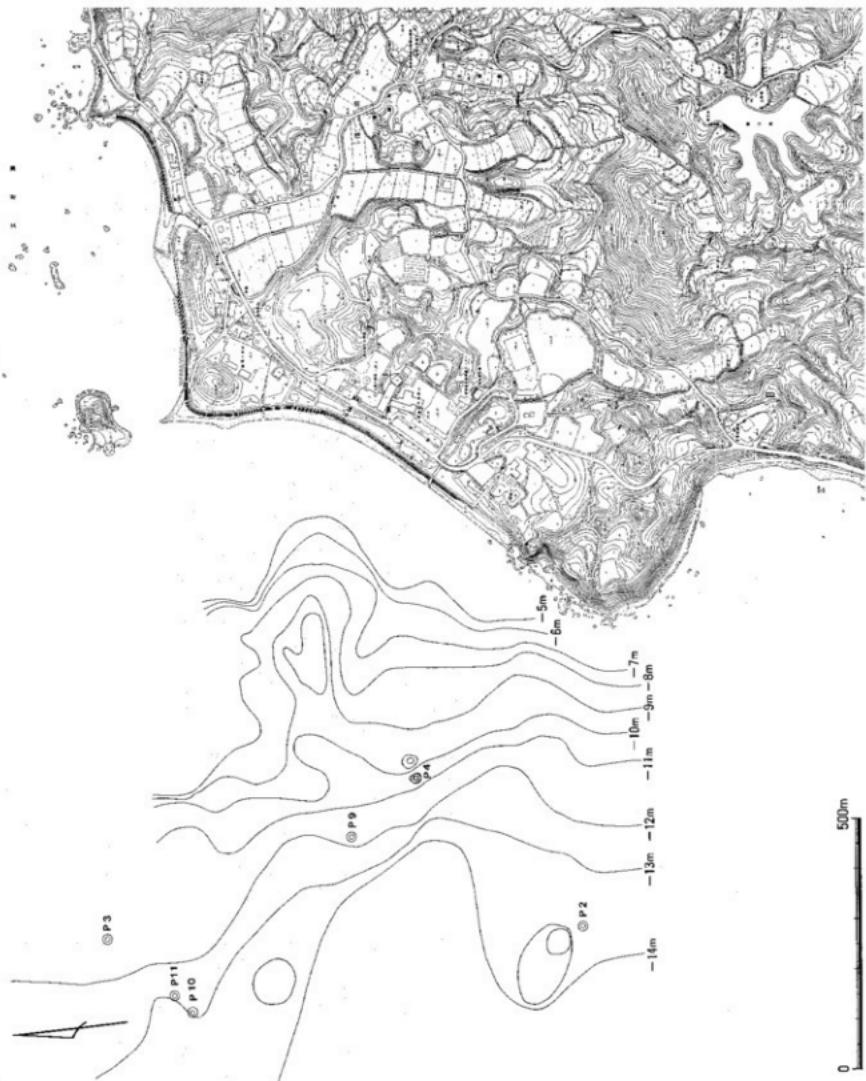




Figure 107. 摩周沖海底地形状況図 (1/10000)

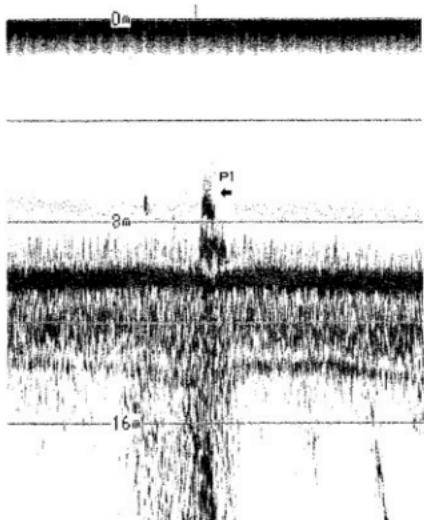


Figure 108. P-1地点海底及び地層堆積状況

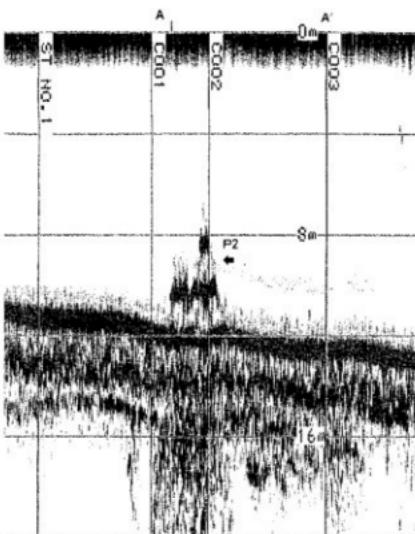


Figure 109. P-2地点海底及び地層堆積状況

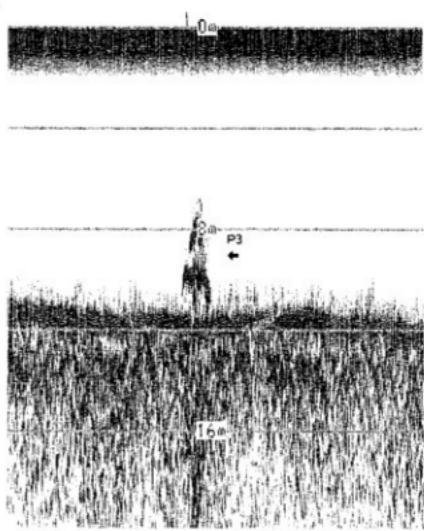


Figure 110. P-3地点海底及び地層堆積状況

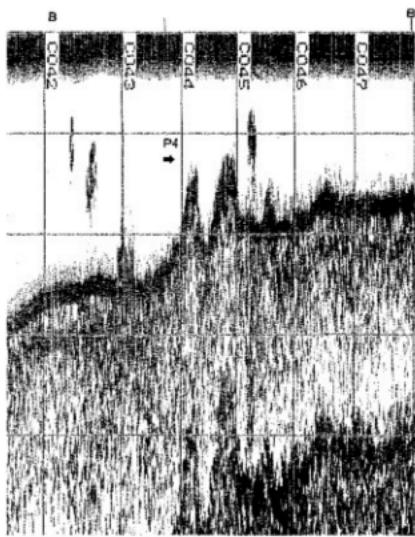


Figure 111. P-4地点海底及び地層堆積状況

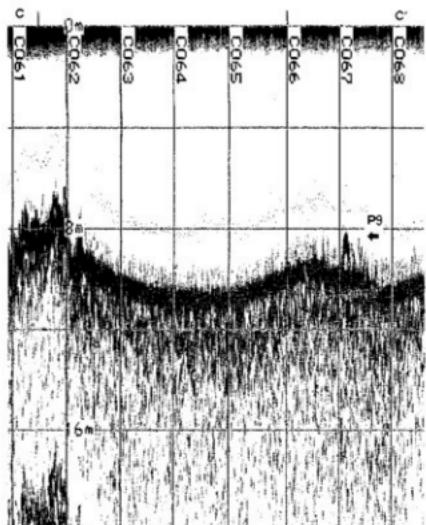


Figure 112. P-9地点海底及び地層堆積状況

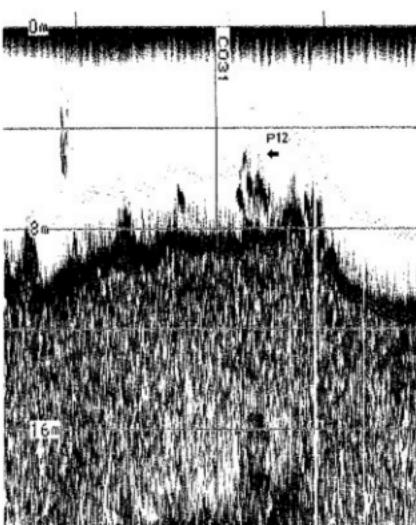


Figure 113. P-12地点海底及び地層堆積状況

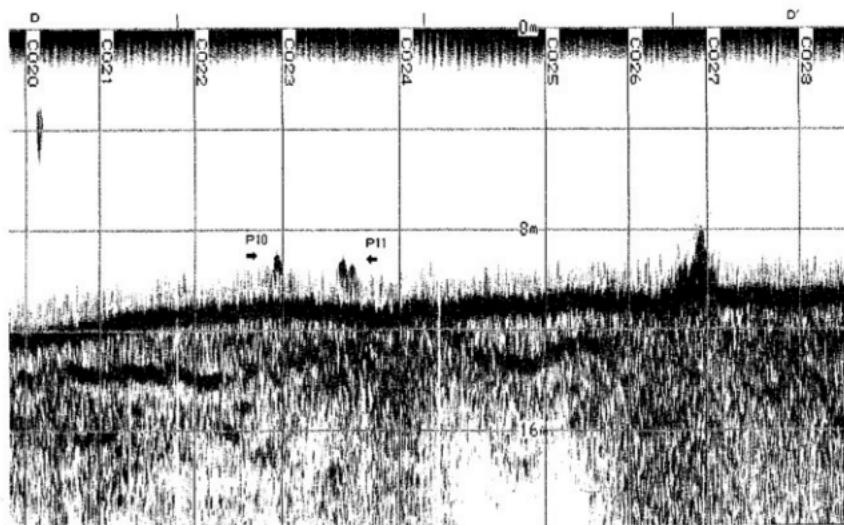


Figure 114. P-10-11地点海底及び地層堆積状況

海底等深度線図 (Fig.106)

この海底地図は自動測量装置を使用して海底の測深を行い、GPSで位置出しを行いながら記録をする。その記録に海面の諸条件をデータとして取込み、補正しながらコンピュータに収録した後、処理したものである。その処理した記録に基づいて海底標高線（コンタ）を基本地図に書き入れたものである。

海底地形状況図 (Fig.107)

海底は調査区域の南側の一部と西側の沖合が砂層で、陸地に近い区域は岩礁や瀬が占めている。サイドスキャン・ソナーの記録と地層探査機の記録した異常反応地点P-1～4、P-9～11を基本地図に図化したものである。

P-1 (Fig.108)

調査対象区域外に位置し、P-2地点から900m南の水深10mの砂層上にある。海底から突起物が離れて記録され、その上に3～4mの高さに2段状になった走査線の黒い固まりが記録されている。突起物の真下の海底面は僅かであるが両側の海底面より下へ延んでいる。海底下は平坦な堆積状況を呈している。異常地点は漁業区域であり、勝馬沖の近海には数多くの漁礁が沈められている。それが廃船されたものである可能性もある。P-2と類似した現れ方を記録から読み取れる。

P-2 (Fig.109)

P-2は水深12mの海底の砂層上に浮いた状態で記録されている。この記録には走査線の黒い2組の固まりが並列して、海底面より浮いて2段状になって4mの高さで現われている。P-1と同様に突起物の真下の海底面が僅かであるが両側の記録に現われた海底面より下へ延んでいる。海底下は異なる土層が平坦な堆積状況を示している。漁礁としての構造物か廃船の可能性がある。更に漁師の投網した網がこの突起物に掛かっているとも思われる。

P-3 (Fig.110)

P-3の異常反応は水深11～12mの砂礫層の海底面から突出して認められる。海底面から走査

線の2段状の黒い固まりの突起物が浮いた状態で高さ4mに達して記録されている。この突起物の記録に現われた状況もP-1、P-2と類似している。更に突起物の真下の海底面の状況もP-1、P-2と同様である。海底下の堆積状況は平坦さを欠き、堆積層に段差が記録され、左側の堆積層は突起物の右側で海底面に現われている。右側の層は左側の層の下に入り込んでいる。これも漁業関連の構造物か廃船と推定するのが妥当であろうと思われる。

P-4 (Fig.111)

P-4は水深約10m斜面の疊層の斜面の位置で記録した突起物である。記録に現われた状況は海底面より走査線の黒い固まりが高さ3mに達している。僅かに海底面より離れて見える。更にこの突起物の直ぐ右側に平行して現われた海底面からの突起物がある。この付近の海底は下馬ノ浜にむかって次第に海底が浅くなり、右上がりの緩斜面には瀬や岩が海底面から突き出していることが記録から読み取れる。突起物の真下の海底下の堆積層は薄く海底面近くに岩盤の層がみられる。地層探査機に現われた海底の突起状態は人工物とは言い難い。

P-9 (Fig.112)

P-9は水深約11mの海底面から離れて記録されている1～2mの突起物である。岩場の間に広がった洋地の南北斜面にあり、人工物の可能性を窺わせる。

P-10・11 (Fig.114)

P-10、P-11は水深12m前後の砂礫層の海底面から離れた黒い固まりが1～2mの突起物として記録に現われている。周囲は平坦な海底面が続いている。海底の堆積層は突起部の右側で海底面へあがる。

P-12 (Fig.113)

P-12は調査区の北側の岩礁地帯の水深8mの海底で記録に現われたものである。

金印公園沖海底探査区域 (Fig. 115)

調査の概要

海底探査を行った区域は金印公園前面に広がる博多湾の海底で、探査の記録は南岸より300m、西岸より700~1000mの範囲で収集した。これらの探査記録は基本地図（福岡市都市計画図（1/2500）の弘97と金印98）に書き入れた。

海底等深度線図 (Fig. 116)

叶ノ浜の北には蒙古塚（H・I-29区）のある海へ突き出た岬があり、この地点は陸上から海底に延びた根がある。金印公園の西側にも海へ張り出した岬（L-33区）があり、岬の先端はやや南寄に海底に押し出され、その海底に瀬が西側に向けて点在する。この付近の海底は海岸から沖へ向かって緩斜面をなしている。

海底地形状況図 (Fig. 117)

この調査区域の北側は海岸から海底へ岩場が続、南北に長く延びる。この岩場は4mの高低差の斜面となって西側の砂地へ落ちる。砂層の海底は平坦で、緩やかに西側に向かって下る。金印公園の両側の岬の海底は岩場・礫層が存在

し、緩やかな砂礫層の傾斜面が続き、沖合200m以南では砂層の海底状況が現われる。

海底地層探査 (Figs. 118・119)

金印公園の75m沖 (Fig. 118) の探査はK・L・M-34区の海底記録である。この海底には岩・礫層が東から西へ150m程延びる3mの落差のある傾斜面があり、この地点を過ぎると海底も緩やかな下りとなる。この地点から海底に堆積したシルト層がみられる。更に西へ200m地点では砂層の海底下にシルト層の堆積が厚みを増す。海底面には異常反応は認められない。250m地点では堆積層は4mの厚さとなり、堆積層も数層からなる。堆積状況には大きな乱れはない。金印公園の175m沖 (Fig. 119) の記録はL・M・N・Q-35区の海底記録である。砂礫層の海底は岬のある陸上地形を反映し、公園の東側の岬が延びている。この地点を過ぎて西側は100mにわたり2mの高低差をもつ斜面が続、これより西側では緩やかに下っていく。この地点から海底下の堆積層は厚くなる。海底面及び海底下には異常反応は見られない。

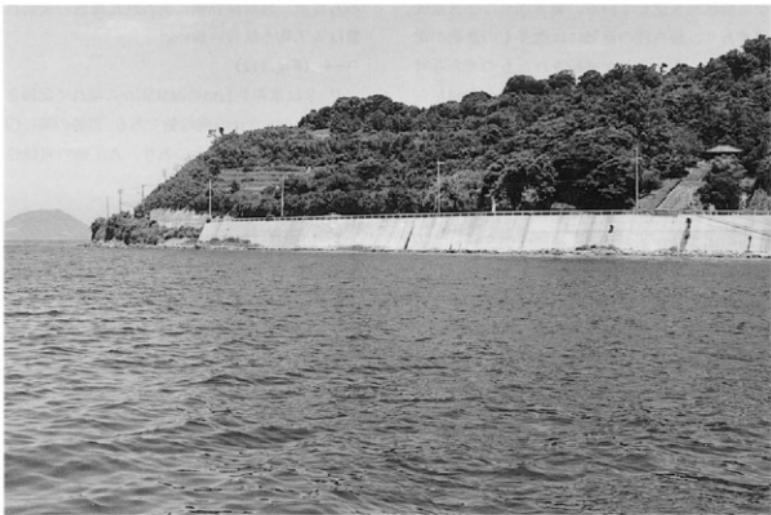


Figure 115. 金印公園沖海底探査区域（東から）

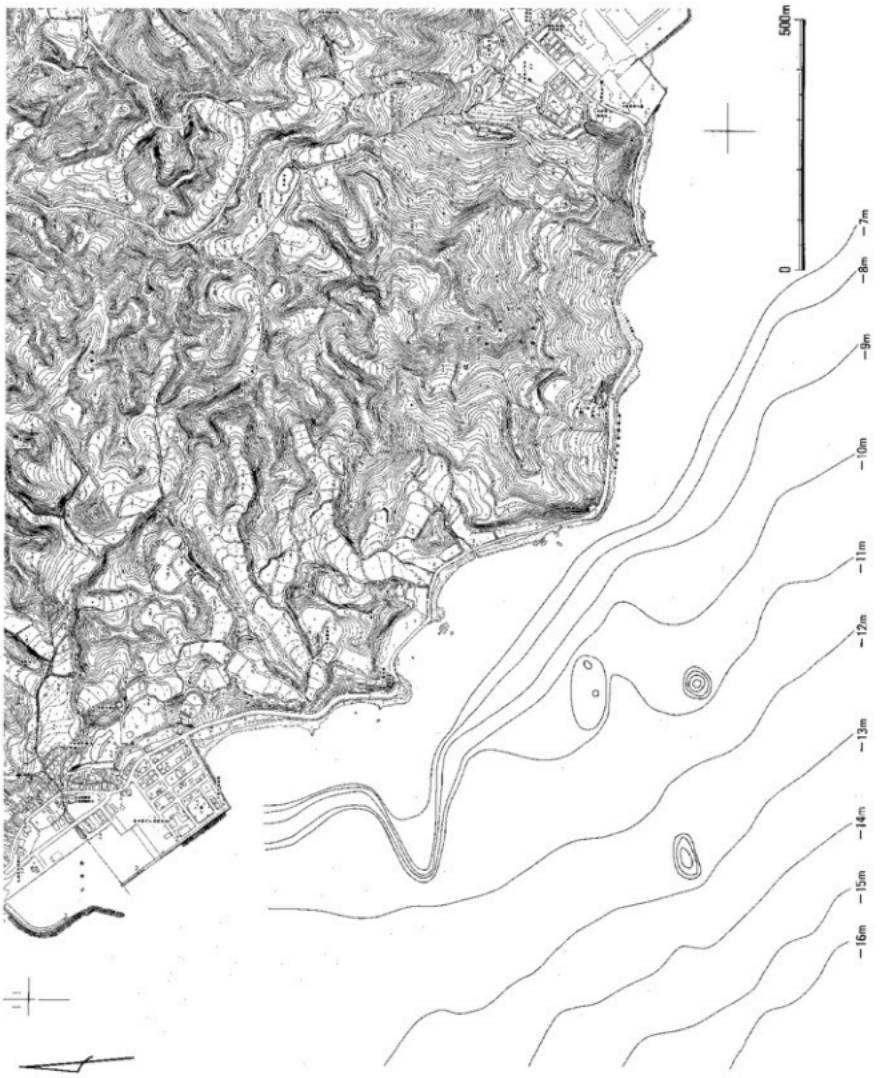


Figure 116. Jinji Park coastal area bathymetry map (1:10000)



Figure 117. Jinping Park Beach Topographic Map (1/10000)

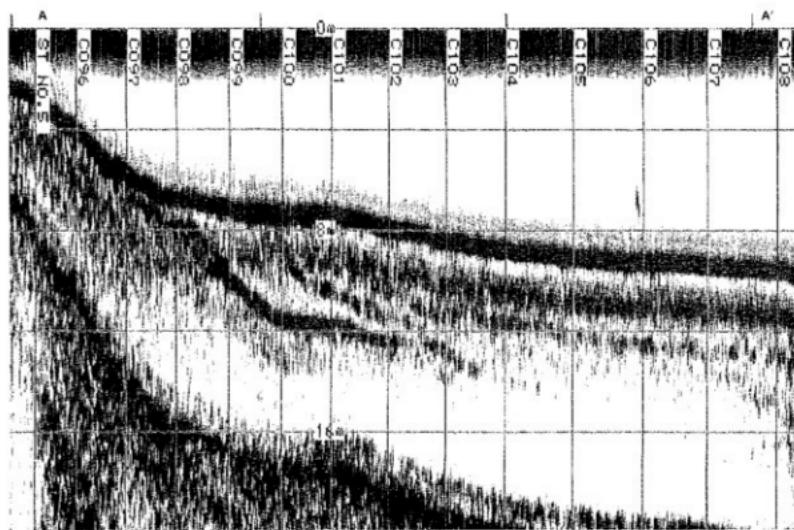


Figure 118. A-A'地点海底及び地層堆積状況

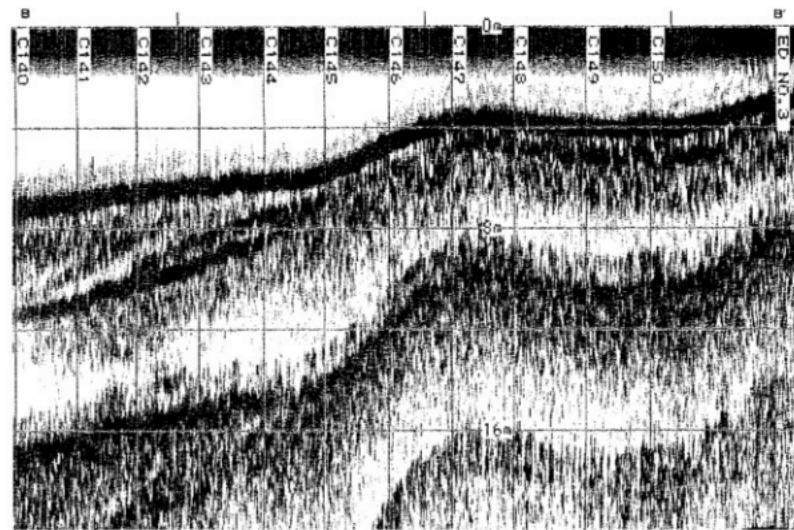


Figure 119. B-B'地点海底及び地層堆積状況

2. 玄界島の海底探査

調査の概要

玄界島海底探査では対象海域の選定に関して、最大の理由となり得たものは福岡市立歴史資料館が1984年に行った玄界島南西海岸の遺物散布地の確認調査である。今回の海底探査では遺物の存在が明らかとなっていた地点を中心に、その周辺海域で行なったものである。海底探査は玄界島南西海域の海底面及び海底下の地層堆積状況を地層探知機で記録し、更にこの記録をサイドスキャン・ソナーによる海底の地形状況の記録に重ね合わせ、調査区域の海底の地形、地質的様相を立体的に把握すると共に、それらの記録を図化した情報が「玄界島海底調査(探査・潜水調査)」の基礎的な成果となった。

今回の海底探査は遺物の散布地の海底及び周辺海域の海底を総合的に診断し、その結果を踏まえて潜水調査を行なう為の海底の記録を取ることであった。潜水調査区域は海底探査の記録を基に作成した海底地形状況図と陸上から測量

して設定した潜水調査範囲の地点を福岡市道路台帳(1/500)に基づいて作成した地図に印し、これら二種類の地図に載せた海底記録を今回の事前総合調査の基本地図である(福岡市都市計画図(1/2500)の玄界島北部123、玄界島南部124)に記録した。(Figs. 121・122)

潜水調査区域周辺の海底状況と潜水調査をした海底の出土遺物状況との相関関係を知ることは、今後の水中調査の手続きや調査方法に大きく貢献することになる。その相関関係としては、(1)遺物の分布状況と海底探査で記録された異常反応とその反応した地点との関係。(2)遺物の散布地と海底地形の関係。(3)玄界島海底遺跡の立地と調査海域の地理的環境(海底部・陸地部)などが考えられる。玄界島海底遺跡の性格をこれら(1)~(3)に挙げた諸関係の整合性より把握し、この海底遺跡が沈没船とその積み荷の遺物が存在する遺跡なのか、或いは沈没船は存在せず、船の積み荷のみが存在する遺物散布地の遺跡なのかどうかを評価しなければならない。玄界島海底遺跡周辺の海底探査の意義はこのよ



Figure 120. 玄界島海底探査区域遠景(南から)

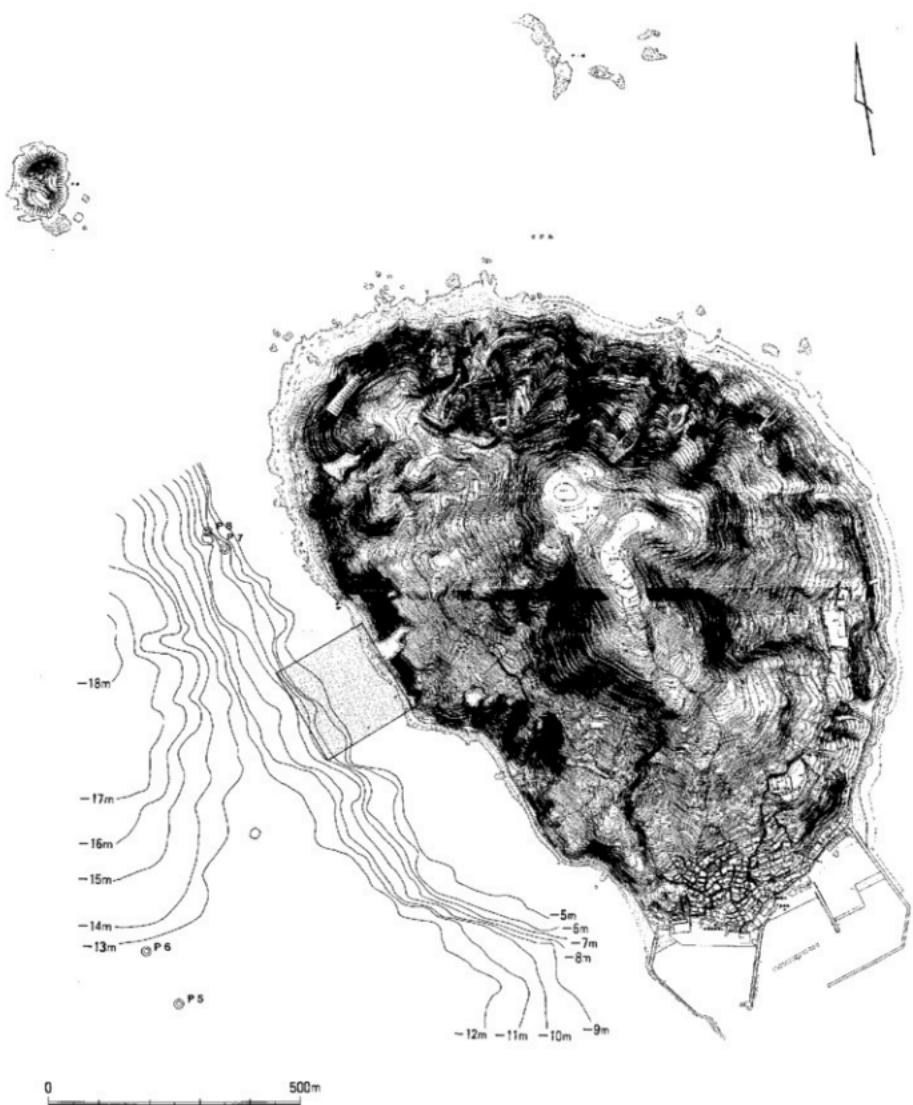


Figure 121. 玄界島海底等深度線図 (1/10000)

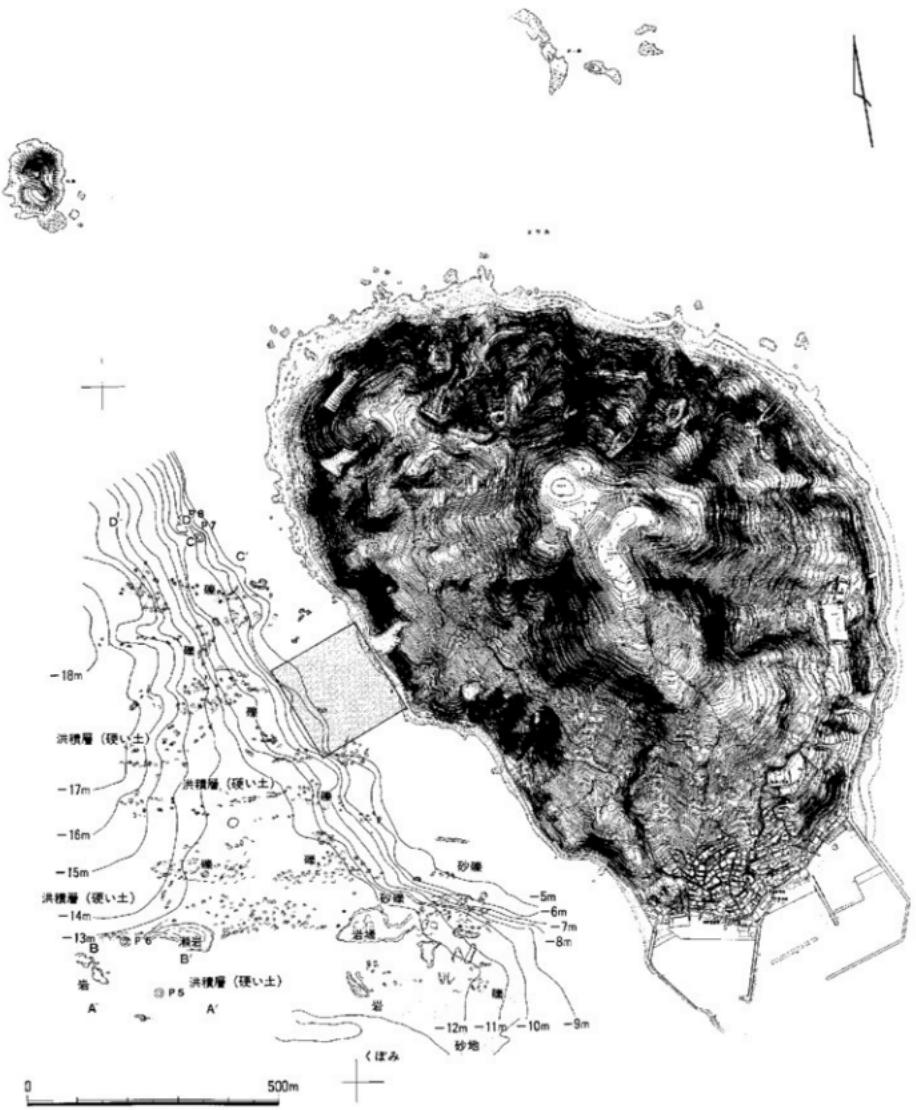


Figure 122. 玄界島海底地形状況図 (1/10000)

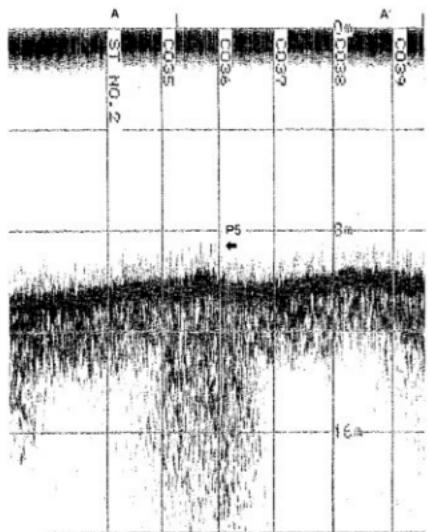


Figure 123. P-5地点海底及び地層堆積状況

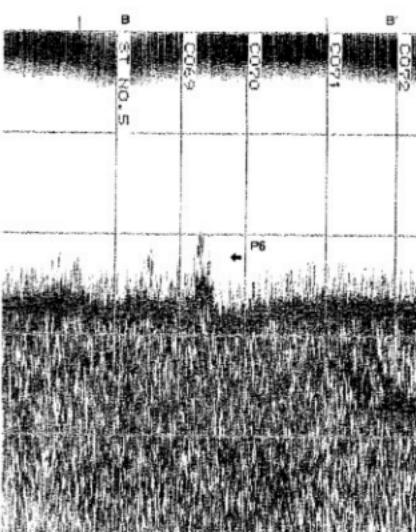


Figure 124. P-6地点海底及び地層堆積状況

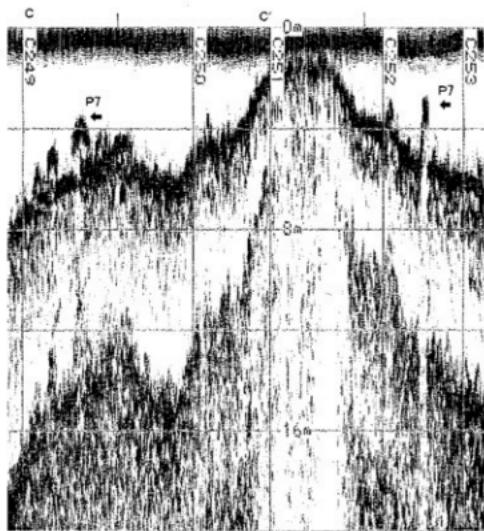


Figure 125. P-7地点海底及び地層堆積状況

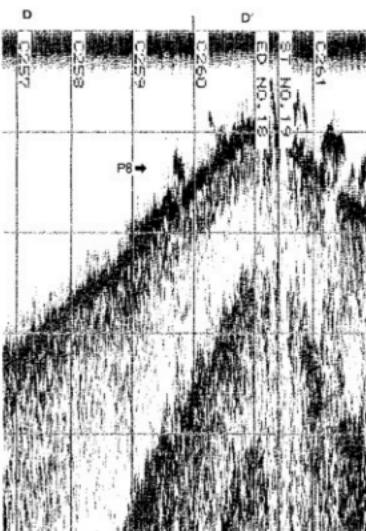


Figure 126. P-8地点海底及び地層堆積状況

うな調査目的から窺えるであろう。

海底探査区域 (Fig.120)

探査区域は潮流も波も比較的穏やかで、この調査海域の探査は志賀島の海底探査に比べると恵まれた。探査は調査対象区域を50m間隔で調査船を東西方向に走らせ、きめ細かい海底面及び海底下の堆積状況の記録を取った。しかし海岸部には潮間帯が広い範囲で出現している。更に洗岩、暗岩もこの付近の海底には多いため、調査船の海岸部への接近は危険と判断し、陸地より100m沖迄の海底探査は控えることにした。

海底地形状況図 (Fig.122)

海底地形状況図によれば南側調査区域、300m沖合には層状に南に向かって開く標高12~13mのほぼ平坦な海底が存在する。その層状の先端は狭くなり、さらに100m程東へ海岸寄りに潜水調査区域がある。平坦な地域の底質は一様ではなく、玄界島陸地から沖に向かって複数の礁、岩場、瀬岩が平行して東西方向に延びている。その間には洪積層の硬い土（砂質土層）が堆積している。この平坦な海底の調査区域の西端に近い地点で、探査機器に異常反応と思われるものが記録されたのがP-5である。さらに125m程北側に離れた礁層の海底で記録された異常反応として記録されたのがP-6である。この地点は平坦な海底の線に位置している。調査区域のはば中央の海底は等深度線 (Fig.121) が集まる。その近くには標高12mの海底が急激に-8mまで上の高さ4mの崖が地層探知機及びサイドスキャナ・ソナーの記録に現われる。この段差の裏側の斜面は次第に標高を下げ50m程西側にくだり、-13mの等深線まで落ちる。この海底の段差は50m離れた直ぐ南側にはない。しかし北側では50m離れて存在するが、1~1.5mの段差に減じる。更にこの段差北東へ約0.5~1mとなり、段差は消滅する。調査区域の北半分区域は等深線の間隔は狭く、海底は砂礫層・砂層である。

潜水調査区の海底地形状況の把握は探査によるデータでは十分でなかった。但し潜水調査区域を設定した調査区西側端から50m程内側まで

の等深度線の記録の図化はなし得たが、サイドスキャナ・ソナーによる海底面の地形的特徴は殆ど図化できなかった。これは技術的な問題ではなく、探査調査船の潜水調査区域での航行の安全を考慮した結果である。

海底地層探査 (Figs.123~126)

P-5 (Fig.123)

記録に現われ、異常反応と評価されたP-5は標高12~13mの平坦な海底面にある。海底の底質は砂層もしくは砂質土層である。異常反応地点として記録されている黒い固まりの走査線には僅かな高まりが見られる。反応地点真下の海底の堆積状況では薄い堆積を記録している。しかし海底下の走査線が大きく下方に向けて長楕円形を呈する。この記録から砂層の表面に硬いものが落ちているか、もしくは岩が埋もれないと判断されよう。異常反応地点南側の10m離れた地点では海底に全く異常反応は現われていない。海底堆積状況は砂層が緩い堆積をしているものと思われる。

P-6 (Fig.124)

P-6の反応は砂層若しくは砂礫層の海底面から2m程の高さに突出したものである。これは岩が落ちて砂に埋もれたのではないかと思われる。

P-7 (Fig.125)

P-7における異常反応は海底斜面に鎖状の黒い固まりの1~1.5mの突起物として海底面から少し離れて二か所に突き出している。さらに探査船が調査海域で転回し、再び異常反応地点付近を通過したとき再び細長い突起物が海底から遊離して記録されている。異常反応地点の真下の海底は白く抜けている。堆積層は厚くなく、岩盤が海底面付近まで上がってきている。斜面にある瀬の可能性もある。

P-8 (Fig.126)

P-8は海底斜面上に記録され、海底面より僅かに離れて1~1.5mの高さに突き出ている。記録に現われたこの異常反応は海底斜面に発達している比較的規模の大きな転石或いは瀬と見做すのが適切であろう。

3. 玄界島の潜水調査

調査の目的

今回の潜水調査の目的は玄界島南西海岸の周辺海域で水中考古学の学問領域で調査を実践し、遺跡の範囲や遺跡の性格を把握することである。更に玄界島海底遺跡の潜水調査では海底出土遺物の引き上げはおこなわず、今回の調査では1984年に福岡市立歴史資料館によって行なわれた玄界島海底調査(註1)による出土した遺物以外の器種を確認するためにサンプルとして700点程度確認した遺物より17点のみ引き上げることにした。

調査の概要 (Figs. 127・128)

玄界島海底遺跡 (Fig. 127) は島の南西タケノシリ・ミズノシタ海岸の沖合200m迄の海底 (Fig. 128) に所在する。1984年の海底調査で既に17世紀初頭～前半期の唐津碗・皿などが分布していることが確認されている。今回は調査を始める前に散布地の範囲を事前に把握し、潜水調査区域を正確に設定する必要があったので予

備調査を5月14日に行った。1984年の調査を踏まえて200×200m (40,000m²) の調査区域を設定したが、この予備調査では遺物の散布が調査区域の南端は殆ど認められなかったため調査区を50m北側に移動した。200mのベースラインを海岸に設定し、基準点より50m毎に陸地から沖にφ1mmのスチール製のワイヤーに10m毎の黄色テープを付け、そのテープに距離を示す数字を10、20、30…印したものを200m延ばした。調査区域をさらに50×50mのグリッドに分け、16小調査区を海底に設定した。グリッドには沖の南端隅よりアルファベットを付けた。グリッド位置を潜水中に確認するためのアルファベットを印したブロックをロープの交点に置いた。調査はAグリッドから始め、B、Cの順で行なった。確認した遺物には金属の串に1mの長さの紐を結び、先端に小さな浮きを付け、遺物の脇に付けた。

註

註1 塩屋勝利「玄界島の海底陶磁」福岡市立歴史資料館研究報告書第12集 1988



Figure 127. 玄界島海底遺跡潜水調査区域（南から）

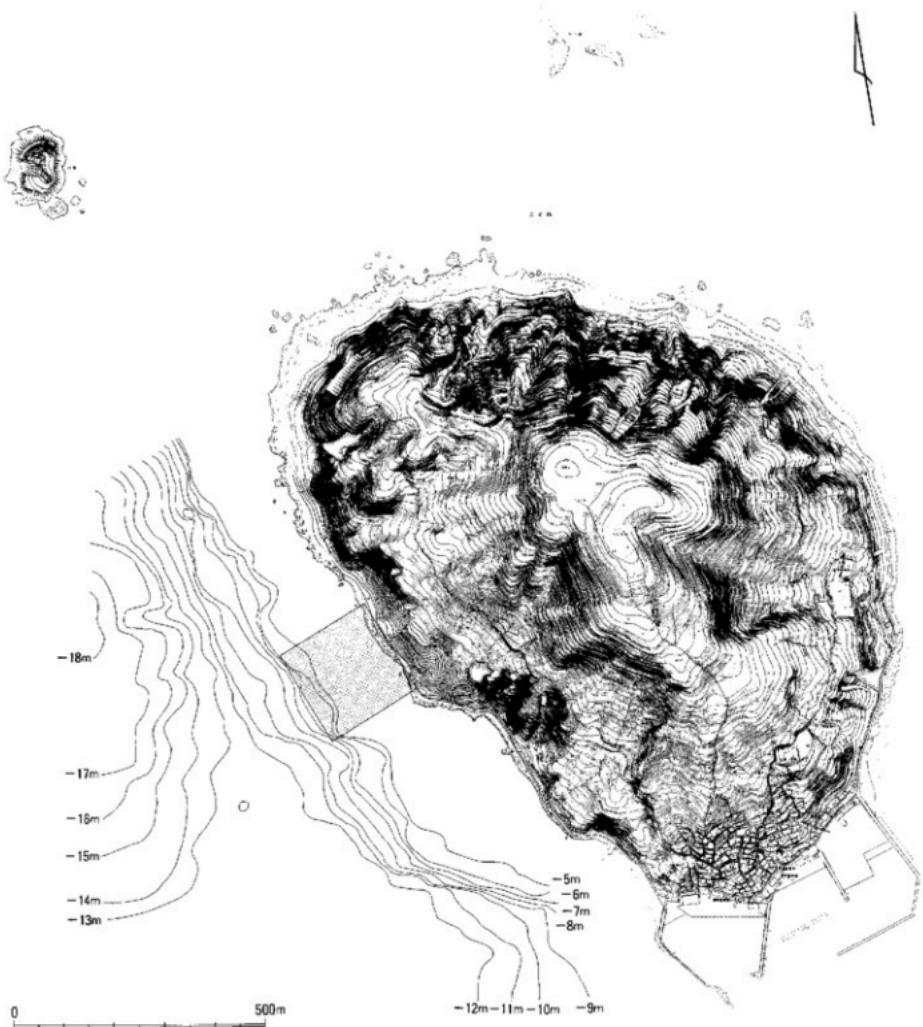


Figure 128. 玄界島海底造跡潜水調査区域図 (1/10000)

調査の方法 (Figs. 129~131・133)

50×50mのグリッド16区を200×200mの調査区の海底に設定 (Fig. 129) し、各グリッドにはA～Pを印した。調査区域の範囲を示すマーカーの赤い旗を境界線上の海面に50m毎に設置 (Fig. 130) し、調査区を囲み、潜水調査作業区域を内外に周知させ、作業区域に他船の侵入を防ぎ、安全な潜水調査作業を行なった。

遺物の確認作業では各グリッドに潜水し、5～10m幅に海底面を目視しながら遺物を探し、発見した遺物には目印のブイを付けた。海岸に近いグリッドM～Pの4区は潮間帯 (Fig. 131) にあり、潜水調査の必要はなかった。遺物が集中して確認できた地点ではその遺物の出土位置を計測して、出土状況を写真で記録した。調査区域で最も遺物が集中していたグリッドDとH区の0～10m間では確認した遺物全てにブイをつけ、2m毎に100mの測量ロープを5本平行して張り、遺物出土状況を連続写真に撮った。遺物出土位置の計測はロープの目盛りを起点に行なった。遺物の引き上げはこの区域で出土を確認した250点から器種がこれ迄不明であった遺物を含



Figure 130. グリッド・マーカー設置状況



Figure 131. 宝界島海底遺跡潮間帯の状況

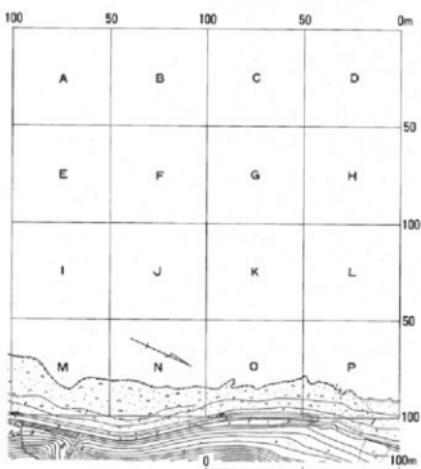


Figure 129. 潜水調査区域グリッド設定図 (1/2500)

めて15点を選んだ。更に婧壺1点をA区から、B区より肥前系白磁碗1点を出土状況を記録して引き上げた。

遺物の分布状況 (Figs. 132~134・135)

グリッドB区・C区・F区・G区の一部とG区の30×30mの範囲の海底が1984年の調査以後に漁礁として波消し用のブロックが多量に設置され、遺物の確認が不可能となった。調査区域内で遺物の出土しないM～P区を除き各グリッド毎に遺物の分布状況 (Fig. 132) を見ていくと、A区ではE区との境で婧壺が2点出土する。B区ではA区、F区の境で婧壺、白磁碗が其々出土した。C区ではD・Eとの境で皿1、E区ではI区との境で皿が8、F区では中央付近で皿3、J区との境で皿が8、G区では遺物は不明。I区ではE区、J区との境と中央部付近で皿19、碗15、鉢1、白磁碗1、器種不明が4点出土した。J区ではI区、F区、K区の境付近で皿22、碗

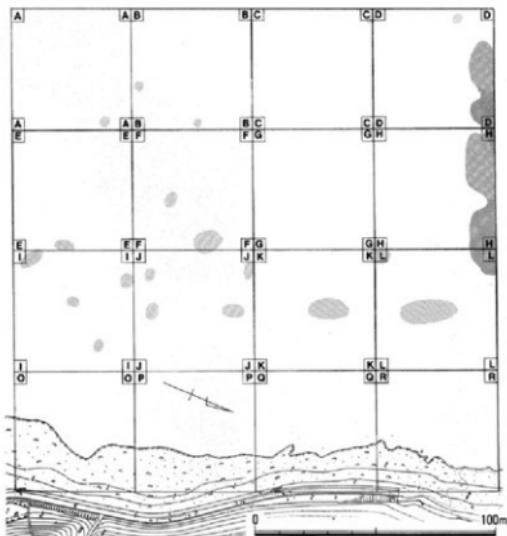


Figure 132. 出土遺物分布図 (1/2000)



Figure 133. グリッド・ロープ海底設置作業状況

18、壺1、器種不明が11点出土した。K区では中央付近で集中して皿66、碗117、鉢2、壺7、器種不明が4点出土。L区では隅と中央付近で皿19、碗57、白磁碗?が1点、器種不明が5点出土する。最も遺物の集積の高いグリッドはD区とH区である、特に北側の調査区域外との境付近での0~10mの間では出土遺物(Fig. 134)が著しく多い。D区では皿82、碗5、壺5出土。H区では皿171、碗22、壺或いは瓶13、大皿2、甕1が出土した。また調査区域のすぐ外側では数多くの遺物を確認している。その内大皿4、甕1がある。更に皿など數十点(大皿5、費油甕1、皿4を含む)程確認できた。今回確認し得た調査区域内の遺物の総数は694点となった。前回の出土遺物を合わせると889点となる。これに区域外の遺物を含めれば恐らく1000点を超えるものと予想される。この分布状況から唐津陶器はA区、B区から出土せず、C区からは1点のみである。しかしD区、H区、K区、L区で

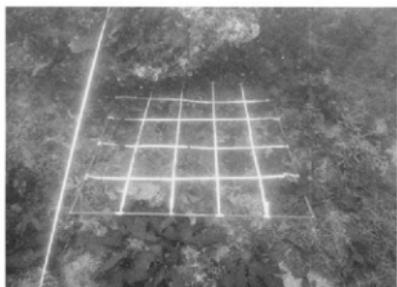


Figure 135. 海底遺物分布状況調査

は出土量が他の区より極めて多い。更にD区、H区では2~4枚が重なった皿を確認している。器種としては最も多く、全体の約62%を占める。碗は約33.7%となり、皿と碗の2器種だけで全器種の95.7%を占めることになる。皿と碗の出土区域の傾向は皿ではD区とH区とで58.7%、K区とL区とで19.8%を占める。碗ではD区とH区とで11.1%、K区とL区とで71.6%を占める。この数値は器種により船に積み込む荷の位置の違いを表していると考える。

海底出土遺物 (Fig. 138)

1 (Figs. 137・138) は蛸壺である。底部は欠損しているが、底は塞がない。頸部はくびれ、この部位に紐を結びつける。外面は茶褐色~暗褐色の釉が施され、肩部には重ね焼きの溶着が残る。玄界灘地域では現在殆ど使用されていないが、長崎県鷹島町では現在でもこの形の蛸壺が新しいタイプに混じって使用されている。これ以外にも蛸壺片 (Fig. 144) が20m南西のA区とB区の境界付近で出土している。

2 (Figs. 139・140) は肥前系白磁の碗で、1/2が残存する。疊付以外は釉を施す。

3~4は唐津系皿である。3 (Figs. 141・142) は2枚重ね状態で検出した。窯で重ね焼きを行い、離さずに船上に積み込んだものである。他にも今回の調査で皿4枚 (Figs. 143) 重なった状態で出土している。

4 (Figs. 145・146) は唐津系皿である。外面胴部下位~底部以外は淡緑灰色施釉がある。

5~8は唐津系の大皿である。

5 (Figs. 147・148) は外底部以外は黒褐色~暗褐色の施釉、内底には砂目跡がある。

6 (Figs. 149・150) の釉は剥離している。疊付に沈線が巡る。

7 (Figs. 151・152) の内底は重ね焼きの痕跡が巡る。外面胴部には淡褐色釉が残る。

8 (Figs. 153・154) はD区の北側調査区外 (Fig. 134、P-18) で出土したものである。内底には砂目跡があり、外面胴部下位~底部を除いて淡緑灰色~淡褐色の釉が施される。

9~10は唐津系片口鉢である。9 (Figs. 155・156) は口縁部片に注口が張りつけている。褐色の施釉があるが、剥離が著しい。

10 (Figs. 157・158) は副部~底部片で、上げ底である。暗褐色釉が外面のみ施される。

11~13は唐津系瓶 (徳利) である。11 (Figs. 159・160) は器壁を薄く仕上げ、内面は笠状工具や指ナデによる凹凸痕がみられる。外面は底部を除き黒褐色が施され、板状工具による横方向の調整痕が釉の上にみられる。

12 (Figs. 161・162) は完形である。器壁は薄く黒褐色が口縁部内面~外面胴部に施されている以外は露胎である。外底部の端や胴部と底部の境には溶着が見られる。口径5.9cm、器高22.9cmを測る。

13 (Figs. 163・164) の器壁は薄く、内面には笠状工具によるナデ痕や底部の近くには接合痕がある。外底は僅かに上げ底となる。剥離が著しいが黒褐色釉が外面に施されている。

14 (Figs. 165・166) は高台をもつ壺或いは瓶であろう。器壁は厚く、胴部は外湾している。内面は黒褐色釉が施される。外面の釉は剥落して不明である。肩部に把手を貼りつける。暗褐色釉が全面に施され、内面には荒い接合痕がみられる。これはD区の北側調査区域外 (Figs. 134・P-19) で出土した。

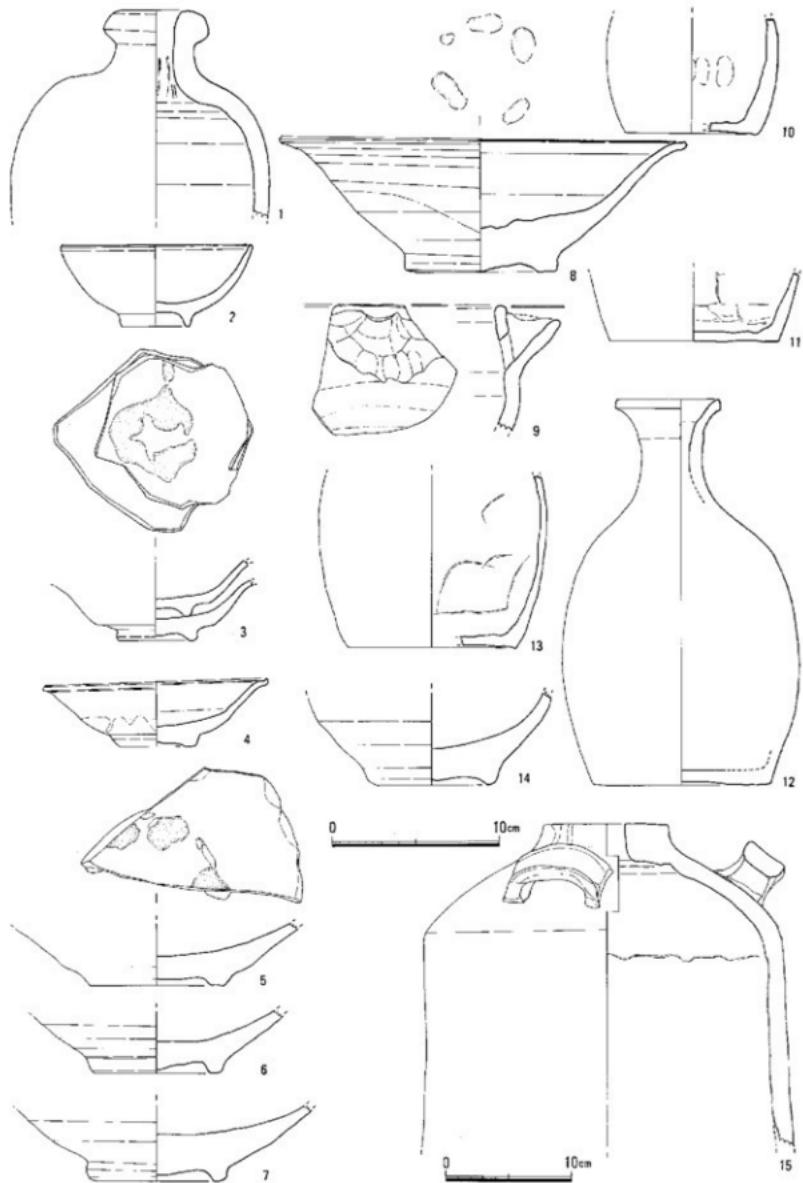


Figure 136. 玄界島海底遺跡出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



Figure 137. P-1 (A区) 銅壺 海底出土状況



Figure 138. P-1銅壺



Figure 139. P-4肥前系白磁碗 海底出土状況



Figure 140. P-4肥前系白磁碗



Figure 141. D-1唐津系皿 (2枚重ね) 海底出土状況



Figure 142. D-1唐津系皿 (2枚重ね)



Figure 143. H-2唐津系皿 (4枚重ね) 海底出土状況

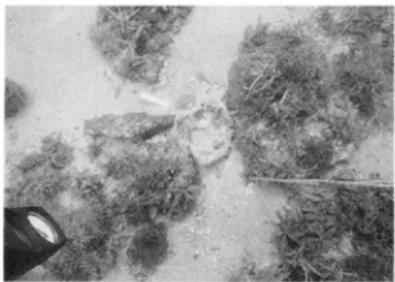


Figure 144. P-3 (B区) 銅壺 海底出土状況



Figure 145. H-1 唐津系皿 海底出土状況



Figure 146. H-1 唐津系皿



Figure 147. H-9 唐津系大皿 海底出土状況



Figure 148. H-9 唐津系大皿



Figure 149. H-7 唐津系大皿 海底出土状況



Figure 150. H-7 唐津系大皿



Figure 151. H-17 唐津系大皿 海底出土状況



Figure 152. H-17 唐津系大皿



Figure 153. P-18唐津系大皿 海底出土状況



Figure 154. P-18唐津系大皿



Figure 155. H-18唐津系片口鉢 海底出土状況



Figure 156. H-18唐津系片口鉢



Figure 157. H-6唐津系片口鉢 海底出土状況



Figure 158. H-6唐津系片口鉢



Figure 159. H-4唐津系瓶 海底出土状況

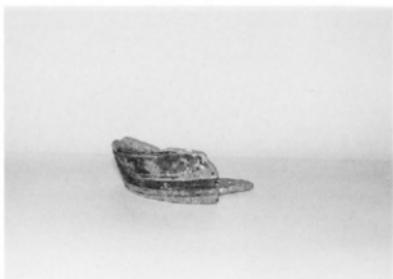


Figure 160. H-4唐津系瓶



Figure 161. H-3唐津系瓶 海底出土状况



Figure 162. H-3唐津系瓶 海底出土状况



Figure 163. H-10唐津瓶 海底出土状况

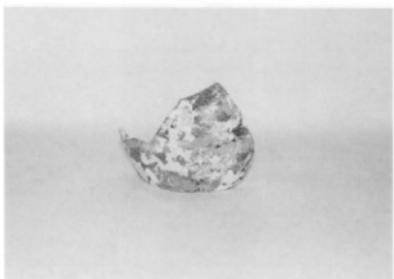


Figure 164. H-10唐津系瓶



Figure 165. H-5唐津系壺 海底出土状况



Figure 166. H-5唐津系壺

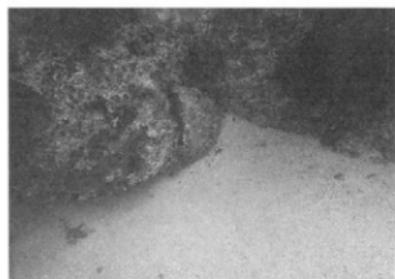


Figure 167. P-19唐津系醤油甕 海底出土状况



Figure 168. P-19唐津系醤油甕

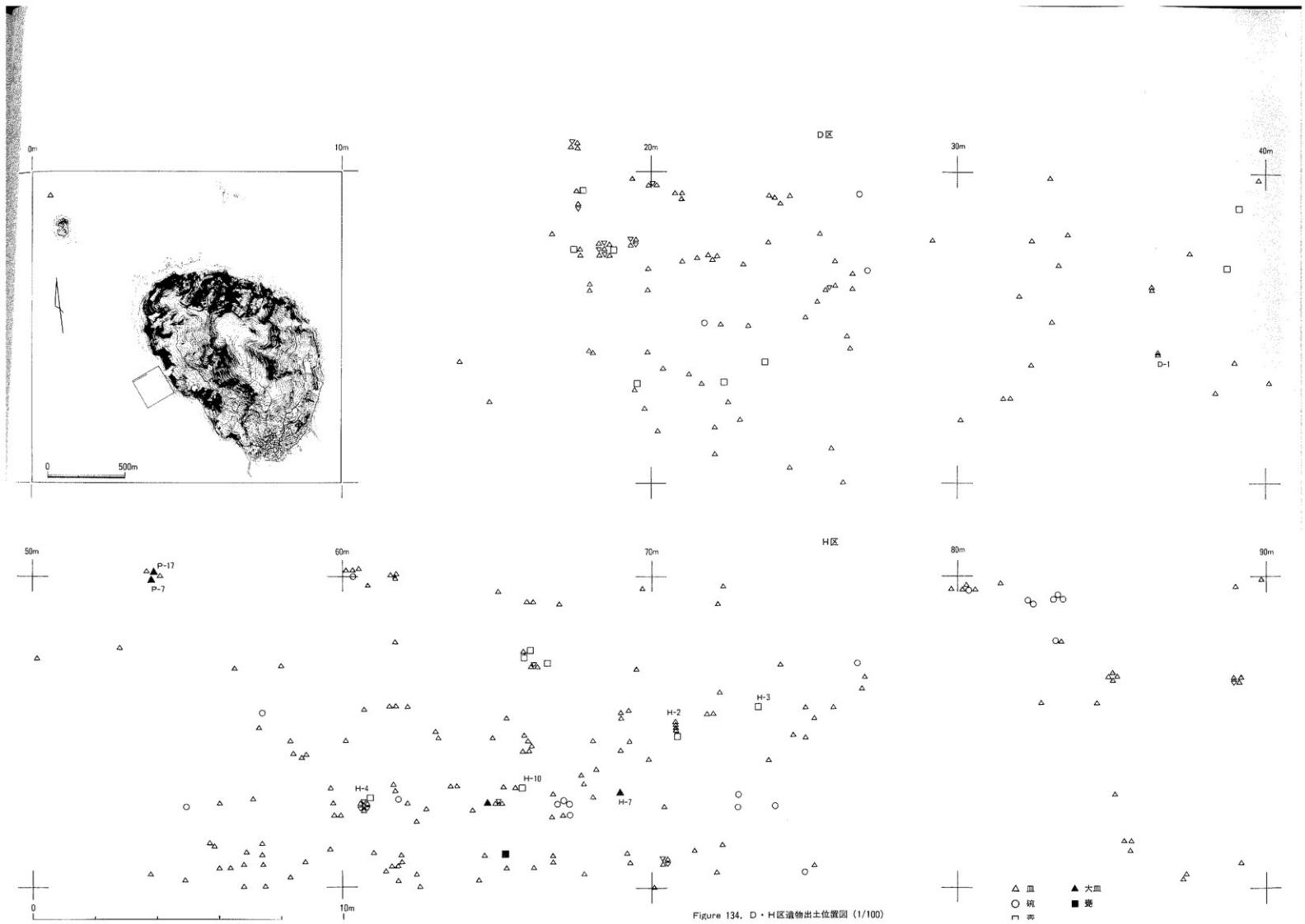


Figure 134. D・H区遺物出土位置図 (1/100)

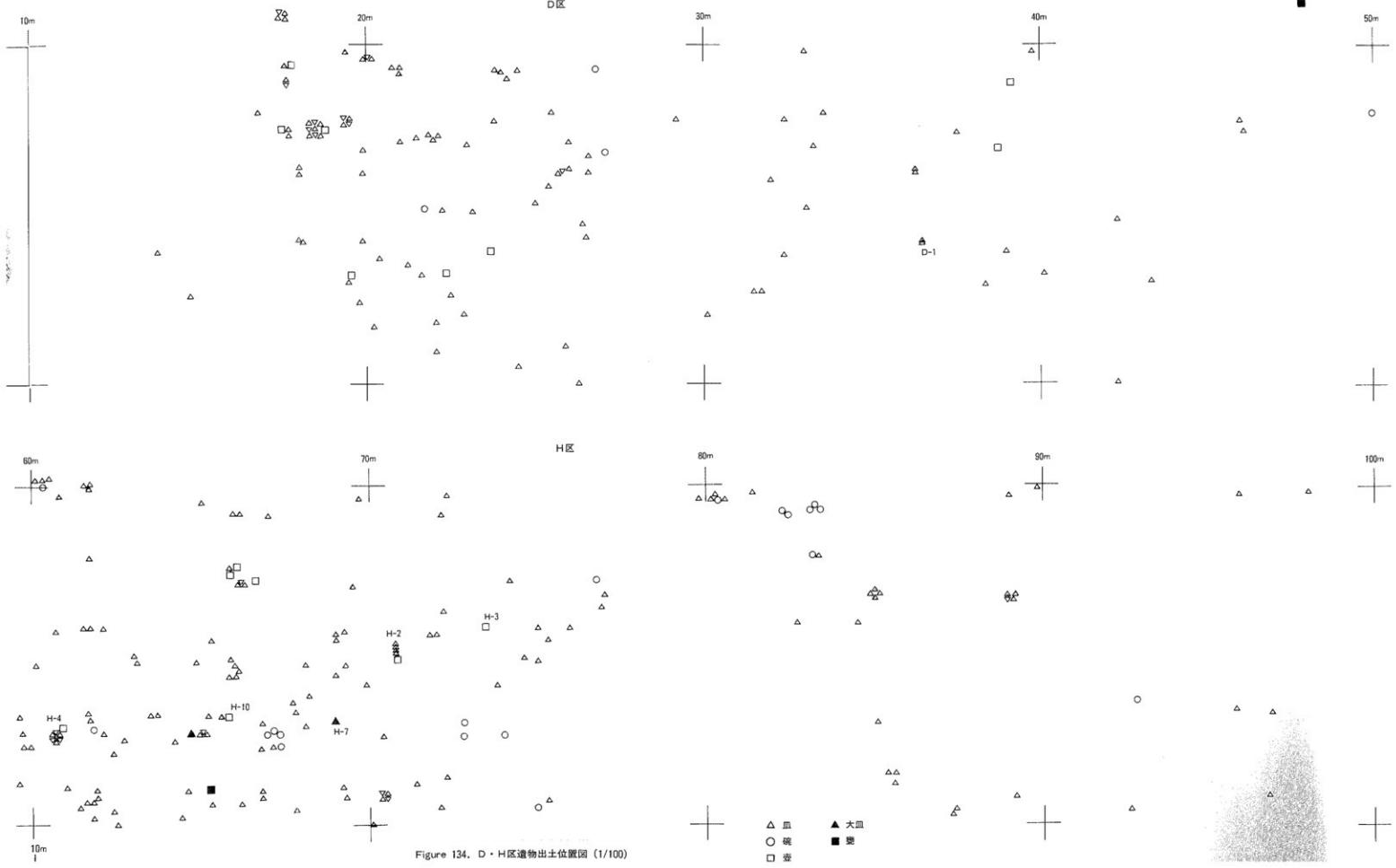


Figure 134. D + H 区遺物出土位置図 (1/100)

4. 小結

志賀島の海底探査

志賀島の海底探査は志賀島の遺跡発掘事前総合調査の海底遺跡の所在、範囲、遺跡の性格の把握を陸上調査と平行して行なった。

調査の方法として表探分布調査が海底における探査調査となる。分布調査で不可欠な精度の高い地図が海底調査では現在利用できない。今回の海底探査では現在ある海底探査機を使って、精度の高い海底地図を作成し、その過程で海底遺跡・遺物の分布調査を行なうことがこの調査の目的であった。

海底地形状況図の作成は海底面の地形特徴を図化することであるが、その地形特徴を正確に陸上のX Y座標軸の位置に印すために、人工衛星を利用して位置を計測する全地球測位システム（GPS）を利用しての位置だしを行なった。現在利用できるGPSはミリ単位の精度はもっていない。位置の誤差は数m生じる。この精度で今回の調査の基本地図とした福岡市都市計画図（1/2500）に探査による海底地形状況の記録を入れた。この海底地形状況図には地層探査機で記録した異常反応地点を印した。探査海域の基本地図作製は今回の探査目的の成果のひとつである。海底地形状況図の作成と「志賀島・玄界島」の総合調査の海底探査による海底遺跡・遺物の分布調査の意義と所見は以下の通りとなる。

勝馬沖海底探査区域

この海域で探査記録に現われた遺跡や遺物が勝馬周辺海域で古代より生活をしてきた人々に如何なる関わりをもたらしたであろうか。勝馬地区の分布調査で古代の地形復元の成果に、江戻川沖積地が弥生時代には既に良好な入江をなしていたことが挙げられる。この勝馬の入江と勝馬沖海域との関わりを海底で確認する資料を得ることでもある。更に近世には下馬ノ浜に面した中津宮丘陵西側に港の存在が認められており、近世における交通・物資運送手段として船舶の存在、活動がこの周辺海域にもあった。しかし博多湾周辺海域で船の往来を安全に行な

うために海底地形を把握し熟知する必要性が特に要求されたのは勝馬沖海域である。沖津宮から北西沖に1kmにわたって連続して洗岩、暗岩や瀬が海底にある。更に干潮時の博多湾から出していく潮流は勝馬沖でその流れを激しくし、この地点で常に潮が博多湾内外と動く。このような厳しい自然条件では遺跡（沈没船）、遺物（積み荷）などは海底に原位置を止め難い。この海域が砂礫の底質であるため海底下に遺物は埋没しない。重量のある遺物、例えば碇石なども埋没することなしに中曾根付近の水深7mの海底で検出されていることからも窺える。

金印公園沖海底探査区域

金印公園沖の海底探査では海底は礫層・砂層で、周辺海底には超音波の障害になる海底起伏や岩礁・瀬は多くない。平坦な海底はこれら探査機器を使用するには良好な海底環境であったといえる。金印公園前面沖の海は約50m幅に海底は出現する潮間帯が広がる。海底は岩・礫層である。この潮間帯では造構・遺物は存在していない。公園西側端より沖合100mの海底から西側の岬（南ノ浦）沖125m迄の東西約150mの海底は岩盤までに薄い堆積層が見られるだけである。岬より沖にでる4層の堆積層が認められる。この4層の堆積層の中に造構・遺物は探査記録からは認められない。以前この海域の潜水を塩屋、林田で行なっているが、金印出土の造構に関わる発見はなかった。

玄界島の海底探査・潜水調査

玄界島の海底探査は玄界島海底遺跡の範囲や遺跡の性格を把握する為の潜水調査周辺海域の海底状況の基礎的資料を提供した。潜水調査区域の内側で出土した遺物の出土状況、散布状況、遺跡の範囲を周辺海底地形や調査区及び周辺海域の地層堆積状況を踏まえて、遺跡の立地条件を収集し、海底遺跡は沈没船の造構であり、出土した遺物はその船の積み荷である。しかし造構（船体）そのものは残存していない。

第6章 まとめ

1. 志賀島調査の成果と課題

これまで、志賀島・玄界島の遺跡発掘事前総合調査について報告したが、志賀島の陸上の調査で得られた結果をもとに、いくつかの成果と課題を述べてまとめとしたい。

分布調査の成果について

第3章で詳述したように、今回の分布調査では從来知られていた遺物採集地を中心に細密な踏査を行うとともに、そのほかの踏査可能な地域を調査し、新たな遺跡の発見があった。島の南部の志賀島地区では、これまで知られていた高松、志賀海神社口、志賀島小学校裏、金印出土推定地のほかに、通称「ドウトコロ」と呼ばれるX・Y-28区、志賀島保育所西方丘陵上のT・S31区、叶ノ浜南側のL-31区、蒙古塚手前の谷部J-29・K-28~29区などから弥生時代から歴史時代の遺物散布地を新たに確認した。島の西部の弘地区では、從来の遺物採集地点に加え、残田川流域の扇状地から、弥生時代中期初頭の土器、古墳時代の須恵器・土師器を広範囲に採集した。とくに南部のH・I-26・27区では、弥生時代から歴史時代にいたる遺物散布地を新たに発見した。

島の中部から北部の勝馬地区は、細形銅劍鋸型出土地としても知られ、志賀島で遺物の散布地が最も多い地域である。これまで弥生時代から歴史時代の遺跡が18か所知られているが、いずれも面として把握されておらず、今回の調査は遺跡の範囲の確認に努めた。遺物が採集できた地区は、沖津宮が鎮座する沖津島周辺海岸、中津宮丘陵、通称「ふるみや」と呼ばれる表津宮丘陵、高麗窓、太刀打などのほか、江尻川流域の丘陵斜面一帯であり、弥五郎と當山では箱式石棺を再確認した。勝馬地区で遺物が多く採集できた地区は、江尻川右岸中流から上流にかけての標高30~36mの台地で、弥生時代から歴史

時代にいたる各時代の遺物が認められた。とくにN-6・7(1)地点では、厚さ50cmほどの弥生時代・古墳時代の遺物包含層を検出し、集落の存在を確認できた意義は大きい。

以上踏査を行った志賀島全島の遺跡分布状況は、南部の志賀島地区で縄文時代後期の遺物散布が見られるものの、遺跡の範囲は極めて狭い。続く弥生時代や古墳時代も同様で、遺跡は丘陵斜面に小規模に営まれている。これは沖積地が狹少な地形に起因しており、大規模な集落が形成されていたとは考えられないようである。しかしながら古代~中世の遺物の散布地も多く、集落は継続する。水田とする可耕地が無いため、海に依拠した生業を営んでいたことが考えられる。弘地区は記録の上では中世末期に養浦として形成されたと云われるが、少なくとも弥生時代中期初頭には集落が営まれたことが知られた。また、古墳時代や奈良時代の須恵器も多く見られ、集落遺跡が存在することが考えられる。勝馬地区は志賀島で最も沖積地が発達しており、遺跡数が多いことは前述したとおりである。

『万葉集』巻第十六の「筑前国志賀白水郎歌十首」の中の

荒雄らが行きにし日より志賀の海人の

大浦田沼はさぶしくもあるか

にみえる大浦田沼は勝馬にあり、現在も字名が残っている。この歌から推測できるのは、古代以前の志賀島で最も繁栄していたのは勝馬地区であったことで、遺跡の分布状況もこのことを裏付けており、今後の調査が期待される。

銅劍鋸型出土地について

勝馬の細形銅劍鋸型出土地については、森博士等の調査報告では前田遺跡(註1)、さらに金印道跡調査團の報告でも同じ遺跡名が使用されている(註2)。しかしながら当該地の小字名は「裏」で

あり、今回の報告では裏遺跡と呼称している。

試掘調査のトレチは細形銅劍出土地点の南側隣接地に設定したが、明治時代の火災の跡を示す焼土層の下の灰黒色砂質土層から天保通寶が出上り、その下は砂層となる。このことは江戸時代に宅地造成が行われ、それ以前は江尻川の氾濫原であったことを示している。弥生時代の遺物は砂層から若干出土したものの上部からの流れ込みによるもので、遺構が存在するような状況ではない。したがって、工房や集落はもっと標高の高い丘陵上に営まれていたと考えられる。

現在沖積地となっている江尻川流域は、古代においては深い入り江をなしており、このような地形的特徴は宍戸島の刈田院川に臨むカラカミ遺跡周辺に類似する。森博士も指摘されているように、志賀島の弥生時代遺跡はカラカミ遺跡と同様に、より標高の高い丘陵上に立地すると考えられ、今回の分布調査においても、標高24~44mの丘陵斜面で弥生土器や土師器の包含層を確認している。勝馬地区における遺跡のあり方は、集落等の生活遺跡が江尻川流域の丘陵斜面、石棺墓等の埋葬遺跡は独立丘陵を呈する丘陵頂部に営まれていると考えられる。

中津宮古墳について

大正初期以降の断続的な考古学的調査や、地元の方々の伝承でも志賀島に本格的な古墳が存在することは知られていなかった。ただ、志賀島の入り口に位置する海ノ道先端の独立丘陵西麓に大岳古墳があり、その内容は渡辺明大氏が報告している(註3)。大岳古墳は円墳で一部横石壠状を呈し、石室は両袖單室横穴式石室で短い溝道が付く。現在残っている出土遺物は、須恵器(匙1、提瓶1、平瓶2)、鉄製武器(刀2、鐔1、鐵2、刀子3)などで、そのほか須恵器短頸壺1、平瓶1、金製耳環4、銀製耳環4、鉄刀、鐵鎌1が出土してい

る。この古墳の年代は、須恵器の編年から7世紀初頭前後とされている。大岳古墳の性格に関連して渡辺氏は、古墳時代前期に属すると思われる弥五郎や堂ノ上の箱式石棺があるものの、首長墓の系譜は早く断絶し古墳時代後期まで続かなかったことを述べ、その理由について「後期群集墳を統合して成立させていった福岡平野の農村集落とは異なって、漁村集落的な性格の志賀島をとりまく政治状況の反映として興味深い」としている。また、大岳古墳の立地する西戸崎周辺は近世以前は無人の砂丘地帯であり、古墳を築造できる社会的背景を説明できないとし、志賀島の首長墓である可能性を示唆している。

このように、志賀島に古墳が存在することは全く知られていないかったのであるが、今回の調査で初めて志賀島にも古墳が築造されていたこ

基位: cm・g

No	外 径	内 径	芯部断面径	重 量	形 性	材 質
24	2.4	1.7	0.3×0.4	2.0	繩芯小形	銅芯のみ
25	2.4	1.4	0.3×0.4	3.0	"	"
26	2.7	1.8	0.4×0.5	6.0	中纏中型	"
27	3.1	1.7	0.6×0.7	17	太芯大型	銅芯銀張
28	2.9	1.5	0.8×0.9	18	"	"
29	3.2	1.8	0.7×0.8	21	"	"
30	3.2	1.6	0.8×0.9	19	"	"
31	3.1	1.5	0.8×0.8	18	"	"
32	3.2	1.6	0.9×0.9	19	"	"

Table 4. 中津宮古墳出土耳環計測表 (Fig. 75 : 23~31)

単位: mm

No	長さ	径	色 調	材 質	No	長さ	径	色 調	材 質
36	5.5	7.0	濃紺色	ガラス	50	4.0	5.5	青 色	ガラス
37	5.0	6.0	"	"	51	3.0	5.0	"	"
38	4.5	7.5	紺 色	"	52	2.5	5.0	"	"
39	5.0	7.0	濃紺色	"	53	2.5	4.5	"	"
40	4.0	4.0	"	"	54	3.5	5.0	"	"
41	7.0	5.5	黒 色	"	55	3.5	5.0	"	"
42	5.5	5.0	青緑色	"	56	2.5	4.5	"	"
43	5.0	5.0	"	"	57	4.0	4.0	青緑色	"
44	4.0	4.0	綠 色	"	58	2.5	3.5	淡青色	"
45	3.0	5.5	"	"	59	2.5	3.5	綠 色	"
46	2.5	5.5	青緑色	"	60	2.5	3.0	淡青色	"
47	3.0	5.0	"	"	61	1.5	2.5	紺 色	"
48	2.5	4.5	青 色	"	62	1.5	2.5	"	"
49	2.5	5.0	"	"	63	3.5	5.0	白 色	水晶

Table 5. 中津宮古墳出土小玉計測表 (Fig. 75 : 35~62)

とが分かったのである。今回発掘した古墳は勝馬の中津宮丘陵に所在するため、中津宮古墳と命名した。発掘調査の結果は第4章の2で報告したが、以下若干の考察を加えたい。

まず古墳の年代であるが、床面近くから出土した須恵器の环は、大野城市の牛頭古窯跡群の編年ではV期に当り(註4)、7世紀前半に位置づけられる。石室内埋土上部からはIIIa期の环や高台付环の續片も検出したが、弥生土器や土師器などと混在しており古墳の築造年代を示すものは考えられない。

後世の擾乱のため副葬品の量は多くないが、その中に注目されるのは耳環である。9点が出土しており、本墳には少なくとも5体以上が埋葬されたことになり、追葬が行われたと考えられる。鉄製品には鉄矛・鉄鎌などの武器類、鉄斧・刀子などの工具類があり、刀子の出土数が多いことも注目される。

本墳で最も特徴的なのは石室の型式である。この時期の通常の石室の型式は横穴式石室で、大岳古墳も同様である。このため、発掘調査の過程では、とくに狭道部と想定した南壁外側を入念に調査し、最終的に竪穴系石室であることが判明した。墳丘の形態については不明だが、積石塚の可能性が高いと考えられる。

以上を総合すると、本古墳の遺骨年代は7世紀前半後で、石室の形態等から勝馬を捷点とした海人集団の首長墓であると考えられ、大岳古墳とは系譜を異にするものである。弥生時代終末から古墳時代初期の堂山および弥五郎の箱式石棺は横石塚であり、この形態は7世紀まで受け継がれたと考えられる。しかしながら5~6世紀の古墳は今だ発見されておらず、志賀島の首長墓の系譜を明らかにすることは今後の課題として残されている。

金印出土地について

今回の叶ノ浜の試掘調査地点は森博士等の推定地に当るが、調査の結果は、当該地が少なくとも14世紀以前においては谷から流れ下る小流の氾濫原であったことを示し、弥生時代等の遺

跡が存在する可能性は全く無いことを確認できた。筆者は以前に、近世においても叶ノ浜に沿う道路が無く、さらに明治初期においても道路の西側浜寄りに水田が営まれていないことなどを調べ、『続風土記附録』絵図に合致しないことを指摘したが(註5)、試掘調査の成果は、この地点に金印関連遺構が存在しないという結論を得たことである。さらに中山博士の金印出土推定地である金印公園前道路の試掘調査でも、当該地は14世紀以前にはラグーン状の地形を呈し、それ以前の遺跡が存在する可能性が無いことが確認されている。したがって、両地点とともに弥生時代や古墳時代の遺構が存在しないという結果となったのである。

ところで、金印発見の届出文書である所謂『百姓甚兵衛口上書』に記す「叶の崎」や、『続風土記附録』絵図にある「カナノサキ」は金印公園から叶ノ浜に曲がる突出部に当ることは確実である。これは1697(元禄10)年に弘浦と志賀島浦との間で締結された漁区に関する『定』に「弘浦志賀島両網代境かなの崎也」とあり、この漁区はそれ以降踏襲され、1909(明治42)年の専用漁区でも「かなの崎」の海上部に当る俎板瀬中央石標となっているからである。この「かなの崎」は、現在の海上保安庁水路部の海図には「叶の鼻」と記されている。したがって、『百姓甚兵衛口上書』や『続風土記附録』絵図を信用するかぎり、金印出土地は現在の金印公園付近が最も適合するのであるが、試掘調査の結果とは矛盾するのである。

このように、金印出土地については文献資料と試掘調査の結果とは大いに異なり、疑問を抱かざるを得ない。金印は本当に「かなの崎」から発見されたのであろうか。ここで気になるのは『続風土記附録』本文の「明神の境地より得たる故、神賣とせん事を占ひしに神闇下らざる事再三也といふ。故に府延に呈けしとなり。」という記述である。また、青柳種信が1812(文化9)年に幕府測量方の伊能忠敬の求めに応じて著わした『後漢金印略考』には「始め此ノ金印

を掘出せし時、農民集ひてさま～論へともいかなる物とも名つくるものなし。しかすがに尋常の物ならねは民家に廻おかむも憚アリ。志賀大明神に奉納ムトテ宮司ノ坊をたのみて神龜を占ふに神慮にかなはぬ由にて遂に奉納せさりしといへり。」と記されている。これらは地元の伝承によるものと思われ、これが正しいとするならば、金印は明神の境地から出土したことになる。そこで問題となるのは明神の境地の解釈だが、広義には聖域としての志賀島全体、狹義には神社の境内などに解されるだろうが、ここでは後者と考えておきたい。そこで「叶ノ崎」が明神の境地であるかどうかであるが、現在の金印公園前道路の小字名は古戸（フルト）であり、明神の境地とは考えにくいのである。貝原益軒の

『筑前国統風土記』には「勝馬明神」と「中津明神」が記され、いずれも勝馬の地である。さらに分布調査の結果でも、弥生時代の遺跡は勝馬が最も濃密に分布する地域であり、從来の考古学的調査の成果からも金印が勝馬のどこからか出土したとしても矛盾しないと云えよう。

それでは金印の出土状況については如何に考えられるであろうか。『百姓甚兵衛口上書』には「私抱田地 叶の崎と申所 田境之中溝水行敷敷御座候ニ付 先月廿三日右之溝形リ仕直シ可申逆 岸を切落シ居申候處 小キ石段々出候内 弐人持程之石有之 かなてこニ而握り除ケ申候處石之間ニ光り候物有之付 取上 水ニ面すゝき上見申候處 金之印判之様成物ニ面御座候」と、金印発見の状況を述べている。しかし、叶の崎付近は弥生時代や古墳時代の遺跡が立地するような地形でないことは前述したとおりで、しかも金印の実際の発見者は甚兵衛ではない可能性が強いのである。勝馬の鍋島喜代次氏が所蔵する『仙崖書幅』には「天明四年丙辰志賀島農民秀治喜平自叶崎掘出」とあり、阿曇家旧蔵の『万暦家内年鑑』には「天明四年二月二十三日志賀島小路町秀次田を堀し大石の下より金印を掘出」と記されている。これらの資料から、高田茂廣氏は「この三人のうち、だれが眞の発見者であ



Figure 169. 阿曇家旧蔵「筑前国統風土記附録」絵図

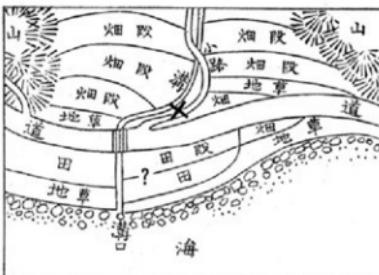


Figure 170. 中山平次郎博士金印出土推定地 (印)



Figure 171. 金印公園建設前の状況

るかということになると、その真相はわからな
いが、土地持ちの商人であった甚兵衛に雇われた秀治・喜平の二人が金印を発見し、甚兵衛が藩に届けたというのが実情ではないかと思えてならない。』と述べられている(註6)。三人のうち甚兵衛だけがその後の消息が不明で、秀治は志賀島村、喜平は勝馬村の実在した人物である。

『百姓甚兵衛口上書』は志賀島村庄屋の長谷川武藏によって作成され、那珂郡役所に提出されたものである。この長谷川武藏という人物については大谷光男氏の調査によって明らかであり(註7)、勝馬村の人で1767(明和4)年頃から1803(享和3)年までの36年間勝馬村の庄屋を勤め、この間20年にわたって志賀島村の庄屋も兼務したという。金印の真の発見者が秀治・喜平の二人とするならば、長谷川武藏による金印出土状況の聞き取りは二人に対してなされたことが考えられ、甚兵衛が登場する余地は無いのである。

このように金印出土地や発見者についても問題が残るのだが、出土状況については極めてリアルに描寫されている。すなはちその状況は「小さな石が段々に出てきて、その下に二人を持ちほどの石があり、それをカナテコで除いたら石の間に光る物があった」というもので、あくまでこれが事実とするならば、この記述から推測できる遺構は蓋石を有する石組構造のものである。この遺構の解釈についてはこれまで様々な説が提出されている。主なものを挙げれば、中山博士の隠匿説(註8)、樋本社人氏の支石墓説(註9)、水野祐氏の志賀海神社磐座説(註10)、西谷正氏等の埋納遺構説(註11)などがある。筆者は積石石棺墓説を提起したが(註12)、今回の調査結果からすれば、金印出土地はむしろ勝馬地区がふさわしいように思われ、常山や塚五郎で確認された積石塚の石棺と同様な遺構を想定するものである。

今後の課題

大正初期以来、志賀島は多くの先史や地元の識者によって研究が行われてきた。今回の調査

はこれまでの成果を踏まえて行ったつもりだが、多くの点で課題を残した。金印出土地の問題については、考古学的調査のデータと文献の記述とは全く合致せず、解明すべき新たな課題が生じたと云えるが、これについては別の機会に詳細な検討を加えたいと考えている。

しかしながら、分布調査の結果からすれば、志賀島、弘、勝馬の全地区に有望な遺跡が存在することが分かり、今後の発掘調査によって原始～中世にいたる志賀島の歴史が明らかにされることが期待できる。とくに、金印がなぜ志賀島に埋められていたのかという金印に関する最大の問題の解明や、『万葉集』に詠まれた志賀海人の活躍と系譜も辿ることができると考えられる。

註

- 註1. 森貞次郎・乙益重隆・渡辺正気「福岡県志賀島の弥生遺跡」(『考古学雑誌第46号第2号:1960年9月)
- 註2. 金印遺跡調査団「志賀島一「漢委奴國王」金印と志賀島の考古学的研究」1975年1月
- 註3. 渡辺明夫「大岳古墳」(金印遺跡調査団『志賀島一「漢委奴國王」金印と志賀島の考古学的研究』1975年1月)
- 註4. 舟山良一・平田定幸「牛頭」(『季刊考古学第42号-特集須恵器の編年とその時代-』1993年2月)
- 註5. 塩屋勝利「金印出土状況の再検討」(『福岡市立歴史館研究報告第9集』1985年3月)
- 註6. 高田茂廣「近世の志賀島-金印問題を中心に」(『福岡市立歴史資料館研究報告第9集』1985年3月)
- 註7. 大谷光男「研究史金印」(吉川弘文館1974年7月)
- 註8. 中山平次郎「漢委奴國王印の出土状態により見た漢魏時代の倭國の動静に就て」(『考古学雑誌第5卷第2号:1914年10月)
- 註9. 樋本社人「委奴國と金印の遺跡(承前)」(『考古学雑誌第45卷第4号』1960年3月)
- 註10. 水野祐「日本古代国家」(紀伊國屋書店1941年12月)
- 註11. 西谷正「金印をめぐる二、三の問題-志賀島のロマンを秘めて」(『ふるさとの自然と歴史29』1973年10月)
- 註12. 註5に同じ

2. 海底調査の成果と課題

志賀島及び玄界島における海底探査や潜水調査を「志賀島・玄界島遺跡発掘事前総合調査」の遺跡の所在、範囲、遺跡の性格などを把握する調査の目的に沿って、両島周辺海域の海底を行なった。

この海底調査で行なった探査・潜水の調査項目は(1)海底地形状況図の作成、(2)海底地層堆積状況の記録、(3)海底遺跡・遺物の探査、(4)海底遺跡の潜水調査、である。これら調査の記録は本報告書の第5章「志賀島・玄界島の海底調査」に調査区域ごとに述べてきた。今回の探査・潜水調査の記録は膨大であるために、項目ごとに簡潔に記述した。その為十分に調査成果や調査方法の問題点、今後の課題など述べることが出来なかつた。ここではその点を考慮して若干の説明を加え、最後に博多湾周辺海域の水中調査や研究成果を踏まえて、博多湾周辺海域の海底遺跡について若干の考察を試してみたい。

海底地形状況図の作成の成果と課題

今回の海底地形状況図は海底地形の特徴を図化し、所謂陸上地図に対応する海底地図を作成することであった。海底の狭い範囲であれば、潜水して写真測量や、計測して特徴を図化できる。しかし陸地の広い範囲の地形測量を航空写真測量方法を使って図化するように、海底では超音波による測量を行い、図化することが今回の海底地図の作成方法であった。

海底面を超音波で地形特徴を記録するのが今回の使用したサイドスキャナ・ソナーである。この探査機器も日本で利用できる開発業者、探査機の性能、機器の操作、探査記録の解読と図化の能力にはばらつきがある。このことは利用する側の経済性の思いも含めて一致しないジレンマが現状ではある。今回の調査でもこの現実に直面した。

サイドスキャナ・ソナーの記録を図化した地形の特徴を白地図上に位置を決め、書き込むため精度の高い位置だしをしなければならない。

この位置だしに用いたのが今回のGPSである。これは特定の位置の緯度、経度、高度などを人工衛星からの発信される電波を受信して測定するものである。この機器を運動させ海底記録の位置を出している。記録された位置を陸上の地図X Y 座標軸に対応させ、更に自動測量装置で海底等深度線（等高線）を記録し、これらを基本地図とした福岡市都市計画図（1/2500）の地図上に図化したのが今回の海底地形状況図（1/2500）である。海底面の形状は底質と共にサイドスキャナ・ソナーと地層探査機の記録から図化をして、その形状や底質の名称を明記した海底地図状況図を1/10,000に縮小して本報告書に載せた。

現在のGPSはミリ単位の精度をもつていいない。しかし数年以内に精度は飛躍的に高くなる。このGPSを水中考古学に測量の分野で積極的に応用していくことが必要である。日本ではGPSの精度を高めたり、この機器を使った測量への応用は広い範囲で行なわれている。DGPSでは地上に新たに基準局を設置し、衛星からの電波の誤差をこの基準局からの電波で補正する方法、運輸省（第四港湾建設局）が開発している「リアルタイムキネマティックGPS」の測位方法、国土地理院が行なっている「全国GPS連続観測システム」などでは誤差がミリ～数センチ単位の精度で測量が可能となってきている。このGPSへ真摯な対応を潜水調査・海底探査の精度を高めるためにしなければならない。水中考古学はGPSの利用を積極的に進めて行く必要がある。

海底探査の成果と課題

海底地形状況図は地層探査機で得た海底面の状況と海底下の堆積状況の記録とが対応できるようにした。地層探査機の異常反応はこの海底地形状況図に位置を入れて表した。海底の遺跡や遺物を発見する為の機器としてばかりではなく、陸上の発掘調査で、土層断面図や土層の写真記録を得るという考え方でこの地層探査機を水中考古学へ応用すべき理由がある。表探分布調査を海底で行なう場合に潜水して目視による

遺跡・遺物の確認は最も確実な方法である。しかし潜水による確認方法は調査範囲が狭い海底、比較的浅い水深、十分な調査期間があれば有効な調査方法である。今回のように海底探査の調査対象面積が4.48km²の広範囲で水深が最大20mであれば探査機器を利用することになる。

定められた日時と短時間の海底探査では探査の精度や記録が調査海域の自然条件に大きく左右され易い。そのため十分な探査期間を設ける必要がある。今回の調査は2日間の探査期間を設け、志賀島海域と玄界島海域に日程を分け、勝馬沖地区、金印公園沖地区を初日に行なった。しかし調査海域がしき、勝馬沖地区探査は調査範囲を縮小し、更に探査船の走行間隔を広く取らざるをえなくなった。そのため調査海域の海底面の詳細な記録が収集できなかった。

現時点での地層探査機の水中考古学へ評価は低いと云える。地層探査機は海底面の底質或は海底下の堆積状況、層の違いは走査線の集合した黒い図まりや濃淡で記録紙に示される。地層探査機の送信周波数3.5KHzの超音波の海底面・海底下に埋没している物体に対しての分解能力は低い。探査機器として利用できるメーカーの機器にも一長一短があり、経済的に十分満足できる機器を揃えることも難しい。

探査機の水中考古学への厳密な適用と応用には幾つかの解決すべき課題がある。その課題は(1)地層探査機に現われた海底面或は海底の堆積層の中に突出物或は異常反応と判断したものなどのどのようなものに反応したのか、(2)海底の堆積層がどのような土質からなっているのか、此等を厳密には判断するのは不可能である。探査のデータを判断する基準は色々記録したデータの解釈で異なる。堆積層の中の異常反応が水中考古学が望む海底遺跡や遺物の存在を確証していないで、岩や樹木と云つるものであったりする。いったい何に反応したのか理解できない場合も多くある。この為に地層探査機を水中考古学に適用させるには数多くの探査記録とその異常反応の検証した事例を蓄積する必要がある。

海底遺跡調査の成果と課題

今回の海底遺跡調査は博多湾の西側の開口部に位置する玄界島西区域のタケノシリ・ミズノシタ海岸より200m沖までの海底である。この海底は福岡市立歴史資料館が1984年に行なった潜水調査で龍泉窯系青磁碗と古唐津陶器の散布地として確認された海底遺跡である。今回の海底探査・潜水調査で「玄界島海底遺跡」として周知された遺跡となった。

玄界島海底遺跡調査は、(1)海底探査、(2)潜水調査、からなっている。玄界島海底遺跡周辺海域で海底遺跡の立地地理を総合的に把握することができる。海底探査は玄界島南西海域の海底面地形変化及び海底下の地層堆積状況を地層探査機で記録し、異常反応地点の性格を診断した後、GPSでその位置を測り、異常反応地点をサイドスキャン・ソナーで作成した海底地形状況図にその位置を記録して、玄界島遺跡及び周辺海底の探査記録が図化され、この図化された記録が玄界島海底調査の基礎的な成果となった。その成果は潜水調査区域が海底探査の記録を基に作成した玄界島海底遺跡潜水調査区域図となつた。潜水調査区域の設定は先ず陸上から海底に延ばした測点を海底に設置した。潜水調査では次のことをその調査の目的に据え、探査記録を考慮しながら調査を遂行した。(1)遺物の分布状況と海底探査で記録された異常反応とその反応した地点との関係。(2)遺物の散布地と海底地形との関係。(3)玄界島海底遺跡の性格などの把握が可能となつた。

海底遺跡が遺跡としての沈没船が存在するのか或は積み荷だけの遺物が存在する遺跡なのか遺跡の性格を評価しなければならない。船体の一部や部材は今回行った調査区域では検出されなかつた。また沈没船の所属品、乗組員の所持品などは海底で確認できなかつた。しかしこの場合遺跡を評価する手段となり得るのが遺物の出土状況であり分布状況である。海底調査から判明したことは次のことが挙げられる。(1)分布状況に遺物の集積度の違いが認められる。(2)唐

津陶器は器種により出土位置に違いがある。(3)器種により出土状況が異なる。

出土した唐津陶器は200×200mの調査区域のA～C区ではC区の1点を除いて出土していない。海岸に近いM～P区のこれら4区からは唐津陶器は出土していない。E区、F区は出土した遺物が極めて少ない。E区は皿が8、F区は皿が11点それも隣のI区、J区に近い場所で出土している。G区の出土遺物は不明。I区は40点、J区は52点、K区は197点、L区は82点、D区は92点、H区は209点である。この出土地点と出土量との関係は沖側と岸側、D区を除いて殆ど認められない。出土量もJ区、I区、F区、E区と減少する。出土量が最も多いのはH区、続いてK区、D区、L区となる。更に北側の調査区域外のD区とII区付近にも遺物が多く認められる。調査区のD区とその北側地点から積み荷の唐津陶器が出土するが、その地点より沖側から出土遺物はない。調査区の北西350～300m付近はP-7、P-8の地層探査機で異常反応を記録した地点である。P-8の海底は標高-8mで、干満の差は2.5mはある。この地点の南には大きな瀬がある。この地点より50m北東側の海岸寄りにP-7地点がある。この付近の海底は沖からの海底斜面がやや平坦な海底になる変換地点である。標高-7mの海底は干潮時には-3.5mの水深となる。これより僅か海岸寄りになれば標高-5mラインの等高線に入る。このラインより陸側によれば船は座礁する。これらの2地点より南側の標高-8mラインより陸側の海底で散発的に唐津陶器が発見される。このことは船はこの付近から破損し始めていると考える。船はこの地点から今回の調査区のある海域へ進入した進路を出土遺物の分布状況は示している。船はD区とその北側の区域外付近からこの調査区へ進入し、H区、L区付近で船は大きく大破しながら進路をやや南に採り、K区で更に大きく船は破損し、船荷は海底に沈む。J区、I区、では積み荷が殆ど海底に沈み、大破した船は恐らく調査区域の南側端で沈没したと考える。D

区、H区で2～4枚が重なっていたり、4～6枚程がまとめて出土している皿が多く見られる。これは皿が窯の中で重ね焼きを行ない、離さずそのまま船に積んだものである。D区、H区で皿を積んでいた船倉が大きく破壊されている。更にK区で碗の積み荷が船倉から大量に海底に沈んでいる。

玄界島海底遺跡の範囲は今回の潜水調査を踏まえると遺物の分布範囲は更に北側の調査区域外に広がる。今後の玄界島海底遺跡の全容解明にはこの調査区域外の海底の調査も必要となろう。今回、玄界島海底遺跡の保存・活用にも玄界島民の意向を十分に反映しながら考える必要があろう。そのために海底遺物はむやみに引き上げをせず、後世に伝えていくためにも海底遺跡を開拓から守る必要があろう。

博多湾周辺の海底遺跡

博多湾周辺海域は古代から大陸との交渉をしてきた海域である。また国内海上交通の拠点の一つでもあった。朝鮮半島や中国大陆と北部九州、北部九州と琉球や本州との間の文物や人の往来が船という交通手段で行なわれたことは誰しも異論はないであろう。海底遺跡が船と関わりをもつ遺物が最近この周辺の海底で明らかとなっている。玄界島沖海底は潜水調査では確認していないが、中世の交易船が水深30m付近の海底で発見される期待も高まっている。また勝馬沖中曾根の西側水深-7mの海底で全長2.5mの碇石が出土している。柏ノ島付近の海底には碇石の存在が伝えられている。更に福岡県津屋崎町の玄界灘に面した曾根鼻付近の海底では肥前陶磁器が多量に発見されている。福岡県芦屋町沖の豊漁の海底からも古伊万里の陶磁器が引き上げられている。これら海底遺跡や遺物が古代から海と関わった人々の歴史を少しづつ魅らせていている。

Contents

I. INTRODUCTION	1
1. Purpose of Archaeological Survey	1
2. Organization of Survey	2
II. GEOLOGICAL AND HISTORICAL EVIDENCES OF SHIKANOSHIMA ISLAND	3
1. Geological and Historical Evidence of Shikanoshima Island	3
2. Chronological Survey Results	5
III. RECORDS OF GENERAL SURVEY	9
1. Method of Survey	9
2. Proceed of Survey	10
3. Result of Survey	20
IV. RECORDS OF TEST EXCAVATION	42
1. Excavation of Kananohama Site at Area I-30	42
2. Excavation of Nakatsugu Tomb at Area E-3・4	49
3. Excavation of Ura Sita at Area M-8	61
4. Excavation of Doyama Tomb at Area L-8	67
V. ARCHAEOLOGICAL UNDERWATER INVESTIGATIONS AT SHIKANOSHIMA AND GENKAIJIMA ISLANDS	70
1. Underwater Investigation of Shikanoshima Island	72
2. Underwater Investigation of Genkaijima Island	82
3. Underwater Excavation at Genkaijima Submerged Site	87
4. Conclusion	97
VI. CONCLUSIONS	98
1. Results and Further Considerations of Archaeological Survey at Shikanoshima Island	98
2. Results and Further Considerations of Underwater Archaeological Surveys at Shikanoshima and Genkaijima Islands	103
3. Contents	106
4. Summary	106

Summary

A Study of Shikanoshima Island consists of two parts : the first half belongs to archaeological survey at Shikanoshima Island, and the second half belongs to underwater archaeological survey at Shikanoshima and Genkaijima Islands.

The purpose of archaeological survey is to understand locations, size of settlement, and characteristics of archaeological sites and to obtain new knowledges for the archaeological remains for future land development.

There have been so far twenty four archaeological sites on Shikanoshima Island (Fig. 2). Several archaeological sites have newly been confirmed as a result of the general survey which has been done in the southern region of the island : so-called, Dodokoro Site (Fig. 44) found at area X・Y-28 and sites found at areas J-29, K-28-29 (Figs. 26,43),L-31, R-32 (Figs. 31,44),T・S-31, and R-32 (Figs. 32,45). These settlements continued to exist from the Yayoi period to the 19th century. Newly discovered site at area II・I-26-27 (Fig. 242) has been confirmed in the western region. Pottery belonging to the early phase of the Middle Yayoi period, Sue wares, and Haji wares belonging to the Kofun period have been found around here.

(Fig. 25). In the northern region, called Katsuma there have been many archaeological sites newly discovered except for cist tombs on Yagoro (Fig. 15) and Doyam (Fig. 95) hills : Okitsugu (Fig. 10) and its surrounding area (Fig. 11), Nakatsugu hill (Fig. 59), Sokotsugu hill (Fig. 13), Komabayashi (Fig. 40), Komabayashi (Fig. 40), Tachiuchi (Figs. 20-21), and the terraces along the east bank of the Ejiri river. Moreover, archaeological contexts of the Yayoi and Kofun periods have been found at area N-6・7 (Figs. 17-18).

Excavation of Kanano-hama Site at area L-30 (Fig. 50) has been carried out. This site is the place where Dr. Mori indicated that the Gold Seal with inscribed words "Kan no Wa no Na no Kokuo" on the face of the seal seemed to be buried instead of the place where the Gold Seal was supposed to have been found in the park nearby (Fig. 3). Kanano-hama Site however has not presented any archaeological evidence relating to the remain in which that the Gold Seal was buried (Figs. 51-58) and the "Kin-in" Gold Seal park did not reveal any archaeological remain belonging to the Yayoi and Kofun periods either (Figs. 4-7).

Excavation of Nakatsugu Tomb at Area E-3・4 (Figs. 59-60) has been carried out. This tomb which has been unknown in the locality was built on the Nakatsugu hill (Fig. 61). This tomb is a rectangular shaft grave surrounded by stone masonry (Figs. 64-71). It is the first evidence on the island that the burial mound (Kofun) has been discovered. Offerings belonging to the first half of the 7th century have been found on and above the floor (Figs. 72-76).

Ura Site at Area M-8 (Figs. 80-82) has been excavated in order to find the remains of the Yayoi period (Figs. 83-85); however, no archaeological evidence regarding such matter has come to light. Instead, a well dated to the late Edo period has been found with archaeological findings (Figs. 88-90).

Archaeological underwater investigations at Shikanoshima Island and Genkaijima Island have been carried out to collect data for archaeological remains and finds on the seabed and in the sediments by using instruments of side-scan (Figs. 99-100) and sub-bottom (Figs. 101-102) sonars. Simultaneously, making detailed maps of the regional sea-beds at the both northern and southern parts of the island (Figs. 107, 117) and of the seabed of the south-western region at Genkaijima island (Figs. 122). The excavation at Genkaijima submerged site (Figs. 127-128) has played an important role to understand maritime activities in the region. The remain of full of sunken cargo ship "Kai-sen" has not been uncovered, but the early 17th century Karatsu wares have been found in large quantity. Seventeen specimens (dish, large-dish, vase, Jar, and storage-jar) including an Arita white glazed bowl have been recovered for further understanding of their shapes (Figs. 137-168).

福岡市文化財調査報告書第391集

志賀島・玄界島

—遺跡発掘事前総合調査報告書—

1995年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 大野印刷株式会社

福岡市博多区桜田2丁目2番65号
